

目次

- 4-おはよう
- 7-膝枕
- 14-スイッチ
- 16-無理はいけません
- 23-彼の癒やされる方法
- 26-耳をつけたい
- 30-ポニーテールは危険です
- 35-ドッチボール大会を開催したい
- 38-水着攻防戦
- 42-童謡の午後
- 46-キスの日
- 50-キス禁止
- 52-ヴァージルの誕生日
- 56-アンジユの誕生日
- 59-おやすみ

※以下はシリアスかつ読むひとを選ぶかもしれません

- 61-何度でも、呼ぶから（アンジユの本名捏造）
- 75-迷惑な隣人（治安悪め・他宇宙の王が女王に横恋慕します）
- 88-今の自分が、一番（治安悪め・ヴァージルの過去捏造、執着するモブがいます）

おはよう

「おはようございます、アンジュ、今日も宇宙一かわいいですね」

「……おはようございます、ヴァージルは今日も元気でですね」

共に眠って迎える朝のお決まりの科白だが、いまだに慣れないし、慣れる気もしない。

起き抜けとは思えぬ清々しさと澁刺さを遺憾なく発揮する恋人に、アンジュはかすれた声で返す。

いつもならすぐ行くという朝のジョギングは、共に過ごす夜はアンジュが起きてから行くので、まだ彼も寝間着のままだ。

だというのにこの無駄なほど完璧な状態はなぜなのだろう。

こちらは起き抜けで声はガラガラで（いや、原因はいくらか……でもないほど彼にもあるのだけれど）顔はちよつとむくんでる気がするし、髪の毛も跳ねているに違いない。

今さら寝起きを見られて恥ずかしいと言うつもりはないが、しかし、この落差は少々もやつくのも事実なのだ。

もそもそと半身を起こすと、気の利く恋人はすいとコップに入った常温の水を寄越してくれる。

ありがたくもらうと、カサついた喉にしみるようだった。

空調はよく効いていて、室温も湿度も最適化されているけれど、それでも起きてすぐから快調、とはいかないものだ。——普通は。

「ヴァージル、いつ起きたんですか」

常備している飴をひとつ口に放りこんでから問いかけると、笑顔のまま、少しだけ視線がうろついた。

「——ヴァージル？」

さつきより強めの口調で問いかけると、はあ、とため息がひとつ。

「そうやって睨む姿もかわいいとか、あなたは俺を朝からどうしたいんですか」

「話をズラさないでください、いつですか」

それなりの長さをすごしてきたのだ、対応のしかたは覚えてきている。

だから逃がすまいと言葉を重ねると、渋々といった様子で答えてきた。

「……三十分くらいです」

アンジュには嘘をつきたくないと言っていたので、信じてもいいだろう。前後三十分くらい誤差だと言いはりそうだが。

「ちゃんと眠って身体を休めてくださいって、いつも言ってますよね？」

放っておくとヴァージルは、アンジュが眠るまで

起きているのは当たり前、その後も心ゆくまで寝顔を眺めて、起きるまで見つめていたいと早起きしてしまう。

「毎日一緒にいるわけではないが、これではあまりにも身体に悪い。」

「だからアンジュはその都度、彼にきちんと休むよと言っているのだが、効果はあまりない。」

「仕事に支障をきたすほど睡眠時間を削っているわけではないですよ」

「実際、アンジュが理想とする睡眠時間より少ないというのに、彼は眠そうな顔もせず、むしろ常よりバリバリ仕事をこなしてしまう。」

「以前の暮らして慣れているというし、短時間の睡眠でも問題ないひともあるが、やはり心配なのだ。」

「これから長い時間を、隣ですごしていきたいと願っているのだ、健康でいてもらいたい。」

「……あんまり寝ないようなら、一緒に寝ませんからね」

最後の手段を用いると、彼はそれはそれは絶望した表情になった。

「そんな！」と悲鳴を上げるが、だったらちゃんと眠ればいいだけのことだ。」

「あなたと毎日夜をすごせたとしても、見飽きないのに、数日おきなんですから、少しくらい、いいじゃないですか」

「それが少しじゃないから言ってるんです」

「傍から見れば——いや、自分でも大分バカッパルだと自覚しているし、もうない口論だが、譲るわけにはいかない。」

「もう一緒に住めばいいんじゃないやね？」と虚無の顔をした首座にすすめられていることは、絶対に秘密にしておかねばならない。」

「嫌なわけではないけれど、もうちょっとだけ、恋人気分を味わいたいのだ。」

「同じ邸で暮らすとなると、それはもう結婚前提の同棲みたいなもので、暮らしは変わらないが気の持ちようというやつだ。」

「普通の生活は望むべくもないと理解しているし、嫌なわけではないが、それっぽいことをあきらめたくもない。」

「ゆくゆくはと思っても、まだ先にしたいのだ。」

「……顔を見ていたいのには私も同じです、だから、ヴァージルだけ見てるのは不公平です」

「アンジュはほとんど彼の寝顔を見られない。頑張っても先に寝落ちすることがほとんどで、目覚ましの力を借りねば起きられないからだ。」

「だから、ちよつびり——いや、大分、不満がある。これを指摘されるとヴァージルも弱いらしく、次の言葉はなかなか出てこない。」

「それに、他の惑星に行く時、万一睡眠不足でなに

かあつたりしたら、嫌です」

聖地での業務ならまだいい、しかし、アクシデン
トの予測がつかない派遣時は、万全の調子で行つて
ほしい。

派遣の前夜は一緒にすごしたいと甘えられるから、
以前から気になっていたので。

やがて、降参したのはヴァージルだった。

「……あなたの言うことのほうが、全面的に正しい
ですからね……努力します」

「全然、信用できませんけど」

「でしょうね。ですが……悲しませるのは、不本意
なので」

紫の瞳をやわらかくなごませて、男性にしては綺
麗な指がそつと頬をなぞる。

どうやら、自分は想像以上に真剣な表情をしてい
たらしい。

ちゅ、と親愛をこめたキスをひとつ送ると、先に
ベッドを降りて手をさしのべてくれる。

「とりあえず、俺が元氣な証明を兼ねて、ジョギン
グに行きませんか？」

ヴァージルと同じ量はとてもこなせないが、ある
程度までは並走することもできる。

気持ちをしつきりさせるためにも、運動はいい案
に思えた。

べつに喧嘩したわけではないが、リセットは必要

だろう。

「そうですね、コースはおまかせしても？」

「ええ、勿論」

手を乗せれば丁寧にエスコートしてくれる。

ただ走るだけではなく、ちようど見ごろの花があ
る場所などを選んでくれるのだ。

その日の調子をよく見極めて、適切な距離も考え
てくれる。

朝から一悶着はあれど、実のところこういうやり
とりはよくある話で。

ああだこうだ言いあえるのも、ヴァージルだから
なのだろうと小さく笑って、まずは寝癖を直すべく
洗面所にむかうのだった。

膝枕(女王試験時)

昼をとうにすぎ、時刻はそろそろ帰宅にむけて
算段を整えはじめのころ。

ノックをして入室を請えば、すぐにいらえがあり、
中へ入る。

「こんにちは、ヴァージル」

「いらつしやい、アンジュ」

にこやかに出迎えてくれる部屋の主は、秘密の恋人でもあるヴァージルだ。

ここへくる用事がある時は、なるべく遅く、もつ
と言うなら最後に回すようにしている。

そうすれば、次の予定を気にせずにすごせるし、
遅くなれば送ってもらえる。

少しでも長く一緒にいられる大義名分になるのだ
から、ずるくなつてしまうのだ。

ヴァージルもそのあたりはわかっているので、遅
くなつても文句は言わず、むしろ嬉しそうに招いて
くれる。

ただ、あまり暗くなると心配ですとは言ってくる
けれど。

その都度、飛空都市なら問題ないでしょうと返す
のだが、そういう危険だけではなくて、と議論は平
行線のままだ。

見慣れた執務室へ数歩入って、アンジュは違和感
に首をかしげた。

「……なんだか、いい匂いですね？」

部屋中には穏やかな香りが漂っている。

覚えのあるものだったのでしばらく考えて、あ、
と正解に行きついた。

「ラベンダーですね」

「ええ、これを手に入れたので」

ばさ、という音とともに目の前に現れたのは、大
量のラベンダー。

飛空都市の気候は一定に保たれ、湿度もあまり高
くない。

ベースであればドライフラワーをつくろうとする
と、冬場以外はあれこれ考えなければならぬが、
ここなら吊すだけで大丈夫だろう。

見事なものだと感心していると、趣味で花を育て
ている家族からもらったのだという。

行きがかりで子供の世話をしたお礼らしい。

微笑ましい話題に顔をほころべたが、そうして
ばかりもいられない。

「ええとそれで……育成の相談なんですけど」

タブレットにデータを表示させて、先に仕事の話
をする。

さしたる時間にもかかわらずに話は終了し、これで今
日すべきことは片づいた。

ヴァージルはラベンダーをひとまずといった様子で机の上に置いており、アンジュにそばのソファへ促す。

遠慮なくすわると、彼は奥のミニキッチンへむかった。

いつものようにお茶を用意してくれるつもりなのだろう。

手伝おうと申しでたことも何度かあるが、「この部屋ではあなたをもてなしたいんです」

と熱心に懇願されて以来、おとなしく待つことにしている。

アンジュという時は一瞬でも目を離したくないと視線の圧がものすごいくらいなので、背中を眺める珍しい機会でもあるから、悪くない。

微かな茶器の音、お湯の沸く気配、テーブルから漂ってくるラベンダーの芳香。

無駄のない動きなのは、運動能力が優れているからだろう、見ていて気持ちがいいくらいだ。

服装や調度品が現実離れしているが、穏やかな空気は緊張感をほぐしてくれる。

女王試験で一日動き回った身体にそれらは抜群の効果をもたらしてくれて、どんどん瞼が重くなっていく。

だめだ、と必死に我慢していると、支度を終えたヴァージルがもどってきた。

一式を載せたトレイを置くと、当たり前のようにアンジュの隣にすわる。

背丈が違うので、アンジュの頭はヴァージルの肩あたりだ。

至近距離に着席したので、自然に寄りかかるようなかたちになる。

ポットを見つめるヴァージルの整った横顔を眺めて――

「……あれ……？」

「ああ、目が覚めましたか」

ぼんやり瞼を開けると、なぜか上からヴァージルに見下ろされていた。

寝起きの働かない頭はその理由に思い至らず、うんと唸ってころりと姿勢を変えようとする。

なんだか妙に固い枕だな、と考えて――違和感に気づいた。

そもそも自分はヴァージルの執務室にきて、ソファにすわっていたはずだ。

彼がお茶を煎れると言い、用意しているのを見ていて――そこから記憶は途切れている。

慌てて起きようとしたのだが、それを見越していたのだろう、ヴァージルの手がやんわりと動きを阻んでいた。

「いきなり起きると危ないですよ」

穏やかな声は寝起きの頭にも柔らかく響く。寝落ちしてしまつた事実によく思い至り、アンジュは頭を抱えなくなつたが、現状ではそれも叶わない。

「ごめんなさい、寝てしまつて……」

とにかく謝つたが、ヴァージルはにこにここと気にしたふうもない笑顔だ。

「俺の前でだけなら、いくらでもどうぞ」

むしろ嬉しくてたまらない、といった様子に、そういえば前もそんなことを言われたと思ひ出す。

流石に、彼以外の執務室でこんな真似をするつもりはない。

疲れていたら訪問自体をとりやめることだろう。

ヴァージル相手なら強硬するのは、疲れたと素直に言える相手だからであり、少しでも会いたいという恋人に対してはごく当然の欲があるからだ。

「でも、どうして膝枕に……？」

起きあがるタイミングを逃してしまつたので、そのまま会話を続ける。

ヴァージルはアンジュの髪を梳きながら、事情を話してくれた。

ハーブティーを用意してテーブルへもどつた時は、アンジュはすでに船を漕いでいたらしい。

そこでとりあえず隣にすわり、肩に寄りかからせ

てみた。

しばらくはそれで落ちついていたのだが、ある時ぐらりと頭がかしいで、そのまま膝の上に乗つたのだという。

「どうしたものかと思いましたが、眠つたままだつたので」

だから膝を明け渡しました、と説明されて、そこまでして起きなかつた自分が恥ずかしくなる。

「ですが、あなたが眠つてしまつたのは、俺のせいでもあると思うので」

「ヴァージルの？」

「正確にはこれ、ですね」

呟きながら彼が手にとつたのはさっきのラベンダーの束だ。

いわく、ラベンダーの香りは眠気を誘うこともあるので、運転の時はそばに置かないようと注意されるほどだという。

たしかに、疲れていたのは事実だが、それにしても呆気なく眠つてしまつた。

その一因には、ラベンダーもあるのだろう。

「俺の膝枕では寝心地が悪いと思つたんですが、起きなかつたので……」

なにせ筋肉質ですしね、とおどけて言うが、それほど居心地が悪いとは感じない。

たしかに固いが、世の中には高反発枕もあるもの

だし——とは、流石に口に出さなかったが。

「でも、ヴァージュールの匂いがするから、いい感じですよ。好きです、膝枕」

アンジュとしては思ったことをそのまま口にしただけなのだが、それを聞いた途端、ヴァージュールはおなじみの深いため息を吐いた。

がっかりとうなだれて手で顔を隠してしまったので、下から覗いても表情はうかがえない。

たっぷり十秒呻いたあと、ようやく手は離してくれたが、頬はまだ赤く、反面表情は怒っているように映る。

けれど今のアンジュには、それが照れからくるものだとわかっているの、恐くもなんともない。

「ベッドに連れていけない俺の忍耐力を褒めてくださいね、——触れている時に迂闊なことを言われると、肌を暴きたくなるものですから」

膝枕でよかった——と甘く責められて、背筋を走ったのは期待に近い感覚だったなんて、とても彼には打ち明けられない。

それこそ、ベッドに直行コースだろう。

女王試験の間に恋人同士となったとはいえ、試験は最後まで続けると決めた。

二人の時間をつくりはするけれど、それはあくまで女王候補としてやるべきことをやってから。

一線を越えるのはもってのほか——と、どちらか

らともなく決めている。

「ごめんなさい」

たしかに軽率だったと縮こまると、ヴァージュールは苦笑いをこぼしてから、身体を曲げてアンジュの額にキスをした。

「いいんですよ、そういうあなたもかわいらしいので。それに——膝枕をするのは、はじめてだったので新鮮でしたし」

「はじめて？」

驚きの事実、キスへの羞恥心は飛び、覚えず高い声を出してしまった。

なにせヴァージュールは顔がいい、スタイルもいいし、言葉遣いも丁寧で、それだけ見れば物腰穏やかな王子様のような人物だ。

恋人もいたと言うし、膝枕のひとつふたつ、するのにもされるのも経験済みだと決めつけていたのだが。

あまりに驚いた顔をしていたのだろう、またかわいいですね、と蕩けた顔で呟かれてしまった。

流石に会話がしづらいので、ようやく膝から起きあがる。

「膝枕、されたこともないんですか？」

まさかそんな——と確認をとってみると、あっさりはい、と頷かれた。

小さいころに家族にされたかもしれませんが、つけたされたが、記憶にない上に身内なら数に入れ

なくともいいだろう。

意外な事実だが、つまりそれは、彼の膝を堪能したのは自分だけということだ。

さぞかしモチただらう恋人に、実は妬いているアンジュとしては、かなり嬉しい話ではある。

しかも、されたこともないというなら、次にとる行動はこれしかない。

「じゃあ、次は私が入ります。どうぞ、ヴァージル」
スカートを通して、ぼんぼんと膝を叩いてみせると、きよとんとした顔になる。

アンジュの顔と膝を交互に見つめること数回、

「……俺が、膝枕を、されるんですか？」

やたらと単語を区切って問いかけられて、こちらが面食らう。

そんなにおかしな提案だったのだろうか。

むしろ、自然な流れだったと思うのだが。

「嫌ならいいですよ」

やたらと過保護なヴァージルだから、頭を乗せて重たくさせてはだとか考えたのかもしれない。

無理強いをしてまでではないので、なるべくやんわり告げたつもりだったが、彼は食い気味にいいえと首をふる。

「してください、ぜひ」

まるでこれから戦場に行くような真剣な表情なので、ただの膝枕だよね……？ と内心で自問自答し

てしまった。

ともあれ、させてくれる気になったらしいので、どうぞ、と再び膝を叩いた。

「……では、失礼します」

おそるおそるといった様子で、ヴァージルが頭を乗せてくる。

しばらくちよいどいい位置を探すように微妙に身じろいで、やがてなんと落ちついたらしい。

珍しく見上げられる構図に微笑むと、いつもの照れた表情を見せたが、迂闊に動けないからだろう、顔の角度は変わらない。

さっきされたように髪を梳いてやると、徐々に力が抜けていき、膝に感じる重みが増した。

「——不思議な感覚です」

やがての言葉に、そうですね？ と首をかしげてしまう。

たしかに実生活で頻繁に行うことではないが、そこまでだろうか。

「だってこの状態では——簡単に寝首を搔けるじゃないですか」

「………はい？」

恋人同士の穏やかなひとときのはずが、あまりにも温度の違う物騒な単語が飛びだしてきた。

頭の中で文字を反芻し、変換して、ようやく意味は把握する。

理解はしたものの、まったく意味がわからない。「ここから無反動で身体を起こすのは結構大変ですし、頭も首も無防備ですからね……簡単に殺れます」
 淡々と、なんの感情も見えない説明。
 それはとりもなおさず、ヴァージルにとって日常だったことだから。

——時々、こういうことがある。

生きてきた世界どころか星が違う彼は、内乱の多い地において、争いは日常だったという。

非常識が常識の最たる飛空都市にいるから、日々今までの尺度で測れないものごとに出くわしていたけれど、今のこれはそれともまた異なる。

あ、と声が漏れて、ヴァージルがあからさまにしまった、という表情になった。

遅ればせながら、彼も自分の発言に気づいたのだろう。

このままでは彼に謝らせてしまう、それは駄目だ。「……ある意味、そうかもですね」

だからアンジュは先回りして、悪戯っぽく微笑んでみせた。

それから、彼が言葉を発する前に、さっきの真似とばかりに身体を曲げて——けれど今度は唇に自分のそれを重ねあわせた。

唇同士を微かにふれさせる、他愛のないものだけけれど、そこにありつただけの想いをこめて。

平和な世界にいたアンジュには、この場合なんと声をかければ正解かはわからない。

けれど、なにがあってもヴァージルを想っていることは、まぎれもない事実だから、それだけが伝わればいいのだ。

「こういうことをすると、ヴァージルはいつも、俺をどうしたいんですか、って言いますものね？」

勢いにまかせて前髪を払い、普段はあまり見えない額にも、ついでにキスを落とす。

案の定ヴァージルは赤面して、それから見事に膝から落ちた。

どしゃ、と間の抜けた執務室に音が響く。「だ、大丈夫ですか？」

まさか落下するとは想像していなくて慌てたが、即座に無反動で起きたヴァージルは、そのままアンジュを抱きしめた。

さつき大変だと言っていた気がするが、どう見ても簡単そうだとつっこむ暇もない。

床とソファという若干の差があるため、抱きしめられているのにヴァージルの頭が見えるという、いつもと少し違う状態だ。

「……本当に、あなたといると、息を止められそうになります」

アンジュの胸のあたりに顔を埋めたヴァージルが、囁くようにこぼす。

表情は見えないが、多分、今は見ないほうがいいのだろう。

「でも、あなたが愛しすぎて、気絶している暇もありません」

顔を上げた彼の目は、まっすぐにアンジュを見つめている。

ここにいるのは、ただ、自分だけを求めている恋人だ。

それ以上でも、それ以下でもないし、——それでいい。

「目を閉じる間だって惜しいくらい、あなたをずっと見ていたい——」

生理現象のまばたきにすら喧嘩を売る発言は、いかにも彼らしい。

こらえきれずに小さく笑うと、ヴァージルもふわりと笑ってくれる。

「お茶を煎れ直しましょう、遅くなりますが、ちゃんと帰りは送りますから」

「はい、お願いします」

だから今は、もう少しだけ、恋人同士の時間を満喫しよう。

スイッチ

宇宙という存在にとっては、星ひとつもたいした大きさではない。

さらに人や動物に至っては、たとえばうっかり踏みつぶしても、気づかないほどごく小さな存在にしかない。

瞬きが光年の宇宙意思と交信をしていると、ひととしての感覚は勿論、ややもすれば己すらも曖昧になつてしまふそう。

このまま宇宙に溶けてしまふそうで、けれどひどく甘美に思えるのだから困つてしまふ。

とはいえ宇宙意思も、そこまでは望まないらしく、ぎりぎりでもどつてはこられるのだが。

求めているのはあくまで女王という、ひとの意思を保っている存在。

感情が存在する生命がれば面倒なのではないかと思うのだが、宇宙意思の考えは女王でも少しわからない。

ただ、交信していると、本能的に納得するので、それでいいか、となるのだけれど。

交信には慣れてきたものの、浮遊感だとか、どこか乖離した感覚が残ることもある。

先代までの女王たちは、一体これをどうやって御

してきたのだろう。

……もしかしたら、御しきれなかったゆえの短い在位期間なのだろうか。

なんの引き継ぎも行えなかったので、そのあたりが不明なまま。

文書は残っていても、感覚的な面は無機質な文字では伝わりにくい。

長く女王として存在する、かなた宇宙の金髪の女王になら訊ねることはできるだろうが、今のところは必要ない。

なぜなら今の自分は――

「今日も一日お疲れ様でした、陛下」

仕事の最後に、まず女王と呼んで、それから、恭しい手つきで冠を外す。

ついだとばかりに器用な指先が髪留めを外し、流れた桃色の髪をうつとりと梳いてきた。

「はい、できましたよ、――」

とろけるような甘い顔で、同じくらいあまい声で名を呼び、労をねぎらう。

耳もとで、他の誰にも聞こえないよう、恋人の名を愛情こめて。

「ヴァージルも、お疲れ様です」

女王をただのヴァージルの恋人にもどしてくれる存在がいるのだから、なにも憂えることはない。

恋愛してはならない、というのは、正しい面もある

るのだろう。

でなければ、不文律として長年存在しなかったはずだ。

恋を優先して、女王や守護聖としての任を疎かにしてはならないのだし。

けれど、恋人のおかげで地に足をつけていられる、という点では、パートナーがいるほうが自然な気もする。……なんて口にすれば大騒ぎになるから、今はしないけど。

この手を離す気はないので、外野に足をひっぱられるようなミスは絶対に許されない。

聖地の外に情報はあまり渡っていないが、この地で働く者は定期的に入れかわる。

戒厳令を敷いたって、下界に降りれば監視は甘くなる。

いずれは、女王に伴侶がいることが広く知られるだろう。

その時までには、盤石な状態におかねばならないのだ。

今のところは順調なのだが、手応えがあると、ついつい力が入ってしまう。

職務に集中しすぎるあまり、もどつてくるのが大変になっていくけれど——どれほど深く入りこんでも、ヴァージルがいれば大丈夫だ。

うっかり意識が溶けそうになっても、この手が、

声が、自分をちゃんと現世にひきもどしてくれる。

絶対の信頼があるから、不安はないのだ。

ある種共存かな、なんて考えつつ、人肌が恋しくなつて近づけば、心得たと抱きしめてくれる。

あくまでも柔らかくて、親愛の情が強い穏やかなもの。

情熱的なものは、執務室を出るまで我慢だ。

ほう、と息をついてから、二人きりの執務室で、にっこりと微笑みあつた。

無理はいけません

一日の上限を決められているエナジードリンクの最後をついに空けたのはついさっき。

女王に就任してから、自分たちの体感で何日が経過しただろうか。

それよりも速度を上げている外の世界は、いくつかのほころびはあるものの、もう崩壊の危険はない。けれどその小さな部分は、宇宙からすればという意味で。

惑星というスケールで考えると、星のひとつつつ、文明のいくつかは滅んでしまう程度には、まだ予断を許さない。

星の寿命はどうしようもなくとも、その地に住む生き物をなんとか救えないものかと、女王や守護聖の力をミリ単位のような調整で与えていく。

少しでもその時を遅くしたり、被害を最小限にしたりするために。

総合的な部分に変化がなければ、宇宙意思是干渉を不問に処してくれる。

幸い、どこまでが許されるかの限度は、女王である自分ならばつきり理解できた。

しかし、感覚でわかるといっても、疲労しないわけではない。

まだまだ慣れない作業ということもあるだろう、どうしても時間がかかってしまう。

さらに女王として覚えなければならぬことは山ほどある。

あとでまた宇宙意思と交信をして様子を見て、力の配分を考えて、王立研究院にデータを出してもらって――

頭の中でスケジュールを組みたてていると、扉をノックする音がした。

どうぞと無意識に返答すると、中へ入ってきたのは風の守護聖、ヴァージュールだった。

「終業のお知らせです」

彼は入ってきた途端、にこやかに微笑んでそう告げた。

あまりに当然のように言うものだから、うっかりうなずきかけたが、慌てて首をふる。

「そんなことできるわけ……」

「できますよ、そもそもとつくに夜ですし」
ほら、と示された窓の外は、すっかり暮れてしまっている。

エナジードリンクを空けた時は、まだ夕暮れだったはずなのだが。

まったく気づかなかったのでカーテンも開けたまままだ。

ヴァージュールはすたすたと窓辺に歩み寄ると、てき

ばきとカーテンを閉めていく。

室内の灯りは自動的に調節されるので、仕事をしていた不都合がないのも困りものだ。

鍵のチェックもすませたらしく、よし、と満足げにうなずいてから、執務机の前に移動する。

「そして、明日から二日間、女王陛下は休養です。俺がお目付役として一緒に」

さらに告げられた言葉に、ぽかんと口を開けてしまった。

「——ということですので、帰宅はどちらにしまし
ようか。あなたの邸のほうが楽にすごしやすいです
かね？」

「いやいや、ちよつと待つてください」

仕事モードを一瞬で脱ぎ捨てたヴァーゼルは、仕事
中には決して呼ばない名を呼び帰り支度をすすめ
てくる。

だが、はいそうですかとうなずくわけにはいかな
いのだ。

けれどアンジュが反対することなど、勿論お見通
しだったらしい。

「緊急性の高い案件は、先ほど片づきましたよね？
王立研究院に上がっていました」

きちんと確認してあるあたり、この男は抜け目が
ない。

たしかに、先ほど出した書類が、ここ数日頭を悩

ませていた重大案件だった。

「勿論、安定している、とは言えませんが、二日ほ
どなら、休んでどうこうなるほど悪くもない」

——それも、彼の言うとおりだ。

リアルタイムに更新されるディスプレイに映る、
みるみる回復していく数字が物語っている。

補佐官のレイナや守護聖たちに総動員で動いても
らったおかげだ。

ヴァーゼルだって他ならぬその一人だし、先の女
王の混乱を極めていた時期も知っている。

だからこそ実感を持った発言なのだろう、惑いは
一切ないように思えた。

「そのくらの間は、守護聖と補佐官で対処可能と
いう判断です」

ユエをはじめとする守護聖の能力は、決して低く
ない。

女王の力がほとんど機能していなかった時に、宇
宙をなんとか保っていたのは彼らの力によるところ
なのだから。

万一があれば女王に連絡できる今ならば、その時
より何倍も安全に対応できるだろう。

無理をしている自覚はあるし、他の皆が心配げに
見つめては、言葉を探していたのも知っている。

だが、女王である自分がここで頑張らなければ、
いくつもの生命が消えていく。

その重さをしかたのないことと受けいれることはできそうにないし、あきらめる女王にはなりたくなかった。

アンジュの思いがわかっていたのだろう、誰も口を挟むことなく、手を尽くす彼女のサポートに回ってくれた。

だが、流石にドクターストップということなのだろう。

「他の守護聖も、そろそろ順に休ませないといけませんしね」

彼は的確に、弱いところをついてくる。

上が休まなければ、下も休めない。働いていたころ、アンジュ自身が部下として実感していた。

守護聖たちはもう少し、いい意味で自分本位なので、どうしようもなくなればみずから休むが、状況ゆえだろう、カナタですら、過密スケジュールにつきあつてくれていた。

いくら長命でひとの理を外れていても、無茶はきつちり身体に返ってくる。

彼らを休ませるためにも、自分が休むしかないのと、渋々納得した。

監視役だなんて茶化しているが、一番動いていたのはヴァージルなので、先に休ませようという思惑もあるのだろう。

「……わかりました、じゃあ、私の邸へ帰ります」

「はい。……ああ、資料その他の持ちこみは一切禁止ですからね」

「え」
まさに持っていく気満々だったので、間の抜けた声で漏れてしまう。

さらにタブレットもとりあげますと笑顔で宣言されてしまった。

どうやらヴァージルは、仕事に関わる一切に手をつけさせないつもりのようなのだ。

「読み物くらいは……」
「駄目です。娯楽本なら構いませんが、仕事に関するものは却下します」

通販サイトならいくらでも、と続けられて、これは本気だなと察した。

サイラスにも許可をとってありますから、と続けられて、きちんと逃げ道も封じられている。

食事もゼリー系ではなくちゃんとしたもの、エナジードリンクは使用禁止、当然といえばそうだが、ここ数日縁のなかつた内容ばかりが続く。

にこやかな表情のまま告げていた彼だったが、不意に表情を改める。

「今のあなたは限界ぎりぎりです、これ以上は黙っていられません」

長い足であつというまに距離を詰めると、執務室の椅子から立たせて、軽々と抱え、ふかふかのソフ

アに座らせてくれる。

自身はその前に跪いて、壊れものを扱うように両手を包みこんだ。

大袈裟な、と言いたかったが、悲痛げな顔の前に、笑い飛ばせなかった。

「でも——まだまだ、覚えることもたくさんありますから」

だからせめて本くらいは、と食い下がったのだが、ヴァージルの表情は動かない。

「ユエくらいとはいかなくても、「——アンジュ」最後まで言わせまいと、彼の言葉が被る。

滅多にないことにはちくりとまばたきをしてしまった。

なんだかんだアンジュに甘く、礼儀正しい彼は、話している時に遮るような真似はしない。——普段なら。

「あなたは、俺と同じ量の酒を飲んで平気でいられますか？」

「——へ……？」

しかしその後飛びだした問いかけは、予想外にもほどがあつた。

お酒ですか、と繰り返したあと、無理だとかぶりをふった。

シュリ、ロレンツオ、そしてヴァージルの三人は、とにかく酒に強い。

カクテルなんて生やさしいものではない酒を大量に空けているのに、けるりとしているのだ。

羨ましいがとても真似できないし、したいとも思えない。

「同量の酒は飲めませんよね。ですが、それはあなたが悪いわけじゃない。単に、俺とあなたの許容量の違いです」

少しづつ量を増やしていけば、飲めるようになるかもしれない。

だが、もともとアルコールの分解作用が少ない体質の場合は、どんなに頑張っても飲めないし、無理をすれば悪影響が出てしまう。

「それと同じです。今のあなたは、あなたができない以上の仕事をしています」

「でも、お酒とは——」

「違います、限度を超えてはいけないという意味では同じですよ」

限界以上の力を無理矢理出している、それが今のアンジュの状況だとヴァージルは言う。

実際、その自覚はあるが、当然のことだろう。だって相手は宇宙なのだ、しかも、崩壊の危機に瀕したほどの。

だのに知識がないとかわからないとか言つて、半端な対応しかできなかつたら、その際に出る被害の規模は桁違いだ。

正直、なりたて女王の己は、力不足の結果、増えるだろう犠牲のデータに耐えられる気もしない。

自分の心を守るためという、自分本位の理由だつてあるのだ。

「宇宙は待つてくれないし……」

こうしている間にも時は過ぎていく。

速度を上げたおかげで自浄作用があるとはいえ、大きく失われた部分は、やはり外から埋めるほうが効率がいい。

「その結果、あなたの命を苛むことになるなら、誰が許可しても俺は認めません」

実力を隠してサボっているというのなら、叱責もするし仕事もさせるだろう。

だがアンジュに関しては逆だから全力で止めるのだと。

「他の守護聖は頑張ってくれてるし、前の女王陛下下だつて——」

けれどアンジュにとっては、完璧なフォローをしてくれる守護聖の存在が引かかかってしまう。

かれらが懸命にやってくれるのに、自分は——と思ってしまうのだ。

「おのおのの全力は異なりますから、それは当然のことです」

守護聖たちは全員アンジュより先に聖地にきていて、その分アドバンテージがある者が多い。

女王と守護聖という差はあれど、経験の差は歴然といえる。

だからしょうがない、と頭ではわかっている、納得できるかは別問題だ。

しかも経験者をさしおいて、女王である己は、就任後はいきなりかれらの頂点に君臨した。

詳しく知らない自分が、知っている彼らに命令するのだ。今まで部下の立場にいたこともあり、心理的にも負担は大きい。

慣れていないと感じる部分はたくさんあって、自己嫌悪せずにはいられない。

「気持ちが悪くわかるとは言えませんが……どうか、今は休んでください」

今なら二日は休める、だが、またなにかあれば、休むどころではなくなる。

だからこそ、無茶を常態化させないためにも、休んでくれと切々と訴えられた。

最愛の恋人でもある存在、しかもとびきりの美形に嘆願されれば、断るのは難しい。

そもそもヴァージュールの言うことはもつともで、疲れた頭は反論する材料も見つけられない。

ふう、とついたため息は重く、自覚した途端に身体は鉛のように感じられた。

「——そう、ですね……」
力の抜けた身体は、ヴァージュールが難なく受け止め

てくれる。

——寄りかかることすら、ここ最近は自分に許せなかった。

ものいいたげな視線は感じていたけれど、甘えたら崩れてしまいそうで、できなかったのだ。

前例のない恋人をつくった状態での女王だから、誰にも——ヴァージルにも泣き言なんて口にしてはいけないと、思いこんでいた。

「俺はあなたを甘やかせていなくて、死にそうなんです。俺の心の安定のためにも、二日間はたっぷり甘やかされてください」

ぎゅうぎゅうと抱きしめながらとんでもないことをのたまう恋人に、久しぶりの笑みがこぼれた。

責めることもなにもせず、ひたすらこちらを氣遣つてくれる。

そういうひとだと知っているから、無理をしたのだが、まだまだ恋人としても日が浅い、すれ違いはしかたないだろう。

風の守護聖がきちんと勇気を送るためにも、休暇は必要なようだ。

こんなふうに茶化して、アンジュが負担にならないよう気を遣ってくれている——と思えればいいのだが、彼の場合、本気の割合のほうが大きそうだ。

「……ずっと、こうしたくはあったんですけど」

おずおずと腕を回して、久しぶりの恋人の体温を

実感する。

仕事として顔を合わせた時にも、疲労がたまってきたころには、思わず抱きつきたくなることもあったりした。

だがヴァージルは一貫して守護聖としての態度を崩さなかったので、アンジュも暴走せずにいられたのだ。

「一度たよると、ひとりです立っていられなくなりそうで……」

まだまだ新米の自分は、オンとオフの切りかえも難しい。

だからこそ意図的に、彼を遠ざけていた面もある。申しわけないことをしたと眉を下げるが、ヴァージルは気にしていませんよ、と穏やかに告げて頭をなでてくれる。

「俺も何度あなたを俺の邸に浚おうか悩んでいましたから、おあいこです」

シユリやユエに色々な方法で釘を刺されています、と言われ、詳細を聞くのは恐ろしくてやめておいた。

その分、二人は休暇の間、率先して動いてくれるので、あとで礼を言わなくてはと心に決めた。

「さあ、いつまでもここにいてもくつろげませんし、移動しましょうか」

女王の衣装を着ていては、気持ちちは引きずられた

ままになる。

ヴァージルは失礼、と断ると、軽々とアンジュを抱えあげた。

降ろしてくれと言っても当然のように聞きいれてもらえないので、彼の甘やかしはずでに発動しているらしい。

ヴァージルは危なげなく歩いていたのだが、つと足を止めて秀麗な眉をひそめた。

「……少し痩せましたね。あなたの好物をたくさん用意してもらいましょう」

「なら、甘い物も食べたいです」

どうせならとことん甘えてしまおうと、おやつのリクエストもしてしまおう。

ヴァージルは苦手だが、アンジュが食べるのを見るのが好きなので止めることはない。

案の定、勿論ですとうなずいて、彼は足どり軽く進んで行く。

絶対に落とされないという信頼と、久しぶりの温もりと匂いに、アンジュの顔はどんどん落ちていく。

とどめとばかりに醜に柔らかくキスが落ちれば、もう駄目だ。

「ゆっくり、休んでくださいね」

柔らかな、愛情を疑う余地のない甘い囁きを最後に、意識は途絶えた。

その後、邸に到着したところで起こしてもらい、それから二日間、ヴァージルからこれでもかと世話を焼かれたアンジュは、二度とあそこまでされないように適宜休みます！と赤面しながら守護聖たちに宣言したとか、なんとか。

彼の癒やされる方法

惑星への派遣から帰還しても、なかなか仕事はな
くならなかった。

守護聖としてサクリアを送るだけではなく、それ
にまつわる報告が山盛りだったのだ。

とある星で突発的に起きた風のサクリア暴走は、
守護聖が直接赴かなくては収束しなかった。

それを文字通り力づくで落ちつかせ、ようやく現
地から離れたものの、いまだ予断を許さなくて。

主星から送る時にも力加減を間違えようと、いっそ滑
稽なほどバランスが崩れてしまう。

細心の注意を払って力を行使し、珍しい事例だか
らとデータ収集につきあわせられ。

体力には自信のあるヴァージルが、うっかり人前
でエナジードリンクを空けたものだから、他の守護
聖たちに大きな衝撃が走ったらしい。

それもどうにか終わりが見えて、その間にたまった
通常業務を片づけていく。

はあ、とついたため息はとてつもなく重い。
体調には問題ない、エナジードリンクを飲んだの
だって、単に時間が惜しかっただけだ。

こういう時に食事に時間をとられるのは非効率な
ので、昔からしていることでもある。

ろくな味のしない携帯食料は、けれどカロリーや
栄養は詰めこまれているので、すぐに食べられて便
利だった。

エナジードリンクのほうが、ついでに水分もとれ
るという理由で選んだだけだ。

バーのほうを昔は食べていたが、あれも懐かしい
味とは言えない。

ただ、何時間もかけるフルコースとは相容れない
ので、今でも思い出すことはある。

どうでもいい過去をふりはらい、さてもう少し、
と動こうとしたところで——手が止まった。

近づいてくる気配は、間違えようもない。
けれど先んじて扉を開けると、彼女を驚かせてし
まいそうだし、自分に会いにきてくれる姿を見たい
ので、敢えてすわったままで待つ。

ノックの音にどうぞと返せば、入ってきたのは予
想どおりの人物、ではあったのだが。

「ヴァージル、お疲れ様です」

「——アンジュ、わざわざどうしたんですか？」

まだ終業時間前なのに、女王の姿かと思っただけ
は私服だった。

それに気づいて呼びかたを変えたため、少しの間
が空いてしまう。

アンジュは執務机にいるヴァージルのもとへ歩い
てくると、じつとその顔を見つめてきた。

久しぶりに至近距離で眺める恋人は、以前よりかわいくなっている気がする。

これ以上ないくらいかわいいのに、どうして限界を超えてくるのだろう、不思議でしかたがない。

私服の時は下ろしていてふわふわする桃色の髪の毛も、青空のような瞳も、薄くリップの塗られた唇も――

無意識に抱きしめそうになる自分を律するのはなかなか大変だった。

「王立研究院から、件の惑星について、ひとまず解析は終わったと報告を受けました」

上司と部下とは似て非なる関係だが、女王のもとには守護聖の業務内容が上がっている。

だから、彼女がそれを知っていることは不思議ではない。

「なので休んでください、と言いに来ました」働きすぎですブラックはダメです、とよくわからないことを呟かれる。

「――それは女王としてですか、それとも？」今の服装でわかりきっているのに、言葉にしてほしくなる自分なんて我儘だろう。

それでも彼女のことになると、己は恐ろしいほど欲深くなるのだ。

我ながら面倒だと呆れたくなるが、アンジュはにっこり笑ってすぐにこたえてくれる。

「女王としてお願いしつつ、恋人としておねだりします」

「わかりました、今すぐ休みます」聞く前から白旗は決まっていたが、反論の余地もない返答だった。

早めに処理すべきものだけわかるようにしておいて、机の上を片づけてしまう。

アンジュの服装からして、彼女もこのまま一緒にということだろう。

「私のほうはヴァーシルのおかげで、そこまで大変じゃなかったので……なにかしてほしいことがあるらば、なんでも言うってくださいね」

女王としてのねぎらいはべつにしますから、恋人としてですよ、とはにかみながら言われれば、それだけで疲労も吹き飛んでしまう。

もう一度惑星へ行けば、瞬時に問題を解決できそうなくらい活力がもどってきたが、離れたくないので己に却下する。

それにしても、なんでも、とは。恋人同士なのだからおかしくはないが、つけこまれやすい発言に心配になる。

だが、丁寧に説明して翻つても困るので、忠告は後日することに決めた。

疲れているのは一応、本当なのだ、少しくらい欲を告げても許されるだろう。

「じゃあ、俺に甘やかされてください」

「……はい？」

「だから、俺にずっと甘やかされてください」

怪訝そうな顔の恋人に、噛んで含めるように繰り返す。

「ええ……？ 普通逆じゃないですか？」

ヴァージルが私に甘えるんじゃないかとてことですよね、と確認するアンジュに、ええ、とうなずいてみせる。

「俺は甘えるより甘やかしたいんです」

勿論、甘えるのも嫌いじゃない、というか、アンジュが相手ならなんでも嬉しい。

だがどうせやるなら、徹底的に甘やかすほうを選びたい。

「うーん……それでヴァージルがいいなら、いいですけど」

いまいち納得がいかないようだが、なんだかんだ彼女がヴァージルの言動を受け入れてくれる。

「……ほとんど会えなくて寂しかったので、一緒にいられば、なんでもいいです」

おまけに頬を染めてこちらの袖口をつかみながら、そんな爆弾発言まで落としてくる。

わざとやっているのかと問いかけたくなるほど、ヴァージルの心臓は撃ち抜かれる。

これが実弾だったら、すでに何万回死んでいるか

わかったものじゃない。

「なら……俺の邸でいいですか？」

抱きしめると止まらなくなりそうなので、肩を抱き寄せて耳もとに囁く。

流石に執務室であれこれしてしまうのは避けたかった。

アンジュも嫌がるだろうし、毎回思いだして仕事にならなくなるのもまずい。

真つ赤になったアンジュは、こくりとうなずいて自分からも寄りそってくれた。

となると、一分一秒も惜しい。

ヴァージルはアンジュの歩幅に合わせてつつ、どこまで甘やかさせてくれるだろうかと考えながら、これからの算段をつけはじめるのだった。

耳をつけたい

このところの女王は、多忙を極めていた。とある惑星で一部の連中が起こした革命は、星々に影響を与えるほどのもので、女王の力を行使しなければならぬ状況だった。

おまけにかれらは長く粘り続けたため、聖地の時間でも解決に数日を要することになった。

女王が連日エナジードリンクをキメても、誰も咎めない状態だ、その尋常でなさが伝わるだろう。

仮眠を含めた休憩時間になり、女王からただのアンジュになったわけだが、もう隈を隠す余力もない。

普段は自分でほとんどするのにな、女王の装束を脱ぐ時は手伝いを頼んだほど疲労困憊だ。

今は、一番楽なスウェット姿になっている。フェリクスあたりが見たら盛大にため息をつくだろう。見せないが。

「……物凄く変な我が儘を言いたいんですけど」

「なんででしょう？ 例の惑星でのさばっている上層部の首なら、すぐにも殺つてきますが」

にこやかな笑顔で問いかけられて、疲弊しきった脳味噌はうつかりうなずきかける。

自信満々な口調から、きっちり下調べもすんでいのだろう。

ここで「はい」とお願いした日には、聖地時間で即日、かの惑星に関わるニュースが飛びこんでくるに違いない。

状況の打破には手っ取り早いだが、勿論、許可を出すわけにはいかない。

「……そうじゃ、なくて」

どうにか呟くと、実に残念そうな顔をした。

——実際にあちこちへ派遣された際、手を汚すことだってあつただろう。

宇宙という大きな尺度で見れば、些細なことだし、誰も罪に問うことはない。

無実の人間を殺めるわけではないし、正当防衛のこともあるだろう。

それでも、自分が女王になったからには、誰にもしてほしくないし決めたことが、我儘だと責められるなら居直るまでだ。

アンジュはふるりと頭をふって、齧りついていた執務機の片隅に置いてあつた袋を手にとつた。

やたらとファンシーな包装紙にくるまれたものは、合間に勢いで通販して、サイラスが笑顔でとどけてきたものだ。

中身のチェックはされているのだが、開けなくても聖地の技術なら検査可能だそうで、ラッピングされたままの状態だ。

「アンジュ、折角ですし、こちらへどうぞ」

穏やかなヴァージルの声に目をやれば、いつのまにか机の上にはお茶と菓子が用意されていた。

たしかに、どうせ開けるなら書類やデータで味気ない場所より、別の場所のほうがいいだろう。

椅子から立ちあがると、いかな最上級のオフィスチェアといえど、長時間のデスクワークのせいだろう、身体の節々が嫌な音を立てた。

特に腰はキツイ、あとで湿布のお世話になるべきかもしれない。

「わ」

いつのまにか近づいていた彼によって、あっさり横抱きにされてしまった。

たった数歩の距離なのに、歩かせる選択肢はないらしい。

執務時間は決して距離を違えない男だが、休憩となると途端に全力で甘やかしてくる。

すっかり慣れたし、今ではこのほうが落ちつくのだから、我ながら凄いなものだ。

お茶を飲んで一息ついてから、アンジュはファンシーな紙袋に手を伸ばす。

「ヴァージルに、これをつけてほしいんです」

がさりと中から出したのは、よくできた犬の耳を模したカチューシャだった。

ちよっと強い毛の質感といい、再現性がとてつもない。

リアルだといううたい文句を見て決めたのだが、ここまでそれっぽいとは予想外だった。

もつと、某テーマパークのようなゆるふわでもよかつたかもしれない。

「……これは、新車の通信機ですか？」

しげしげと眺めた彼の問いかけに、こちらが驚いてしまった。

たしかに、見ようによつてはヘッドセットに見えなくも……ないかもしれない。

ヴァージルの中に、娯楽でこういうものをつける、という考えがないせいもあるだろうが。

「いえ、ただの……オモチャ、みたいなもの、ですかね」

正直、なぜつけるのかと聞かれても困る。

意味はなにもないし、どちらかといえば長時間つけていると頭が痛くなったり、特定の場所以外ではただイタいひとになるだけで、得をすることはあまりない。

だが、疲れた脳が休憩時間に通販画面を見ていた時、無性に、これをつけたヴァージルが見たいと訴えてきたのだ。

注文ボタンを押したかどうかはあやふやだったが、ばっちり頼んでいたらしい。

「ジョークグッズということですか」

ぼんやりした説明でも、何となく伝わったらしい。

なるほどそう表現すればよかったのかと気づくがもう遅い。

脳がストライキを起こしかけているようで、単語もろくに出てこないのだ。

ヴァージルはカチューシャの端を持つと、躊躇なく頭に乗せてみせた。

大人用を選んだので、大きさが合わないということとはないうらしく、柴犬系の耳がちょこんと出現した。

半ば無意識に手を伸ばすと、心得たらしく軽く頭を下げてくれる。

さらさらの髪を少し整えれば、カチューシャ部分はうまく隠れてくれて、本当に頭から耳が生えているようだ。

「すごくかわいいです」

消失した語彙では、その程度が精一杯だったが、掛け値無しの本音でもあった。

ヴァージルにもわかったのだろう、嬉しそうに微笑んでみせる。

「どれにしようか悩んで、犬にしたいんですけど」

虎とか、熊とか、似合いそうなものはいくつもあつたが、かつて見た柴犬の愛らしさを思いだし、これにしたのだ。

次の機会があつたら、一緒に選ぶのもいいかもしれない。

「俺はあなたが喜ぶなら、なんでもいいですよ」

案の定ヴァージルは全肯定してくれる。

ただ、意外なことに、そうだな、と呟きが続いた。

珍しいので続きを待っていると、きらきらしい笑顔を見せてくれる。

「犬は優秀です。警備もできる、危険物も察知する、癒やしにもなる。だから、あなたがこれを選んでくれたのは、嬉しいですよ」

俺はあなたの恋人であつて、犬にはなりたくないですけど——と茶化してみせて、覚えず笑みがこぼれた。

柴犬を選んだのも、無意識に気質を思いだしたからかもしれない。

「そうですね、ヴァージルはヴァージルでいてくれないと、困ります」

でも、たまにはこういうかわいい姿も見てみたい。アンジュのおねだりに、彼は喜んでと請け負ってくれた。

今度ゼノに頼んで機能を追加してもらいましょうか、と呟いていたのは気がかりだけど。

「ただし、今の一件が終わるまでは『待て』をしますが——終わったら、ちゃんと俺のことを構ってくださいますか？」

でないかと噛みついてしまいますよ、と、あくまでやんわり首筋に口づけられる。

べつに囁かれてもいいのにな、とぼやけた頭で思

ったつもりが、しっかり声に出していたらし。

「……なら、先に少しだけ、いいですか？」

ほぼ執務室にカンヅメだったから、ヴァージルと恋人らしい時間もご無沙汰だった。

飢えた獣に似た、ぎらついた目で見つめられて、拒否できるほどアンジュも枯れていない。

「……あっちの部屋でなら」

ただし、譲れない部分もある。

執務室と続いているこの部屋は、仕事のために存在する場所だ。

そこでいちやつくのはどうかと思う。

ヴァージルも心得ているようで、じゃあ、とすぐさま抱えあげて、仮眠室——というにはやたら豪華なだけど——に足をむけた。

そんなわけで、休憩のほが長引いた上に濃厚なものになったのは——他のみんなには内緒だ。

ポニーテールは危険です

「ヴァージルが日課にしているジョギング、私も一緒にしたいです」

脈絡なく懇願されたヴァージルは、きよとんと目の前のアンジュを見た。

女王試験が終わり、聖地へと移動して、さらに結構な日数が経過した。

宇宙の安定をとりもどすため、聖地は超過勤務は当たり前、フル稼働の毎日だった。

ようやく落ちついてきたので休日をとってくださいとサイラスとレイナに言われ、朝から彼女の私室を訪問したわけだ。

……というより、かれらは休みの手配をしたと同時にこちらへ連絡を入れてきた。

お膳立てされるのは面はゆいが、きちんと休むようお目付役になってくださいと頼まれれば否はない。

他の者にその役目は断じて譲りたくないわけだし、彼女が疲弊しているのは知っていたから。

ただ、しっかりと「大分お疲れのようなので無理はさせないでください」と釘も刺されたが。

休ませてやりたいと思いつつ、我慢できずに午前中から会いに行ったところ、嬉しそうにしつつもいくらか疲れが見えたので、すぐさま部屋でのんびり

しよう提案した。

「久しぶりなので充電させてください」と言い放って抱きしめれば、アンジュは照れはしても拒まない。

流石にお茶を煎れる時などは離れるが、それ以外はびったりくっついていっていることにした。

そうすればヴァージルも満足だし、もしアンジュが眠ってしまったら、休養という意味では問題ない。

アンジュのほうにも思うところはあるのだろう、頬を染めながらもそのまま抱きしめさせてくれていて、そんな姿もかわいくてたまらない。

他愛ないお喋りをしながらのんびりしていたのだが、アンジュが何個目かのクッキーをつまんだあと、はっとした顔になり、やおら先の言葉を発したのだ。

「どうしたんです、いきなり」
会話の流れと無関係すぎて首をかしげてしまう。

今まで話していたのは聖地に関することで、まあ、ジョギングしている場所という意味では当てはまらなくもないが、繋がりは薄い。

よくわからないヴァージルをよそに、アンジュは大分減ったクッキーの皿を指さした。

「飛空都市の時も思いましたけど、ごはんも、お菓

子も、なにかもおいしいんです」

「それは——そうですね、いいことではないですか？」

ヴァージルもはじめのころは驚いたものだが、今

ではすっかり慣れてしまった。

毎日フルコースというわけではないが——いや、守護聖によつてはそうなのかも……と思いかけて、考えるのをいったんやめた。

とにかく、宇宙を統べる女王や守護聖の食事なのだから、味が保証されているのは当然だろう。

ひとと違う存在となった女王と守護聖ではあるが、食事は必要だし、味がいいほうが活力になるのはデザートとしてもたしかだ。

なにより料理人にとって女王のために腕をふるったというのは栄光なことだから、短い間であっても希望者は後を絶たない。

どうしても入れ替わりが激しいが、そのおかげで雰囲気の違いが短い期間で出てくるので、概ね好評だ。

わずかな日数だからこそ、かれらは持てる力すべてを用いて、女王に満足してもらおうと奮起する。

昼食と一緒に食べたが、軽食に見えても一切の手抜きがないものだった。

「このクッキーもすつこくおいしくて……もうほとんどないし」

今日のクッキーはアンジュが気晴らしに通販したものと、料理人が休日ならとはりきって用意したものが並んでいた。

折角なので食べ比べようと思ったらしい。

甘いと聞いたのでヴァーゼルは食べていないが、聖地へ運ばれる品と料理人の手作りだ、味に間違いはないだろう。

「毎日仕事をしていると言つても、デスクワークみたいなものですし、そんなに歩かないし」

たしかに、女王の執務というと派手な印象だが、やっていることは守護聖とさほど変わらない。

ヴァーゼルはいわゆる会社勤めの経験はほとんどないけれど、それと似た事務仕事が多いのは実感している。

宇宙意思との交信は彼女にしかできないが、それもやたらと動き回るものではない。

用事があつて出かける時は、警備がつくし、基本的には馬車移動だ。

道は整備されているから歩きやすいし、起伏も少ない。

「だから、どう考えても運動不足なんです……！」

聖地へきてすぐのころは、寝る間も惜しんで調整にいそしんでいたから、むしろやつれているほどだった。

守護聖として激務になる事情はわかっていたので、心配はすれど止めることはできなくて。

歯がゆい思いをしながらも、その気持ちは仕事へとむけることにした。

女王試験を通じまとまってきた守護聖たちの連携

役もみずから買って出たほどのだ。

すべては敬愛する女王であり、愛しい恋人の役に立つため。

その甲斐あって宇宙も大分安定したので、今後は定期的に休みもとれるし、睡眠時間を削るスケジュールにもならないと聞いている。

となると、運動不足が心配になるのは、もつともだろう。

やつれてしまったということとは、必要な筋肉も落ちていて可能性が高い。

もともと彼女は筋肉質ではないから、あまり減ると健康にも響いてくる。

ことに女性はそういう問題に敏感なわけだし。

「とはいえ私、ベースにいたところからそんなに運動をしていたわけじゃないので……」

スクワット百回なんて生まれてこのかたしたことないです、と呟かれる。

……していたと言われても驚くので、そこはいいのだが。

「だから、ジョギングもヴァージュールに合わせてもらうことになりませうけど……」

ほとんど運動をしていないのなら、いきなり動いてはむしろ危険だ。

ジョギングといってもヴァージュールのそれは聖地を何周かするものだし、スピードもかなり速い。

アンジュがついていこうとすれば、途中でダウンするのは間違いないだろう。

だがヴァージュールが一周走る間だけ、スピードを落として共に走るくらいなら、造作もないことだ。

申しわけなさそうなアンジュに、ヴァージュールはにっこり笑ってみせる。

「勿論、構いませんよ。ついでにあなたに合うメニューを考えてみますね」

「ありがとうございます！」

自分が一番適任だというのもあるだろうが、頼ってくれたことがこんなにも嬉しい。

まずはストレッチメインで軽いメニューにし、時間も短めで……と考えていると、それに、と小さな声が聞こえた。

まだ続きがあるのかと視線を動かすと、恥ずかしそうにうつむく姿があった。

「そうすれば毎朝、女王と守護聖じゃない私とヴァージュールで会えるから……なんて」

「……あなた、俺を喜ばせる天才ですよ」

数秒の沈黙ののち、衝動的に抱きしめたくなるのをぐっとこらえて、手加減して腕を回す。

でなければ、骨を折りかねない力が入りそうだったからだ、比喩でなく。

自分の発言に赤面して顔をそむけるアンジュの顎をとると、間近で微笑んでみせる。

「では……コーチ料を前払いでいただきますね」
そんなものがなくても何度でも何十回でもするの
に、と拗ねる桜色の唇に、そつと己のそれを重ねた。

——なんてやりとりの数日後。

早速トレーニングを開始しようということになり、
ヴァージルはアンジュの邸の前で待つていた。

脳内にはしつかり今日のメニューが入っている。
彼女がどれくらい動けるかは王立研究員のデータ
から予測しているが、臨機応変に対応できるよう万
全だ。

走るルートも事前に軽く一周してきて、危険もな
いことを確認している。

そして待つことしばらく、己の名を呼ぶ弾んだ声
がして、そちらへ目をむけて——絶句した。

「おはようございます！ ごめんなさい、待たせて
……ヴァージル？」

ばたばたと駆けてきたアンジュは、反応がないこ
とに訝しげな顔になる。

「どうかしました？」
怪訝そうに首をかしげれば、それに応じてひよこ

んと揺れる——桃色の髪の毛。
凝視していたヴァージルは、はっと我に返り、慌

てて口もとを隠す。

「いえ、……おはようございます、アンジュ。その
格好は？」

なんとかとりつくろいながら訊ねると、これはで
すね、と笑顔を見せた、とてもかわい。

気にいっているのか、くるりとその場で回転して
みせた。

「スポーツウェアを通販したんです、故郷にいたこ
ろも持ってきましたけど、こっちのほうが着心地がい
いですね」

彼女の色に合わせたのだろう、薄いピンクの上下
はとても似合っているのだが、ヴァージルが言いた
かったのはそこではなく。

「髪の毛……は？」

アンジュのふわふわした髪は、後方高くで一つに
結ばれていた。

いわゆるポニーテールというやつで、動くたびに
小さなしつぽがびよこびよこ跳ねる。

「走ると地味に暑くて邪魔なんですよ」

だからまとめてきました、とあっけらかんと言
い放つ。

本人に思うところは微塵もないだろうことは、表
情からもあきらかだ。

だが——ヴァージルの心中は穏やかではない。
ポニーテールにおさまりきらなかった後れ毛がか

かるうなじに、ついつい目が引きよせられてしまう。

いつもだつてうなじは見えているし、なんなら女王の時はまとめているから、もつと目立つ。

しかし、女王の時は威厳が先に立ち、よこしまな気持ちにはついぞ湧いてこない。

普段もついつい口づけたりはするけれど、ここまでの破壊力は持っていなかった。

たかが髪型ひとつでと思うが、それが恋をしているということなのだろう。

「早速ストレッツチからやりたいんですけど、なにをすればいいんですか？」

健康的で柔らかそうな首に齧りつきたい衝動を必死にこらえているなど知りもしない彼女は、無邪気に問いかけてくる。

ここで本当のことを言えば、照れ屋な彼女は大いに拗ねて、最悪、一緒にトレーニング自体が立ち消えになりかねない。

それはあらゆる意味で避けたいところだ。

だからヴァーシルは理性を総動員させて、視線を彼女の顔に固定すると、入念に考えていたメニューをひとつずつ教えていく。

——後日、おそろいのスポーツタオルを通販で購入し、彼女の首にかけることに成功するまで、ヴァーシルの聖地ジョギングの周回数がいつもより多かっただとか、なんとか。

ドッチボール大会を開催したい

ふとした会話の折に、カナタと子供のころの遊びの話になった。

休み時間や放課後、よくやった遊びは？ という話題だ。

「私の時はドッジボールばかりだったけど、今は違うんだろうね」

「うん、サッカーのが人気だよ」

「あー、そっかー……年代だなあ」

こういう部分で年の差を感じると、なんともいえない気分になる。

年はあまり離れていないつもりなのだが、流行っていたものなどの話題になると異なるのだ。

そういう意味では共通の故郷より、まったく違う出身のほうがジエネレーションギャップを感じず、心穏やかなのかもしれない。

——と、そんな話を、夜、恋人にしてみた。

まったく異なる星の彼は、一体どんな遊びをしていたのか、単純に興味をわいたからだ。

「俺の故郷でも似たものがありましたよ。ボールひとつでできるので、場所を選ばずやりやすかったですからね」

道具やらが必要なスポーツとなると、設備がない

と難しい。

サッカーもバレーボールもバスケットボールも、ゴールやネットが必要になる。

なくても代用できるが、人数が少なくても広さとボールさえあればできるドッジボールに似たものが共通するのは、さもありなんと言うところだろう。

ただ、相手にぶつけるというルール上、遊びというには少々危険なわけだが、子供のほうが案外、そういう内容を喜ぶものだ。

「懐かしいです、子供のころってスポーツができる子が人気者になったんですよ」

もう少し年齢が上になると、勉強派や見た目重視派などと分かれていくが、子供のころは単純明快だ。

スポーツで目立つというのはわかりやすいこともあるだろう。

喧嘩に強いかどうかなんていうのもあったし、やはり子供は無鉄砲で攻撃的だ。

「女子の間で人気のあった男子は、サッカーチームのエースでしたし……」

「——へえ？」

あ、しまった。と心の中で思ったが時既に遅し。

顔だけは笑顔だが、ヴァージルの目はちっとも笑っていないかった。

引き気味のアンジュにかまうことなく、ずい、と顔を近づけてくる。恋人になつてずいぶんになるが、

美形のアップには慣れる気がしない。

「あなたもですか？」

口調だけは問いかけだが、妙に聡い男はきつと気がついている。

誤魔化してもいいことはないので、正直に話すことにした。

「……クラス対抗のドッジボールで、守ってくれた時に格好いいな—と買ったことはあります」

男女混合のチーム戦でそこそこ勝ち残ってきた一戦、他のチームメイトは全員外野へ出され、中に残っているのはアンジュとその男子だけだった。

となれば、当然狙われるのは女子のアンジュになつてしまう。

相手の男子にこちらへの好意があつたわけではなく、クラスが勝つために守ってくれた、それだけだ。

勿論アンジュにだつてなんの感慨もなくて、少女漫画みたいな進展もなかった。

ただ、自分には取れそうにない速度のボールを、危なげなく受けとめて、相手チームを減らしていく様子を近くで見れば、格好いいとか、感心したりするのは当たり前だろう。

どうなったわけでもないと言ひ添えると、なるほど、と頷いてからしばらく無言になる。

「——では今度、ドッジボール大会をしましょう」
「言うんじゃないかと思いましたが、なんでそう

なるんですか」

わかりやすいな！ と胸中でツツコミを入れつつ、一応問いかけてみる。

するとヴァージルはにっこりと綺麗な笑顔を披露した。

こういう時の微笑みは、大抵ろくでもない経験上知っている。

「勿論、あなたを守つて格好いいと思つてもらいたいからです」

——ほらやつぱり。

清々しいまでにわかりやすい動機で、多分、己は半目になつてゐるだろう。

「俺とアンジュ、シュリとレイナ、あとは均等に割り振つて、余りはサイラスかタイラーを入れればいいでしょう」

たしかに主軸となりそうなアタッカーはシュリとヴァージルだろうし、二人を同チームにすれば、勝敗はやる前から目に見えている。

対抗意識を持たせるには、女王と補佐官を頭に据えるのが一番わかりやすい。

ちよつとした景品でもつけましようと言うヴァージルはすっかり開催する気であるが、絶対に反対する数名をどう説得するつもりなのだろう。

そもそも開催してどうなるというのか、スポーツの秋と言いたくても、聖地は季節とは無縁だ。

脳内で自問自答しているうちにも、ヴァージルはやる気のようにだ。

「場所によってルールも違うでしょうから、そのあたりも調整しないといけませんね」

守護聖へプレゼンする気も満々らしい。ルールまで考えているあたりが流石というべきなのか。

狙うはユエからですね、と呟くあたり、開催を確実にするべく頭を使っている。

ノリのいい光の守護聖を最初に落として、なし崩し的に開催に持っていくつもりだろう。

行動力には定評のある男だ、このままだと実行するだろう。

どこからつつこめばいいのかわからないし、面倒にもなってきたので、アンジュは止めるのもあきらめた。

守護聖が反対すれば実現できないし、仮に開催することになっても、まあ、余興ですむ範囲にしてくれるだろう。……多分、きつと。

それに、守ってくれるヴァージルを見てみたい下心もある。

正直に言えばスポーツですませてくれないと思うので、終了するまでは黙っておこうと決意するのだった。

水着攻防戦

「——ということ、女王特権でプールをつくることにしました」

「なにがということ、なんですか」

終業時間に迎えに行くと、挨拶もそこそこに宣言された。

普段、突拍子もないことをと指摘を受けるのは自分のほうなのだが、今日は逆らしい、新鮮だ。

女王の装束のままだからだろう、偉そうな態度をとろうとしているが、わざとらしく胸を張るのはかわいだけだ。

アンジュはわざわざ用意したらしく、傍らに置いてあった紙束を手にとった。

一番上にはご丁寧に「嘆願書」と印刷までされている。

「ええつとですね、Aさんからは『おねーさんの恋人が湖で泳いでた、水中から出てきてめっちゃビビったからやめてほしい』Bさんからは『あなたの恋人が写生中に川を横切った、邪魔だからどうにかしてくれ』とお手紙がきておりまして」

間違はなく口頭だったろうに、わざわざ文書にしたらしい。

「……手紙の送り主がともわかりやすいですね」

隠すつもりのない口調に、カナタとフェリクスの顔を思いだす。たしかに、二人に目撃されたのは数日前のことだ。

「いや、そこは自分が悪いって反省を先にしてください」

ヴァーヂルの返答がお気に召さなかったのだろう、アンジュはよく見るすわった目をむけてきた。

「悪かったとは思っています、他の誰かから恋人だと認識されていて、連帯責任になるという特別感を噛みしめていました」

泳いで罰則があるわけではないが、何人もから止められている。

驚かせたり邪魔をしたのは、申しわけないことをした、くらいは思うのだ。

だが口にしたとおり、ヴァーヂルに文句を言ってもきかないから、と判断されて、アンジュに行く事実が不謹慎にも少し嬉しい。

しかしアンジュに迷惑をかけたことは申しわけないので、すみません、と殊勝に謝ると、彼女は照れたりなんざり表情をくるくる変えた。

「喜ぶところじゃないですよ、もう……とにかく、川で泳ぐのは、平気だと言われても心配なんです」
アンジュの故郷では、水難事故がそれなりに発生していたらしい。

川で泳いで流されて、というものも、多かったと

いう。

そんなヘマはしないが、絶対なんてないでしょうと返されれば黙るしかない。

ただ、泳ぎたいヴァージルの意見は尊重したいと思っただけという。

そこで、だったらプールをつくれればいいじゃないか、と閃いたわけだ。

「どうせなら楽しいものにしたいの、ゼノに頼んで流れるプールとかアトラクションもつくってもらう予定です」

代替案として出すからにはと、彼女のほうも色々考えてくれているらしい。

自分のために時間を使ってくれているなら、嬉しいものだ。

まだ構想段階だということで、ついでに己の要望も伝えておく。

「崖から飛びこむようなものも設置してもらえるといいですね」

「飛び込み台ですよね、検討します。……楽しみだなあ、結構よく行ったんですよ、プール」

懐かしそうに微笑む姿に、安全な世界にいたのだと、今さらだか感じてしまう。

ヴァージルにとつての泳ぎは、遊ぶためより生きるためだった。

そこから解放されての今という面もあるが、これ

は口にするに気がされるので黙っておく。

彼女の故郷は気候が穏やかだったことも泳ぎを楽しめた理由だろうか。

どちらも、ヴァージルの故郷にはないものだ。あまり経験したことがないなら、今から二人で知ってあげればいい、と前向きに考えていたのだが。

「公共事業なわけですから、大きいのをつくって、みんなで遊びましょうね」

「——ちよつと待つてください」

聞き捨てならない発言に、思わず楽しそうな彼女の言葉を止めにかかった。

水中バレーボールとかもいいですよ、と告げてくる顔は、まったく危機感がない。

「みんな、ということ、あなたの水着を鳥合の衆が見るとのことですよね？」

「……いや、鳥合の衆じゃなくて主に守護聖ですから、いわば同僚だけだと思いますけど」

なんてことだと訴えたのに、アンジュは白い目で見つめてきただけだ。

心底呆れた、という冷たい様子だが、ここでくじけるわけにはいかない。

「それでも！ 他人にあなたの肌を見せるなんて冗談じゃない！」

肌を覆う面積が多い競技用水着にして、上着を着れば露出は減るが、それでもやっぱり嫌なのだ。

アンジュはますます据わった目をするが、ヴァー
ジルとしては譲れない。

「肌って……水着なんだから普通じゃないですか、
浴衣の時みたいにオレンジにしますし」

「オレンジなのは当然です」

彼女の髪によく映えて似合うから、それ以外の色
の選択肢はない。次点で自分の瞳の色や、アンジュ
の持つ色もいいが、最初はオレンジにしてほしい。
「浴衣は見える面積が少ないからまだ我慢できまし
たが、水着は駄目です」

恋人の故郷の装束だというそれは、夏でも長袖が
正式だそうで、丈も足首まで隠してくれる。

肌を見せることを避ける文化だったというので、
快哉を叫んだものだ。

女王の衣装となれば守護聖の意識が先に立つので、
なんとも思わないのだが、私服はどうにも抑えがき
かない。

ヴァージルの言葉に、ふうん、と平淡に呟いたア
ンジュは、でも、とぼそりと呟いた。

「………浴衣の時に、ちらっと見えるうなじと足
首と手首が最高ですって言って、そのあとナニしま
したっけ？」

——物凄く痛いところを突かれた。

ただの長方形の布であるそれが、あんなに扇情的
だなんて思わなかったのだ。

露出が少ないからこそその色気を知って、——いや
そもそも彼女はどんな格好でもかわいいわけだし。
きちんと着つけた姿を堪能したあと、二人きりにな
ってからのことは——恋人同士ならある意味当然
だろう。

だが、盛りあがった結果、洗濯すれば綺麗になる
とわかっている、折角仕立てたのに！ としばら
く拗ねられてしまったのだ。

全面的にヴァージルが悪かったので、反論の余地
はない。

「——と、とにかく！ 今は水着の話ですし、俺は
断固反対です！」

無理矢理に話題をもどして宣言するが、これくら
いであきらめるアンジュではない。

「なら日によって性別限定にします。女王権限で」
王立研究院のひとつかも使えればさらに福利厚生
ですしね、とにこやかに告げられる。

規模の大きいプールをつくってにおいて、女王と守
護聖だけで独占なんて、と言いたいのだろう。

実際、そうしたって許される女王という身分なの
だが、アンジュの性格からして容認しないのはわか
りきっている。

そして彼女は、こうと決めたら曲げない頑固さも
ある。

己も大概だが、ヴァージルの場合、アンジュが本

気になると、どうしても太刀打ちできない。

性別限定となると、例外は許されない。つまり、ヴァージルはアンジュとプールに入れない。

水着は別の場所で見せてもらえても、一緒に遊ぶことはできなくなる。

有象無象と同じ空間を許容するか、プールデートをあきらめるか——勝敗は明らかだ。

断腸の思いで引き下がったヴァージルだったが、その後、着る水着の件でまた一悶着した。

ワンピースタイプの水着で折衷案となり、完成したプールは守護聖、職員ともどもに大好評だった。

ヴァージルとしても、本気で泳げる場所もあり、楽しむための場所もあり——と想像以上に楽しかったので、ひとまず文句は封印した。

——後日、女王の私邸の隅にプライベートプールが完成し、なんだかんだで甘い彼女に愛を叫ぶのは、まだ先の話。

童謡の午後

アンジュが女王となり、しばらくの時が経った。かつての恐慌状態が嘘のように、これといった問題もなく、宇宙は平和に成長している。

アンジュ自身も、不慣れなところはあれど、生来の真面目な気質からだろう、きちんと女王の責務をまっとうしている。

女王となった時点で、司るせかいすべてに平等であらねばならない。

迷う姿のあった候補の時とは違う姿は、本人の意識の変化と、宇宙意思とつながったこともあるのだろう。

情が混じることはあれど、どこかを負戻すでもなく、辺境をおろそかにするわけもなく——

バラバラだった守護聖たちも、こと役目に関していえば、以前よりも団結力が増したように思える。

——それは間違いなく己も、だけれど。

最愛にして敬愛する存在が慈しむ宇宙を、自分が同じく思わないわけがない。

以前よりもっと、守護聖としてもしっかりやっていこうと心に決めるようになった。

そして、一定以上踏みこまずにいた他者との関わりも、少しずつ変化している。

優しくなりたいわけではないけれど、これはこれで悪くない——だなんて、昔の己が見たらどう感じるだろう。

嘲笑されても、幸せだからいいのだと、間違いなく笑顔で返すはずだ。

話が脱線したが、つまり、女王としての彼女にはなんの文句もない。

しかしヴァーゼルにとって彼女は、同時に大切な恋人でもあるのだ。

当惑していたころを覚えているからこそ、急な激務に疲弊していかないかが心配でたまらない。

はじめのころはとにかく宇宙の均衡をとりもどすことが急務だったから、かなり遅くまで根を詰めていた。

心配で胸が押しつぶされそうでも、あまり止めるわけにはいかず、他の守護聖とともにひたすらサクリアを送り続けた。

ぎりぎりの時には強制的に休ませたが、それだつてごく数回だ。

今は安定して、いわゆる残業はほとんどない。

それでも突発的に起こる諸々はあって、突然召集がかかることもある。

一言の文句もなく守護聖は任につき、彼女自身も疲れたなどと決してこぼさない。

そんなふうには頑張っている彼女に水を差す真似を

するのは、己自身が許せない。

けれどやっぱり心配だし、他の守護聖と共にことに当たられると、わかっているでも沈んでしまう。

いつも風の力が必要なわけではない、全体のバランスがなにより重要で——けれど、一番近くにいたいという我儘を持ってしまふのだ。

すっかり恒例となりつつある、就寝前の一人反省会が繰り返されていた——そんなある日。

——休日の二人は女王と守護聖ではなく、ただの恋人同士だ。

おいおい外にも行きたいところだが、連れ回すよりのんびりしてほしいので、今のところはいわゆる部屋デートばかりになっている。

いずれは己の私邸にも招きたいが、自分の部屋のほうがアンジュもゆつくりできるだろう。

サイラスも笑顔でヴァージルの私邸への訪問を却下している。

理由は口に出さないが、大体は察しているので文句もない。

一応、女王と恋仲であることは認められているが、少しでも宇宙の様子が変化すれば、すぐに糾弾されるだろう。

だから今は、誰かにつけこまれるような行動は慎

むべきだ。

残念ではあるが、無理強いをして彼女の立場を不利にさせたくない。

女王としての力は申し分ないのだ、前例がないというだけで、彼女の評価を落とす行動は、己に対しても容認できない。

ヴァージルが訪れる分には許してもらっているのだから、十二分だ。

益体ない話をして、抱きしめているだけでも、驚くほど幸福だから、当分の間は待てる自信があるし。

ふわふわと揺れる薄桃色の髪の毛を眺めるだけでも笑顔になれるのだから、相当な重症だ、治すつもりもないけれど。

「——ヴァージル、これ、見てください」

じゃん、と愛らしい効果音と共にアンジュが見せてきたのは、美しい装丁の大きめの本。

まだ慣れない文字は彼女の故郷のものだ、平易な文字で書いてあるようだけれど。

休日の私室、昼食を終え、ソファに並んでのんびりしよう、というところで、アンジュがやおら立ちあがった。

すぐにもどってきたのだが、その腕にはこの本を抱えていた。

「ベースの本……ですか？」

念のため問いかけると、はい、と素直にうなずい

てくる。

女王の時とは違う、女王試験時と似たゆつたりしたワンピースに身を包んだ彼女は、実際の年齢より少し幼く見える。

「前に話した、おとぎ話です、取り寄せてもらいました」

宇宙が安定したこともあり、外界とのやりとりは少しづつ増えている。

希望する者には、故郷の品を手に入れることもできるようになった。

とはいえ、頻繁にするのもということ、ヴァージルはほとんど利用していない。

特に故郷から持ってきたいものがあるわけでもないからだ。

せいぜい嗜好品の類いだが、他に上質なものはいくらでもある。

それはともかく、女王候補の時に、童話の話をしたことは勿論覚えていた。

「いいですね、読書日和です」
日の光が穏やかにさしこむ室内で、恋人と二人故郷の本を読む——悪くない話だ。

もつとも、ヴァージルにとつては、彼女とすごすなにもかもが最高なのだが。

「はい、そういうわけで——お願いします」

あまりに自然に渡されてしまい、は？ と声をあ

げたのは、本を受けとり、膝の上にアンジュが乗ってからだった。

「ちよ、アンジュ……？」

慌てるヴァージルをよそに、ちゃっかり用意していたブランケットまでセットした彼女は、膝の上から見上げてにっこり微笑んできた、——とても、かわい。

愛らしい表情にも釘付けになったが、その下、華奢な首に光る、自分がかつて贈ったネックレスとか、それがかかる鎖骨もついつい眺めてしまったのは——男の不可抗力にしてほしい。

「ね、読んでください」

そんな男心など知らない彼女は、無言の彼にじれたのか、歌うようにおねだりをしてきた。

読む、とは聞くまでもなく、この絵本を、ということだろう。

ここまでの文字を流暢に読むのは……と思ったが、本の端にはゼノによる自動翻訳装置がついていた。

ページをめくると、記されている文章を自動的に判別、翻訳されて立体投射される優れものだ。

一頁分まるまる表示されるので、それを読めば問題ない。

童話ということでは平易な言葉だから、齟齬はさほどないだろう。

「弟さんにしては言っただけじゃないですか。」

だから私にも、してほしいたいです」

二人でした会話を覚えていてくれて、柔らかい思い出を大切にしてくれる。

女王と守護聖の時には決して話題に出さない代わりに、恋人の時間をすごす際は、よく互いの故郷の話をする。

まるでそれが女王と守護聖から、恋人への切り替えなのだというように。

弟の代わりではなく、想い人として共有したいのだと乞われて、断る理由はどこにもない。

ただ、とても昔のことだし、この話はまったく知らないものだ、事前練習もさせてもらえそうにない。淀みなく読める自信は、正直なかった。

「……久しぶりですし、そもそも巧くないですよ」
「いいんですよ、ヴァーヂルの声で聞きたいんですから」

予防線を張ったつもりが、とんだ殺し文句で返ってくる。

熱くなる頬を隠すように口もとを覆い、空咳をひとつ、ふたつ。

あーあー、と何度か発音してから、ヴァーヂルはゆっくりと、最初の文章を読みはじめた――

キスの日

記念日なんていうものとは、無縁の生活を送っていた。

家族の誕生日だとかは勿論覚えていたし、それなりのこともしていたが、他の記念日には興味も関心もなかった。

所属している場所が場所だったので、式典やらなにやらはあったし、覚えておいたほうが上官の機嫌がよくなるものも存在した。

だがそれらは情報として必要だから記憶しただけで、意味なんてどうでもよかったし、式典だって心にもない祝辞を述べていただけだ。

生まれてくれてありがとうなんて、家族以外に思うわけがないと、本心から考えていた。

己の気持ちが一変したのは、陳腐な話のようだが恋をして、成就してからだ。

あの日のことはずっと忘れない自信があったが、記録しておきたくて書きつけた。

以前、恋人になって一ヶ月記念だとかをしていた同僚がいて、なにが楽しいんだとしらけていたが、今ならわかる。

奇跡のような思いに感謝するためなら、一週間ごとでも祝いたいくらいだ。

だが想いが通じた時、彼女は女王候補で、まずは試験が第一だった。

また性格上、そこまで記念日に重きを置かないことも知った。

己の想いが重たい自覚はあるので、つきあつて何日記念だと発表するのはやめにしたが、逆を言えば毎日が記念日だ。

……と言ったら「アリスの逆パターンですか」と苦笑されたのだった、あとで調べなければ。

ともあれ見える世界が文字通り激変してから、記念日というのも悪くないと思うようになった。

無事に恋人が女王になり、聖地へもどつてしばらくしたころ、本格的にベースのあれこれを調べてみれば、彼の地には驚くほどの記念日が存在した。

同じ日にくつもの記念日が存在して、だが由来を調べると納得するものも多く勉強になる。

それに、くだらない語呂合わせだの、開催記念だのというのは、平和の証拠でもある。

戦争に明け暮れている日々では、呑気に記念日などで盛りあがっていられない。

ならば穏やかに日々を過ごしていた彼女をよかつたと感じこそすれ、ばかばかしいと一蹴する気は起きなかった。

興味が湧いて調べているうちに、その日を見つけた時は、つい部屋で快哉を叫んだものだ。

聖地では季節がないため少々臨場感に欠けるかもしれないが、それはそれ。

わくわくしながらその日を待つなんて、子供のころのおぼろげな記憶にしかなくて、ちよつとだけ懐かしくてしんみりしたりもした。

忘れていた感情を、思い出を、もたらしてくれる。そんな存在、どうしたって手放せない。

——女王となってもあきらめきれずに認めさせたのだから、手放すわけもないのだけど。

「——というわけで、今日はバースではキスの日だそうですね」

仕事終わりに私邸にさらうように連れこんで（勿論許可は得た）開口一番に全開の笑顔で告げると、恋人ははあ、と気の抜けた返答をした。

「なにがというわけなのかわかりませんが、私の故郷ではそうでしたね」

「ええ、ですので今日はいつもとよりたくさんキスをしてもいいですよね？」

問いかけの形はとっているが、実質は確認だ、ちなみに止められても止まるつもりはない。

恋人のほうも理解しているのだろう、柔らかな苦笑いが答えだった。

ではまず挨拶代わりにと額に口づけると、いまだ

に慣れないらしく目の端をほんのりと染める。

どうも彼女の故郷はこういったコミュニケーションが少なかつたそうで、挨拶代わりに抱きしめても照れるのだ。

いつまでも初々しくて己の理性だの色々が危ないのだが、かわいらしさはいつでも限界突破なのである意味問題はない。

額の次は頬に、それから冠の載っていないつむじにも忘れずに。

じれたように無言で見上げてくる唇は、最後のとっておきだ。

「——すごく嬉しそうですね、ヴァージル」

二度、三度と軽いキスのあと、少しだけ舌を絡めて長くすれば、は、と小さく息が漏れる。

吐息すら奪ってしまいたいけれど、酸欠にするわけにはいかないのが惜しいところだ。

「ええ、それはもう。俺としては一日百回でもキスしたいのにさせてもらえないので。こういう日なら許してくれるでしょう？」

本気で数を計算しているわけではないが、大抵途中で恥ずかしいからもう無理！と言われて打ち止めにされるのだ。

聞の中では断られないが、その場合はキス以外にもあれこれしているわけだ。

口づけだけを堪能したいと願っても、なかなかう

まくいかないし、途中でどちらかがキスだけでは我慢できなくなってしまうのだ。

だから記念日は絶好の機会だと思つたのも、ごく自然な成り行きだろう。

「普段も嫌ってわけじゃ……ただ止まらなくなるから自制してるだけで」

ああでも服に隠れた場所にもキスをしたいが、そうするとどんだん熱が入って、結局違う方向に走ってしまうんだよな——などと不埒な妄想をしていたために、その言葉はヴァージルの耳に入ることにはなかつた。

慌てて謝罪しよう一度とせがんだところ「数えないでくださいね」と言われ、わかりましたとうなずいた。

さらりと騙されたわけだが、当人はまったく気がつかない。——どのみち、内容は似たようなもので、この先の結末も変わらないのだけれど。

ヴァージルは恋人の細い腰を引き寄せて、ご機嫌で素肌の覗く肩に口づけを落とす。

「バースにはいくつもの国があつて、それぞれキスの日が違うそうですね」

「え、そうなんですか？」

どうやら彼女も知らなかつたらしい。

故郷の日がこの日に制定された理由が、映画の上映と聞いてそうなんですか、と目を丸くした。

日には知っていても、由来までは知らなかつたらしい。

あれだけ数があれば、さもなりなんと云つたところだろう。

驚く姿もかわいくて、きよんとまたたく瞼に思わずキスをひとつ。

「だからその日も、こうさせてくださいね」

そうすれば年に何度も、いいわけをつけてキスがたくさんできる。

アンジュは「それってどうなんだろう……」と呟いたが、結局嫌とは言わなかつた。

確約をとりつけたいところだが、時間が惜しい。今日のキスの日に異論がないことはわかっているので、たくさんしておきたいのだ。

とはいえ時計の針は無情にも過ぎていき、あつという間に日付が変わつてしまった。

女王と守護聖としての仕事は待つてくれないので、夜ふかしするわけにもいかない。

いや勿論、眠るまでもう何度か——何十回か——キスはするけれど、キスの日だから、という理由はここまでだ。

さんざんした気がするが、それでも足りないのだから、我ながら強欲だ。

「……………まあ」

寝る支度を整えて、同じベッドに入り。

キスの日

すっかり慣れた腕枕におさまってしばらくして、ぼつりと声が漏れる。

妙に低い声に、流石にやりすぎていたのかとあせったが、見下ろす顔はうなじまで真赤だ。

「恥ずかしいけど、ヴァージルとのキスは好きなので、……次も、期待します、ね」

とんでもなくかわいらしい科白を、シャツを掴んで言うなんて。

計算していてもいなくても、息の根を止められるかと思う破壊力だった。

「——とりあえず、延長をお願いします」

だから必死な声でそう懇願して、寝る体勢だったのを組み敷いてしまったのは、しかたのないことだと思う。

キス禁止

今日はキス禁止です、と告げた瞬間のヴァージルの表情変化と云ったら、予想はしていたがものすごいものだった。

絶望とはまさに今、といった風情で、ふらりとよろめきすらした。

アンジュが抱きついててもブレもしないというのに、今ならつつくだけで倒せそうだ。

本当につついて怪我をさせては困るから、想像するだけにしておく。

「どうしてですか、俺がなにかしましたか？」

「いえ、ヴァージルはなにもしてません、口内炎が痛いんです」

あまりに悲壮感を漂わせているので、早々に事情を説明する。

このところ仕事が忙しかったせいでだろう、気づいた時には立派な口内炎ができていた。

薬で痛みは抑えられているが、根本的な解決はストレス解消、十分な睡眠、栄養のある食事だ。

食事に関しては女王になってから困ることはないが、前者二つはいかんともしがたい。

もう少し宇宙が落ちつけばいいのだが、それまでは何度か口内炎に悩まされることだろう。

いかな女王といっても、こればかりは時間で治るのを待つしかない。

「歯並びのせいで、傷ができやすいですよ」

口内炎ができると余計に引っかけたりやすくなり、さらに傷が大きくなる、という悪循環に陥りやすいのだ。

親不知を抜くかどうかどうするかなんて話も医者で出ていたが、結局決まる前に聖地へきてしまった。

そういえば女王は虫歯になるのだろうか。病気にかかることはないらしいが、虫歯は正確には病気ではないし。

うーん、と首をかしげていると、ヴァージルの手がそろりと伸びてきた。

違和感から気づいたのだろう、正確に口内炎のあるほうの頬に右手が添えられるが、ふれてくることはない。

「それならせめて、早く寝ましょう、余計に体調を崩さないようにしないと」

恭しく手をとられ、ベッドまで誘導される。

まるでお姫様にでもなったようで——などと口にすれば、間違いなく恥ずかしい科白で肯定されるから言わないけれど。

お話の中だけだと思っていた行動も、ヴァージルがやると様になるのだから驚きた。

もっと凄いのは、そんな彼が己の恋人だということ

とだけれど。

「氣遣つてくれて、ありがとうございます」

共にベッドへ入り、お休みのキスは頬ではなく額に落とされる。

「ごめんなさいと謝罪するのはやめて、代わりに感謝を告げれば、いいえ、と笑顔が返ってきた。」

「その代わり、よくなったらできなかつた分含めて三倍返ししてもらいますから」

「——へ？」

「バースの言葉なのでしょう？」

いやたしかに三倍返しという文言はあるが、それはこういう時に使うものではない。

口内炎が引くまで数日かかるわけで、その分の三倍のキスとなると、……数えかけて、むなしのでやめた。

今後ならないようにしてほしいという氣遣いなのか、したいだけかはよくわからないが、どちらにしろ、嫌ではないから困ってしまう。

キスができなくてつまらないのは、自分だって同じなのだから。

——とりあえず、かつてお世話になつていたものより高性能なビタミンサプリをたくさんとろうと決意するのだった。

ヴァージルの誕生日

「ヴァージル、誕生日、なにか食べたいものはありますか？」

タブレットでレシピ集を眺めながら、後ろに声をかける。

アンジュを背中からすっぽり抱きこんでいる彼は、肩越しにそれを覗きこんだ。

並んでいるのは、おうちパーティーにオススメというレシピたちだ。

首座主催で誕生日の前後の休日に、守護聖全員でパーティーをすることは決まっている。

その席ではお抱えの料理人たちが腕をふるってくれるだろう。

それとは別に、誕生日当日は、二人きりですごせるよう配慮してもらった。

だから誰にも邪魔されずのんびりできる。

アンジュは料理が得意ではないが、恋人のために手料理をふるまうなんて、いかにもベタでたまにはいいじゃないか、と思いついた。

しかしおもてなし料理などろくにつくったことがないので、折角ならヴァージルにも見せてもらって、なににするか決めようと考えたわけだ。

「いい機会なので、あなたが誕生日に食べていたも

のがいいです」

「私ですか？　そうするとイベント感はいまいちないかもですよ」

誕生日には好きなものを食べる、といつからか決めていたが、ハンバーグや、せいぜいチキン程度なので、あまり豪華さはない。

子供の食べたいものという意味では鉄板なのだが、どうにも派手ではない。

大人になってからは誕生日も仕事のことが多かつたし、実家を離れていたから、せいぜいワンランク上の店で外食か、ちよつと値が張る総菜を選ぶ程度だった。

あとはいいお酒を飲むとかだが、どれも聖地では地味になってしまう。

だがヴァージルは、それがいいです、と譲らない。「小さいころのあなたが感じられるなら、派手である必要はありませんよ」

整った顔に嬉しそうな声で至近距離で囁かれて、いつまで経っても慣れずに赤面してしまう。

それなら、と誕生日に食べたものを思い出しながら話していくと、興味深そうに聞いてくれた。

ハンバーグならソースを凝ったものにするとか、当事懂れていた煮込みにすれば見た目も豪華になる。チキンは某ファーストフードのアレではなく、丸ごと……は手に余るけれど立派なオーブンはあるか

ら挑戦できないことはない。

とつとつと画面をタップして眺めていると、ふと名を呼ばれた。

「わがままを言ってもいいですか？」

突然の発言だが、いいですよ、と即答する。

なにせ彼の誕生日なのだ、叶えられる我儘なら、いくらでもと思う。

快諾されたものの、気恥ずかしいのか、ヴァージルはしばらく黙ってしまふ。

会話の流れから料理のリクエストだと思ったのだが、なにか別件なのだろうかと首をかしげた。

「……その……料理の練習などをする時は、俺も同席させてほしいんです」

やがての内容に、さらに首を斜めにしてしまった。そこまで躊躇してから口にするのではない気がしたからだ。

実際、当日いきなり凝った料理はハードルが高いので、練習してみたことはするだろう。

それくらいなら、と言う前に、あと、と続いた。

「飾りつけだとか、とにかく、俺の誕生日のための準備をする時も、あなたと一緒にいたいんです」

「そうしたら、当日の驚きが減っちゃいませんか？」
聡いこの男にサプライズをしかける気は早々になくしているが、一般的には準備は祝う相手に見せないものだろう。

ヴァージルも自覚はあるようだが、発言を撤回する気はないらしい。

「あなたの楽しみをいくらか奪ってしまうかもしれませんが……準備を一人でするとなると、当然、仕事のあとや、休日になりますよね」

女王にも守護聖にも、有給などというものは存在しない。

理由があれば休むことはできるが、そうでないかぎりは、月の曜日から金の曜日まで働くことになっている。

恋人の誕生日準備のために休みます、なんて言えないし、言うつもりもない。

従ってヴァージルの言うとおり、料理の練習などは空き時間を使うつもりだった。

……段々、彼の言いたいことが見えてきた。

「そうなると、二人で過ごす時間が減ってしまう。俺の誕生日なら、準備の時間も俺が欲しいんです」

なるほど、たしかに相当な我儘だ。

だが、彼らしい気がして、覚えなくすりどりと笑ってしまう。

当日びっくりさせることはできないが、サプライズは他の守護聖に任せればいいだろう。

練習と同じ料理を何度か食べることになるかもしれないけれど、それだって二人で食べるなら楽しいはずだ。

「いいですよ、じゃあ、今日から誕生日まで、毎日一緒にすごしましょう」

普段からほぼ毎日一緒だから、かわりばえしなないところだが、そこに「誕生日」という理由がつくと、なんだか景色が変わって見えるから不思議なものだ。ばあっと花が咲いたように嬉しそうな顔をしたから、ヴァージルも同じ気持ちなのだろう。

ありがとうございます、ときちんと礼を述べてくるあたり、律儀な性格だ。

秘密にする必要がないのならと、アンジュはパーティーグッズのページを開いた。

「子供のころの誕生日は、暗くなると光るシールを貼ったんです、折角なので、やってみませんか？」

ケーキの蝋燭を吹く時に電気を消すからと蓄光シールを貼りつけていたのだ。

こちらの技術ならもっと派手なことできるが、自分の昔を再現というなら、むしろささやかなほうがいい。

ヴァージルは興味深げに眺めているので、これはこれでよさそうだ。

星などの王道シールから、この宇宙らしく鼻などなど、あれもこれもと選んでしまう。

「貼るほうは任せてくださいね」
アンジュ一人では難しい飾りつけも、この男がいれば難なくすみそうだ。

そもそも、危険だからと踏み台に乗ることも許可しない気がするし。

しかし、なにからなにまでわかった状態というのも、やっぱりちよつと面白くない。

プレゼントは秘密にしているけれど、他にも少しくらい、時間をとらないサプライズを仕込みたい。

ふと思いついた案があったので、ひとまず頭の中にメモをしておき、お茶のおかわりをしながら、おうちパーティーの案を二人で出して、夜は更けていった。

そして翌日、仕事の合間の休憩時間にアンジュが調べたのは——いわゆる、勝負下着やベビードールといわれる品々。

プライベートのタブレットではあるが、執務室でこれを見るのはなかなか勇気がある。他に誰も見ていないとしてもだ。

だが、仕事のあとはヴァージルと合流するので、ここしか使える時間がない。

色は当然オレンジにして、あとはどんなデザインにするかが悩ましい。

初回からあまり攻めたものにする度胸はないので、ほどほどのものを探していく。

謎の技術で即配達されるが、とどいたことをバレ

でも駄目だ。

さんざん悩んで、見た目だけは長めのキャミソールっぽいものに決めた。

だが、普通のそれと違うのは、前部分はリボンで解けば全開になるというところだ。

リボンで留める場所はおへその下まであるので、きちんと閉めればあまり恥ずかしくはない……だろう、多分。

なにより画面越しだが綺麗なオレンジだし、かわいらしいデザインでもあった。

購入をタップして、ふうと一息つく。

これからヴァージルの誕生日までの数日は、準備期間ということ、毎晩一緒だ。

料理の練習をしたり、なにもせず共に眠ったり。

いつもは少し遠慮して日を空けるけれど、誕生日を免罪符にできるのだ。

いっそ同居すればと言われているが、それはとりあえず置いておく。

通いあうという関係も、これはこれで楽しいから続けたいのだ。

それにしても、これではどちらがプレゼントをもらっているかわからないが、誰も損をしていないのでいいことにする。

「……たのしみだなあ」

しみじみそう呟いて、午後の仕事も頑張ろうと、

伸びをした。

アンジュの誕生日

にここに、という擬音に相応しい全開の笑顔。

朝起きてはじめて見た恋人の顔が、それだった。

「おはようございます、アンジュ」

「おはようございます……今日も朝から眩しいですね……」

「まだ眠いですか？ カーテンを閉めましょうか」

「……そういう話じゃないです……」

たしかに昨夜のせいで眠気は残っているし、なんなら腰も怠いのだが、意味が違う。

整った顔立ちのヴァーシルが破顔していると、とんでもなくまばゆいのだ。

挨拶代わりの口づけを受ければ、また笑みが深くなる。

一体どこまで変化するのか、知りたくなるくらいだ。——などと声に出せば実証されそうなので黙っておいて、もそもそと起きる支度をする。

今日はアンジュの誕生日だ。

だから昨夜から恋人と一緒に過ごしている。

理解のある周囲のおかげで休みになったので、なにを気にすることもない。

簡単な朝食を用意して食べる間も、ヴァーシルの笑顔は変わらない。

いつもアンジュの一挙手一投足をうっとり眺めるところはあるけれど、今朝は段違いだ。

だが、これといつてなにをしたわけでもない。

むしろ誕生日なのだからと、いつにも増してヴァーシルがなにかもやりたがって、至れり尽くせりだった。

勿論、恋人との甘い時間に異論はないし、少々やりすぎとは思いつつも、嬉しいのも本当だ。

だが、いくらなんでも喜びすぎではないだろうか。特別なことはなにもないのに。

「……ヴァーシルの誕生日の時より、嬉しそうじゃないですか？」

あの日はアンジュなりに趣向を凝らしたつもりだった。

ヴァーシルもとても喜んでくれて、大成功の誕生日だったと自負している。

だのに、世話をされっぱなしの今のほうが満足げだと、ちよつと複雑な気持ちにもなるのだ。

しかし眉を寄せるアンジュに、ヴァーシルは当たり前ですよ、と言い放つ。

少しだけ董色の瞳を伏せて、苦笑いをひとつ。

「俺は守護聖になる前は、家族の——弟のためだけに生きていました」

すう、とどこか冷えた声に、いじけていた心が消え失せる。

慌てて彼の表情を窺うが、反して表情は穏やかなままだ。

「守護聖になったあとは、以前あなたに話したとおりです。ですが、あなたに恋をして、愛しあうようになって、俺はただのヴァージルとして生きられるようになった」

家族のためでもなく、守護聖としてでもなく、感情を持つひとりとして。

ほとんどの者が当たり前にしていることを、彼はそれまで手に持たずにいた。

望んでのことではあったから、後悔はないと知っているけれど――

「俺を生かしてくれたあなたが生まれた日です。俺の誕生日より嬉しいのは、当然でしょう？」

大きな手が壊れものを扱うように、やんわりとアンジユの手をにぎる。

どこか不安げだった過去はもうなく、決して離さない意思が感じられた。

「あなたがこの日に生まれて、今、俺のそばで、俺に祝わせてくれる。こんなに幸せなことは他にない」とるけそような表情で、心の底から愛おしげに囁きかけてくる。

手を握られているせいで、顔を隠すことはできず、赤面した様子を晒すことになってしまった。

それを見たヴァージルはからかうことなどせず、

ますます幸せそうにするばかりだ。

普段から愛の言葉を惜しげもなく与えてくれるけれど、今日のこれはズルイ。

こんなことを言われたら――

「……ヴァージル、片づけしたら、ベッド、行きましょう」

指を離していわゆる恋人繋ぎに絡め直すと、彼はきよとんと目を瞬かせた。

「ですが、今日は外出の予定では？」

「そのつもりでしたけど……」

たしかに当初は、普通の恋人のように誕生日デートを満喫したいと頼んでいた。

朝食の皿を二人で洗って、服を着替えて外出する。景色のいいところを何カ所か回って、カフェテリアでランチをして、夜はまた別の場所でちよつとい

いディナー。

ベタだが、それがいい、と思ったのだ。

互いの服装も通販サイトで悩んだ挙句に決めたカジュアルなもので、ばっちり着こなした彼と歩くのは、とても楽しみだった。

だが、爆弾発言を投下された今、はじめの計画どおりに進める気なんて起きるわけがない。

「ヴァージルを独り占めして、一日中いちゃいちゃしたくなつたんです。だから――」

ベッドでなくてもいいですけど、と言いかけた時

には、なぜか横抱きにされていた。

さっきまで椅子にすわっていたはずなのに、どういふことかさっぱりわからない。

頭上のヴァージルは相変わらずきらきらした笑顔を浮かべているが、その瞳には明らかな欲が見てとれた。

そっとベッドに沈められて、すぐ横にヴァージルが寝転がる。

腕を伸ばしてくつついても、空調は完璧なので暑いことはない。

「途中で寝たら、ごめんなさい」

昨夜の無茶が残っているの、あらかじめ謝っておく。

ヴァージルはいいですよ、と頭をなでてくれて、優しい口づけをいくつも落としてくれた。

「今日はあなたの誕生日ですから、あなたの望むままに」

どろどろに甘い調子で言うものだから、すぐに瞼が重たくなってしまう。

本当は色々したかったのだけれど——まあ、いいか、と放り投げることにした。

だって今日は誕生日だ、甘えて、甘やかされて、溶けた一日を過ごしたって許される。

ただ、せっかく選んだ服を着たヴァージルは見たいので、あとで室内ファッションショーをしてもい

いだろう。

そのあとでミントアイスを二人で分けて食べれば、なかなかいいんじゃないか、なんて考えながら、とうとうと微睡みに身を任せることにした。

おやすみ

「今日も一日お疲れ様でした。最高に凜々しい女王で、最高に可愛い恋人でしたよ」

今宵は一緒にすごそうと共に邸に帰り、食事と入浴をすませた。

ただ眠るだけのつもりだったので、きちんと実用重視のパジャマを着て、大きなベッドにおとなしく横になる。

軽くアンジュを抱きしめたヴァージルは、とろけるような笑顔で囁いた。

一緒に寝る時は、大抵同じような科白を言われるので、言葉自体に驚きはない。

「……私って、そんなに美人じゃないですし、スタイルも故郷の平均くらいなんですよね」

ぼつりと漏らすと、もの言いたげな顔をされたが、とりあえず先を聞いてくれるらしい。

卑下する調子ではなく、淡々と事実を述べたからだろう。

実際、自分の容姿は悪くはないと思うし、嫌いでもないが、特別優れているかという点、そんなこともない。

太ってもいないし痩せすぎてもいないが、徹底した自己管理をしているわけでもない。

女王になって、ドレスを着ることになったから、体型を気にしているけれど、それだって過酷なメニューを組むほどではない。

腹筋は割れていないし力こぶもできない程度の筋肉量だ。

「だけど、ヴァージルが毎日のように言うから」
しかも嘘偽りないと感じられる、全力の勢いで。

はじめのころは恥ずかしかつたし、恋は盲目だからだろうと思ったりもした。

けれど、少しずつ考えが変わっていった。
彼が心から愛しげに囁いてくれるなら、恥じぬようにしていようと、決意とまでは大袈裟だが、そんなふうに考えたのだ。

不思議なもので、かわいいと言われ続けていると、本当にかわいくなつた気がした。

恋人からの言葉だからなおさら嬉しくて、起きてから元気に一日をやつていける力にもなる。

なるほど勇氣の守護聖だ、なんて変な納得もしたくらいだ。

「今もちよつと……結構、照れるんですけど、でも、嬉しいんです」

見返りなく注がれる愛情が、こんなに大きな力になるなんて知らなかった。

「私もヴァージルは守護聖としても、恋人としてもかっこいいって思っているって、同じように伝わっ

ていればいいんですけど」

なかなか真面目に口に出せないのも、ついつい誤魔化したりしがちなのだ。

これではいけないと悩んでも、愛の言葉をてらいなく述べられる文化圏にいなかったし、難しいところだ。

「ちゃんと伝わっていますよ」

にっこりと、それは嬉しそうに微笑んでくれる。

「……あ、でも、守護聖としては一番とは、言えませんが」

「ええ、それは勿論、女王として特別扱いできませんからね」

すんなりと納得されると、ものわかりがよすぎて不安になることもある。

彼にばかり負担をかけているのではないか、とか。

……いや、かけているのは事実なのだけれど。

「恋人として俺を選んでくれて、格好いいと思つてもらえるんですから、宇宙で一番、幸せな男ですよ」

だのにヴァージルは大袈裟なほどのスケールで、けれど掛け値なしの本気で告げてくれるから。

少し生まれてしまう不安も、彼の風の力ですぐ消してくれるのだ。

「……ヴァージル、明日も仕事ですから、夜ふかしはよくないんですけど」

恋人の胸の中は心地よくて、このまま眠ろうと思

えば、時間もかからず寝つけるだろう。

けれど、嫌だな、と我儘な感情があつて、無視するには大きすぎて。

ぎゅっと彼のシャツをつかんで、そろりと見上げてみた。

「もう少しだけ、こうしてたいです」

いいですか？ と一応問いかけるが、ヴァージルの返答は予想がついている。

案の定、少し赤面して重たい息を吐いてから、ぎゅっと強い力で抱きしめてきた。

「そんなかわいいお願いを断れるわけじゃないでしょう。俺だつて叶うなら毎日あなたにたくさんキスをして、抱きしめて、愛していると言いたいですから」

いくらかの早口で紡がれた言葉は彼らしくて、ふふっと笑つてしまう。

とんとんと胸を軽く叩いて隙間をつくつてもらうと、自分からそつとキスをした。

あまり火が点かない程度に、けれど、恋人同士だからできるものを。

続きをねだる代わりに首に腕を回せば、ぱあっと明るい笑顔になる。

一時間くらいなら、睡眠時間にはあまり響かないはず、と時計を確認して、それから先は、眠るまで

恋人の顔だけを見つめていた。

何度でも、呼ぶから

「……誰かいますね」

まだ開始して間もない青空面談だが、淀みのない返答の数々に、真面目に励んでいるのだなと好感を抱いた。

今は女王候補という立場だし、そもそも聖地を知らないから、彼女はまだ「染まって」いない。

だからこそその考えかたは、守護聖たちとの会話とは違う色があつて、端的に言えば面白い。

どこぞの守護聖のように、研究に没入したりはしないけれど。

とにかく、もう少し話を続けたくて先へと進んでいたのだが——前方に気配を感じた。

少し行った場所にある東屋には、デート中のカップルがいるようだ。

べつに、それ自体はなんの問題もない、日の曜日は一部を除いた職員も休日になっているのだから、どうすごしても自由だ。

ただ、飛空都市はなにせ人口が少ない。従つて、デートスポットでは譲りあいが発生する。

誰かがいる時は遠慮する、というのが不文律になつているフシがあるのだ。

真つ昼間の公共の場所だから、隣にいて気まずい

ことをするわけではないが、かといつて堂々と行くのも憚られる。

正しい選択としては、残念ですがと帰還を促すべきだろう。

だが、ここで切りあげるのは惜しい本音も間違はなくある。

ヴァージルは少し考えてから、隣で困惑するアンジュに声をかけた。

「別の道を行つてもいいですか？」

こちらなんです、と示すと、案の定、彼女は怪訝そうにした。

それもそのはず、舗装されていない、二人並んで歩けるかどうかの細い小径だからだ。

気をつけて見なければ、知らずに通りすぎるほどで、実際アンジュは驚いているから認識していなかったのだろう。

「女王試験が始まる前に、地形は頭に叩きこんであります、迷子にさせたりはしませんよ」

秘匿されているわけでもなかったの、地図は配られたし、實際足を運んで確認もしている。

職業病ゆえだが、今は言わなくてもいいだろう。自信たっぷりの発言だったからか、アンジュは少し迷つたものの、好奇心が勝つたらしい。

「じゃあ……案内をお願いします」

「ええ、お任せください」

にこりと微笑み、ヴァーヂルが先に立つ。

飛空都市や聖地にはいくつか、こうしたわざと自然に擬態させた道が存在する。

隠し通路というよりは、つくった者の遊び心なのだろう。

しばらく歩くと道幅は広くなるし、舗装はなくとも道は歩きやすくなっている。

下草も刈りとられているから、しっかりと手は入っているのだ。

けれど巧妙な計算によって、歩いている姿は見えにくくなっている。

乱雑なようで計算された植林によるものだ。

聖地もそうだが、本気のゲリラ戦……もとい追いかけてっこをしたら、なかなか面白い勝負ができるだろう。

「なんだか、探検みたいで楽しいですね」

スカートの裾を気にしつつも、アンジュは無邪気な声をあげている。

戦と無縁の生活だった彼女には、楽しいだけに映るのだろう。

結構なことだと笑みを返しながら、ヴァーヂルはゆっくり進んで行く。

潜伏しやすい地形だとか、そんなことは、知らないままならそのほうがいい。

「珍しい樹木が植えてあったりもするんですよ」

ヴァーヂルはあまり品種にこだわりがないが、おそらく、地域や宇宙で括っているのだろう。

手をかけすぎないという観点からか好き放題に伸びているように見えるが、間隔を空けて植えられているからか、どの木もすくすく成長している。

少し開けた場所だったので、促して隣を歩いていく。

「——あ、この木……」

てくてくと歩いてきたアンジュが、一本の木の前で足を止めた。

花が咲いていたおかげで、ヴァーヂルにもなんの木か判断できた。

公園の目立つ場所にあるものは、ご丁寧の名前の表示があるが、このあたりはないからだ。

「ベリーココですね、俺の故郷にもありました」

食べられる実がなる果実は、サバイバル知識として得ている。

生食ではいまいちでも、ないよりマシという状況だつてあるからだ。

ヴァーヂルの眩きに、アンジュはひくりと顔を歪めた。——一番近い感情をつけるなら、ショック、だろうか。

「アンジュ？」

だが、今の発言のどこに、それほど衝撃を受けるものがあつたかわからない。

紛争のことは匂わせていないのだから、ごくありきたりな世間話の延長だったはずだ。

不思議に思つて名を呼ぶと、はつと表情を変えて、ごめんなさい、と早口で謝つた。

「こんなに違う場所に、同じ木があると思わなくて……ちよつと、自分がどこにいるのか、わからなくなつて」

「ああ……すみません、俺の配慮が足らなかつたです
すね」

「いえ！ ヴァーシルは悪くないです、私が勝手に……ですから」

まだ故郷への思いが残っている彼女を傷つけてしまったようだ。

無理もない、まだ日も浅いのだから。

自覚した途端、後悔が襲つてきて、眉を下げて謝罪すると、彼女は慌てて手をふつてみせた。

「ええと、……そうだ、ヴァーシルは他にもこういう道を知っているんですか？」

急すぎる話題の変えかただが、折角の気遣いを無碍にもできない。

あからさまだが、指摘するような野暮をすべきでもないだろう。

まだ、深く追求する仲でもないのだし。「ええ、よければまた案内しますよ」

だから、すなおにうなずいてみせた。

アンジュ一人では少々危ないが、共にいれば問題ないだろう。

詫びの気持ちもこめて即答すると、約束ですよ、と小指をちらつかせた。

なんだろうと首をかしげたヴァーシルに、小さく苦笑してから説明する姿は、木を見た時の表情と同じくらい、ヴァーシルの脳裏に焼きついた。

それから時がすぎて、女王試験の最中であると自覚しつつも想いを告げて、恋人同士になって。

試験にも全力で挑んだ結果、アンジュは無事に女王になり、二人の仲も認められるという、驚くほどめでたしめでたしの結末になった。

とはいえ、宇宙の危機は簡単に去ってくれない。大量の問題はすぐ片づくわけもなく、しばらくの間は女王も守護聖も忙殺された。

甘つたるい時間がお預けなのは、二人ともわかつていたから、不満は口にしなかつたけれど、なりたての恋人とは思えないほど、ふれあいしなかつた。

仕事で毎日のように顔を合わせていたから耐えられたのだと思う。

折角、聖地に居を移したというのに観光すらできない状態だった。

しかし、崩壊直前の宇宙なのだ、手を抜いてしま

えば結果は明らかで、だから誰も不平などこぼさなかつた。

女王試験を経たおかげか、連携もぐつととれるようになり、宇宙はみるみる落ちついていった。

ワーカホリック気味のヴァージルすらちよつぱり音を上げたくなくなるような日々がすぎて——ようやく、一段落がついたころ。

「……リフオーム、ですか」

ぱちくりと目を瞬くアンジュに、サイラスはにこにこ笑顔でうなずいてみせる。

机の上に示したのは、女王の私邸周辺の詳細な地図だ。

女王や守護聖の邸は、場所こそ変わらないが、諸々は代ごとに手を加えて構わない。

衣装と同じく、本人に暮らしやすいようにしたほうが、サクリアも安定するからだ。

宇宙の安定のためならば、費用はいくらでも、ということらしい。

しかし、就任後はそれどころではなかったのだ、飛空都市の部屋をベースにした家具が配置されただけで、本人の意向はあまり入らなかった。

「べつに、今の状態で困ってないですね」

とはいえ飛空都市の部屋自体も、事前に本人を調

査して配置したものであったので、概ね好評だった。

この部屋も、仮とは言え当時はふまえての内装だから、逸脱してはいないだろうと思っていたが、やはり不満はなかつたらしい。

むしろ、豪華すぎて落ちつかないくらいですよ、とこぼしてみせる。

一角にタタミを置きたいとかコタツがほしいとか、ヴァージルにはよくわからない単語が出てきたが、サイラスはなるほどなるほどと納得しているので、まあいいかと思う。

訪問したい旨を告げた時に、サイラスから話があると聞かれていて、とは聞いていた。

こみいった話ではないので、他に誰かいてもかまわない、とも。

……恐らく、サイラスは己がくることをわかっていたのだろう。

同席したいとねだったのは自分だが、口を出す気は最初からない。ただ、少しでも長く同じ場所にいたかっただけだ。

彼女にとって心地いい空間なら、己に不満が出るはずないという絶対の自信もある。

むしろ、彼女の好みを知る絶好の機会だととらえていた。

「では大がかりな改装は不要……と。邸の外はどうです？」

「外？」

サイラスが示す図に記載されているのは、邸の中心だけではない。

私邸を中心とした一定距離は女王のための敷地なので、そこも好きにしているのだ。

川をつくってもいいし、植える樹木や花も好きにしている。

聖地に招聘された中には、熟練の庭師もいるから、世話に關しても問題ない。

「そんな大規模工事しちゃっていいんですか？」
過去の例を表示されて、アンジュはあからさまに引いている。

今でこそ最低限の状態だが、派手好きな女王は滝を造成したこともあるという。

彼の故郷にも、地位と財力にものを言わせた建造物があった。

だが、これは規模も金額も桁違いだとヴァーゼルも感心した覚えがある。

あれこれ夢想したとしても、土地まで造成するのだ、一市民には思い切れないことだろう。

「まあ、とりあえずあの花見たいとか、そんなノリでいいですよ」

故郷の花でも、どこぞの宇宙の見てみたいものでも、と軽く言い放つサイラスに、少し抵抗感が減ったらしい。

うーん、と地図を眺めて悩んでいる。

「……あとで提出でもいいですか？」
しかし、敷地一帯となればすぐに返答できるものではない。

なにかしら思いついたららしい彼女の言葉に、執事は勿論ですと笑顔で応える。

期日があるものではないが、なにもないと決まりにくいだろうから、と一週間くらいでと言われてうなずいた。

「スケールが大きすぎて、慣れないですね」
サイラスがいなくなり、お茶を飲みながらぼやく

アンジュに、くすりと笑う。

「俺もそうでしたよ。いや……今も慣れないところはありませんが」
「植木って言われても、ベランダでプランターになにか植える程度でしたから……ヴァーゼルは？」

「俺の故郷は冬が長かったので、短い時期だからこそというのがありますね」

おぼろになった記憶ではあるが、懐かしく大切なものだ。

自身で植えたりはしなかったけれど、無駄だと切り捨てる気にもなれなかった。

雪が溶けて鮮やかな花が咲くさまを見ると、いいものだと感動もした。

アンジュのいた地域も冬があったからだろう、共

感を得たらしい。

春を告げる植物の話などをぼつぼつと口にしていくと、アンジュがぎゅつと抱きついてきた。

拒絶する理由もないので、喜んで抱きしめ返す。

「すみません、ちよつと、甘えなくなつて」

咄嗟の行動だったらしく、離れようと身じろいだ身体を、そのまま腕に閉じこめる。

故郷を思いだして寂しくなつたのだろう、おかしなことではない。

「謝らないで。俺は嬉しいので、いつでも、いくらでも甘えてください」

どうにも彼女はこういう時、まず謝罪の言葉を口にする。

たしかに恥ずかしいかもしれないが、自分を悪く思う必要もない。

むしろ、一人で悩まずに甘えてくれるだけ、どれほど自分が安心するか。

だから「ごめんなさい」を「ありがとう」に変えるべく、最近は意図的に言葉を訂正している。

「ヴァージルは止めないから、甘えまくっちゃいそうなんですよ」

だからほどほどにしないとと言われて、なにか問題があるのだろうかと首をかしげた。

だって今はプライベートな時間で、二人は恋人同士なのに。

仕事中は困るが、彼女はその点しつかりしている。むしろ己のほうが自制が効かないくらいだ。

表情が雄弁に語っていたらしい、アンジュはそういうところですよ、と唇を尖らせた。

それがあんまりかわいいので、つい続きを待たずに口づけると、ぷりぷり怒ってしまふ。やっぱかわいい。

この愛らしさが見られるのなら、いくらでも甘やかしていいのではないかと本気で思う。

「……もう！ 甘えすぎてダメダメになりそうだから、ここまでです！」

ついには手で大きな×をつくられてしまった。ヴァージルとしては序の口だし、頭の前から足の

指まで染めたいくらいなのだが、駄目らしい。民族性なのか、オープンな愛情表現がいきすぎると、キャパオーバーになってしまうようだ。

本気で拗ねられて一緒にすごしてくれなくなるとダメージが物凄いの、ひとまず殊勝にうなずいておく。

折角、少しずつ余裕ができて共にいられる時間が増えたのだ。拗ねる姿はやっぱ宇宙一かわいいが、出禁は避けたい。

「ならアンジュ、一緒にカタログを見ませんか？」だからヴァージルはきちんと手を止めて、なにもしないアピールとしてダブルレットをさしだした。

そこには、様々な花の写真が表示されている。どんな花でもとりよせられるとなると、逆に迷ってしまいそうだが、二人ならそれも楽しい。案の定、ごく自然に肩を寄せてきたアンジュの無防備さに、苦言を呈すべきか前言撤回して抱きしめるか、笑顔の裏で真剣に悩むのだった。

その後、少しずつ庭には手が加わっていき、一角には彼女の故郷の花、対角線上にはヴァージルの知る花が植えられた。

ヴァージルの故郷の花も注文していいですか、と聞かれて、即決したのだが、名前はあまり詳しくなかったので一緒に調べた。

辞書や園芸の本を共に眺めて、色々な話をしたので、あれはあれで楽しい時間だった。

目にとまった花はあっても、たいして頓着しなかったのに、あの星にも花言葉があったと知って調べているなんて、我ながら驚きた。

あとは「やってみよう」という本人の願いで小さな家庭菜園もつくられた。

雑草なども庭師にまかせず、そのままになっていく。世話がストレス解消になるらしい。

ハーブも植えたいというので、なににしようか考えているところだ。なにせ、迂闊なものを植えると

恐ろしいほど増殖してしまう。

そして邸の裏手、ぱっと見てはわからない場所には、いくつかの樹木が植えられた。

通りを歩いている分には見つけられない、秘密の場所だ。

花を見渡せるように中央は空いており、いつでも花見を楽しむことができる。

「故郷の花だって全部は知らないけど、こうして揃うと似てたりするんですねえ」

植えられた樹木はほとんどがアンジュの故郷にあるものだが、少しだけヴァージルの知るものや、まったく違う星のものも混じっている。

そもそも、いわゆるヒトと違う種族が住む星もあるのだ。生態系が様々なのだから、植生とて様々なのは当然だろう。

けれどもどこでも戦争が起きたり、愛憎劇が生まれたり。文明の水準にかかわらず、変わっている部分と、同じ部分が存在する。

肝に銘じるためにも、と各地から選んだあたり、彼女の真面目さは少し心配だ。

知りもしなかった地の植物なのに、そっくりな花が咲いているのだと、とある木の幹にふれる。

その横顔は、かなり昔に見た記憶が———と思いついて、女王試験の時だと気づく。

手配するにあたって調べてみると、おのおの故

郷の植物はいくつか絶滅してしまっていた。足もとに咲き誇るそれは、彼女いわくうり二つだが、まったくの別物で、異なる星からとりよせたものだ。

「詳しく調べれば類似点は見つかるだろうが、アンジュが言いたいのはそういうことではない。それくらい、ヴァージルにもわかっている。

「また見られるのは嬉しいけど、でも、本当は違う……寂しいような、不思議な感じですよ」

言葉どおり複雑そうな顔をして、咲き誇る花を眺めている。

一見するとごく普通の庭だが、操作すれば季節は自在に変えられる。

庭師の手にかかれば、ほぼ一年中、好きな花が咲くさまを見ることもできるらしい。

彼女の考える四季とは、名のとおり四分割されていて、季節のとらえかたが異なるのだと知らしめてくる。

二人の間に存在する違いはどうしようもないし、正直、ヴァージルには「感傷」がびんとこない。

わからないのに慰めの言葉を口にするのは空虚すぎるし、それは結局、相手のためと言いつつ、自分の気分をすつきりさせるために存在するものだ。

己の顔で浮ついた科白を言えば、大抵の女性は喜んだけれど、同じことをアンジュにする気はまった

くない。

だからって無視するはずはなく、言葉少なに抱きしめて、気のすむまで花見につきあった。

——庭ができてからそれなりの時間が経過した。

アンジュと一緒にいなくても、好きな時に見えているといい、と庭園の鍵を渡されていた。

認証ではなく、敢えての古びた銀色の鍵だ。

部屋の鍵と一緒に渡されて、恋人同士って感じですよね、と照れくさそうに笑っていたのがたまらなく愛おしかった。

正直ヴァージルにとっては、合鍵の交換は馴染みないものだが、相手の懐に入る権利を渡す、という意味では、なるほど感慨深いものだ。

ヴァージルはアンジュの邸に入る前に、いつも周辺を確認する。

敷地はぐるりと植木と柵で囲われているが、どちらも簡単に乗りこえられる高さだし、センサーはついていても、捕獲のための電磁ネットなどは存在しない。

やすやすと侵入できるが、女王の庭に無断で入ろうとする不届き者は存在しないからだ。

中が見えないよう目隠しの意図が強いので、台無しにするものは配置していないのだろう。

己の身体能力なら、どこからでも入れるけれど、ヴァージルは勿論、ちゃんと扉から入っていく。

約束はしていなかったのだが、夜を共に過ごしたくて終業後に訪れると、使用人から庭にいると教えられた。

呼びつけなくていいと断って、みずから赴くことにしたのだ。

勝手にやってきたのだから当然だと考えただけで、深い意味はなかった。

気配を消し気味に歩いたのも、平素の癖でしかなく、断じてわざとではない。

驚かせるつもりもなくて、姿を見つけたら声をかけようと考えていたのだが、遠目でもわかるほど、アンジュの様子がおかしかった。

悲しげに恋人が見つめているのは、と記憶をたどれば、女王試験がはじまってすぐのころ、ちよつとしたアクシデントの際に見た木と同じもの。

あの時と同じ表情だと、過去が一度に思い起こされる。

アンジュは木の幹に手をかけ、うつむいたために表情は隠れてしまった。

花は美しく咲いている。故郷に心を飛ばして憂えているのだろうか。

だが、すでに彼女と長くない日々をすごしてきたヴァージルの勘は、違う、と叫んでくる。

勘と表現すると当てずっぽうのようだが、そうではない。

経験や知識の積み重なったものが、意識の外で作用して警鐘を鳴らしているのだ、軽んじていいものではない。

アンジュ自身に聞くわけにはいかないと判断し、ヴァージルは彼女の様子を頭に叩きこんでおく。

気配を消したまま注意深く後ろに下がり、見えないう位置まで移動すると、花壇をのんびり眺めているフリをした。

やがてもどってきたアンジュの表情はいつもどおりで、先ほどの欠片すら残していない。

「ヴァージル、きていたんですね」

「ええ、久しぶりに見てみたら、花が変わっているんですね？」

「そうなんです、季節に合わせてみようと思って」
あらかじめ用意した、ここにとどまっていた理由を告げれば、不審に思うこともなく楽しげに答えてくれる。

彼女の解説をにこにことうなずきながら聞きつつ、ヴァージルは早急に、例の木に関するデータを引きだそうと決意した。

そして——今日は、最愛の恋人の誕生日だ。外界と時の流れが違うので、年齢は棚上げした、アンジュいわく「なんとも都合のいい」もの。

先刻までは守護聖全員が参加したパーティーが行われていた。

何人かは少々参加した顔をしつつも、誰もかれもプレゼントを用意して、彼女の好きなものを会場に持ちこんでいた。

女王として、個人として、敬愛され好かれているのだとわかる、いいパーティーだった。

かれらに恋愛感情がないことはわかっているのに、嫉妬心は起きない。

このあとは独占させてもらえるのだし、祝われて幸せそうな彼女を見ると、こちらも嬉しくなる。

恋人として、宇宙を統べる者として、アンジュは最高だろうと声を大にして言える機会なのだから。……と呟いたら、全員から普段から自重してないだろう、としらけた顔をされたのが解せない。

「とつてもたのしかったです」

少し酒も入ったからだろう、ふわふわとした口調が愛らしい。

普段ならもっと景気よく酔っ払うのに、セーブしていたのは、自分とすぐすこことを考えたからだろう。

心地よく酔う程度にとどめて、ヴァージュールとの時間を大切にしてくれている。

甘えて腕を絡めてくれるのは、控えめに言ってもものすごくかわいい。

酔い覚ましを兼ねて歩いていき、そのまま邸の中へ入ろうとする彼女を制止した。

「折角なので、庭に行きませんか？」

夜になっても随所に灯りはあるので、問題なく見て回れる。

もし、足もとが危ういようなら抱えればいいだけのことだ。

一人なら酔っ払いを歩かせたりしないが、自分がいるなら問題ない。

それに、少し酔っているほうがいいだろう。

ヴァージュールの誘いに、アンジュは名案ですね、と微笑んでくれた。

危ないからをいいわけに、くつついたまま進んで行く。

誕生日ということで、庭師にあらかじめ頼んでいたから、樹木の植えられている一角は、イルミネーションで飾られている。

といつても、やりすぎは派手になるばかりなので、少しだけと頼んだが、流石にいい仕事をしてくれた。

強い光ではないものを選んだこともあり、ぼんやりした柔らかな雰囲気アンジュもはしゃいだ声をあげる。

「無断でするのはどうかと思ったのですが、サイラ

「スはいいと言ってくれたので」

執事の許可を得たのは事実なのだが、しれっと彼を巻きこむことは忘れない。

腕の中の恋人は、こういうことなら無許可でオツケーです、と笑ってすませてくれた。

……暗に他のことに對して文句が入っている気がしたが、この際スルーしておく。

丁寧にエスコートして、開けた場所に設置したベンチにすわるよう促した。

ちゃんと腰を落ちつけたことを確認してから、ヴァージュールはアンジュの視線を途切れさせるように、くだんの木の前に立った。

「——最近、あたなの国の言葉を勉強しているんですよ」

ヴァージュールもアンジュも、喋る時にはもともとの言語を使用している。

女王の力に満ちた敷地内では、問題なく意思疎通ができるからだ。

一体どういう仕組みかわからないが、出身地どころか惑星すら異なる者が集まるのだ、公用語を覚えるほうが非効率的だろう。

ただ、細かなニュアンスはズレることもあるし、他に置き換えづらいものは、本人が口にしたそのままだけに相手に伝わっていく。

……そう、あの時ヴァージュールが声に出した、この

木の名前のように。

「はじめはどうして、あなたがあんなに悲しそうな顔をしたのか、わかりませんでした」

さらに加えて、込み入った事情を問うことのできる関係でもなく、信頼もなかった。

今は違う、きつと聞けば教えてくれただろう。

だが、ヴァージュールはまず自分の力で正解を探すことにした。

どうしてと質問されると困るのだが、そうすべきだと、そうしたいと思ったからだ。

「ねえ、……アンジュ」
大切な名を慎重に呼んでから、ヴァージュールはすわる彼女に跪き、視線の高さを合わせる。

アンジュはヴァージュールを見ているようで、その後ろの木にも視線を投げていた。

先日盗み見てしまった時と同じ、悲しげな表情は、名を呼んだ瞬間、微かに揺らいだ。

——だから、己の推測は当たっていると確信して、言葉を紡ぐ勇氣を出した。

「あなたの本当の名前を、教えてくださいませんか？」
おおまかな法則を覚えたあと、まっさきに調べたのは、かの木の名前だった。

調べればその国の音で読みあげてくれる辞書のおかげで、すぐに正解にたどりつけた。

彼女の国の発音だと、かの木の音は恋人の名にと

ても近かった。

はじめは、だから郷愁にかられたのだろうと想像した。

けれど数日経って、違ふ、と急に思い至った。

彼女が表情を曇らせたのは、ヴァージルが「ベリーココ」という名前を口にした時だと思いだしたからだ。

木を眺めた時ではない。——なぜかと考えて、ひとつの仮説に行き当たった。

沈黙する彼女にさしだしたのは、仕事では滅多に使わない紙とペン。

口頭では前回の二の舞で、ヴァージルに聞こえる音は「ベリーココ」になってしまう。

だから、文章のほうが確実だ。

「でも……」

紙を受けとらず、迷うそぶりを見せる彼女の迷いも検討はついている。

「漢字も勉強したので、多分、読めますから」

「……!!」

安心させようと微笑んで告げたが、息を呑む音がした。

驚いた表情から、やはり、と胸中で確信に近づいていく。

なにせかの国は文字が多い。漢字は一体いくつあるんだと天を仰いだくらいだ。

誕生日までにまにあうかと焦ったが、予想が正しければ、大丈夫なはずだ。

譲るつもりがないとわかったのだろう、恋人はひとつ、深く息をついた。

ペンを手にして、ゆっくりと、紙の上に文字をひとつだけ記してみせる。

「ああ……やっぱり。それがあなたの国での本名なんだですね」

「……はい」

ヴァージルが口にした果樹と似ても似つかぬ、けれど恋人の名によく似た音を持つ漢字。

——よく似ているのは当然だ、だって、同じことばなのだ。

淡いピンク色の花を咲かせるから、名前の由来にするのはごく自然なことだったろう。

偶然ほとんど同じ木を見つけ、喜んだのも束の間、己が口にしたまったく違う音は、まだ飛空都市に慣れていない身にどれだけショックだっただろう。

致し方なかったことだし、やり直しなんてできないけれど、この先もトゲのように残るだろう。

「あの時……ああ、本当に、違う場所にきたんだなって……同じものでも、他のひとつにはそうじゃないんだって……」

うつむき、嗚咽混じりに咳かれ、たまらずそっと抱きしめた。

なまじ、日常のやりとりに違和感がなかったからこそ、衝撃は大きかったはずだ。

いずれ他のかたちでも知ることになったろうから、己が最初でよかったと思うけれど、悲しませたこと自体は胸を軋ませる。

「——正直、ちゃんと発音できるか、自信はないんですが」

なにせ誰にも確認してもらっていないのだ。

とりよせたデータで音はわかるし、自分の慣れ親しんだ発音記号でも付記してあったから、練習はできたし、理屈ではわかっている。

カナタあたりなら正誤の判断は可能だろうが、聞かせてやるのは言語道断だった。

——それに恐らく、カナタにも同じように、漢字があるはずだから。

己は彼を傷つけても、うまく癒やせる自信がない。それなら言わないままを選んだのだ。

だから正直なところ、恋人を喜ばせてやれるかわからない。

最悪、もっと悲しませてしまうかもしれない。

正しい音で呼びたいとこだわるのは、今のところヴァージルのエゴなのだから。

よっぽど情けない顔をしていたのだろう、恋人は涙をひっこめて、小さく笑ってくれた。

「いいですよ、ヴァージルが呼ぶなら、違ったって」

「俺が嫌なんですけどね……」

自尊心というか、男心というか、とにかくそういう面倒くさいものなのだ。

ぼやいてみせたものの、呼びたいと願っていることは変わらない。

「間違っていたら、指摘してください」

それと、変な発音でも笑わないでくださいねと何度も念を押してから、空咳をひとつこぼして覚悟を決める。

「——杏」

今までで一番丁寧に、慎重に。そして、最大級の愛情をこめて。

耳もとに囁くと、落ちついていたはずの涙がまた溢れてきた。

一瞬ぎよつとしたものの、その涙は悲しさからではないようで、唇は笑みを浮かべたままだ。

ぎゅつと首に腕を回され、彼女にしてはめいっぴいの力で抱きしめられる。

「合ってます。……うれしいです、ヴァージルに、呼んでもらえて」

泣きじゃくりながらのたどたどしい科白だったが、ほっと胸をなでおろす。

本当かどうかの判定は彼女にしかできないが、恋

人が満足してくれたなら正解でいい。

他の誰に聞かせるつもりもないのだし。

「——あなたが望むなら、これから何度でも呼びますよ」

過去を置いて行く必要はない、掌にすくったまま、先へ進んでもいいのだと。

言葉だけでなく行動で示して女王として在る彼女だからこそ、同じなのだと思いたい。

これは守護聖であり、伴侶である己にしかできない——もとい、他の誰にも許せないことだから。

「じゃあ、ふたりきりの時には、今みたいに呼んでほしいです」

ぐずぐずと涙を抑えながらのかわいいばかりのお願いに、喜んでと答えて口づけをおくる。

他の誰かに真似されても困るので、余人のいない時はこちらから頼みたかったくらいだ。

「あと……私も、ヴァーヂルの国のことばを覚えていす」

これからも似たようなことは起きて、そのたび、どちらかの胸に小さな痛みをつけるだろう。

けれどこの先は、互いにそれを伝えて、教えあつていける。

「ええ、俺は故郷の花の名前を知らないで、一緒に勉強しましょう」

花だけではなくて、綺麗なものや、美しい事象や、

——当時の己が覚える必要がないと捨ててきたものすべてを。

約束ですよと、いつかのように小指をさしだす愛おしい存在に、まだ慣れぬアクセントで応じながら、ヴァーヂルは一度だけ、はるか過去を思つて目を閉じた。

迷惑な隣人

「お隣に宇宙？」

「ずいぶんなパワーワードですね、とアンジュが呟いた。

パワーワードという意味をつかみあぐねたが、サイルスの報告は続いている。

あとでカナタあたりに聞いてみようかと決めて、おとなしく聞くことにする。

定例の女王と守護聖によるミーティングの席で、王立研究院からもたらされた報せ。

それは、この宇宙の隣に別の宇宙が出現した——というものだった。

「普通ホイホイ移動するものじゃないですよね？」

「ええ、勿論です」

簡単に宇宙が動かされてはたまったものではない。実際、隣といっても気の遠くなるような距離があり、通常の方法での行き来は不可能だ。

この宇宙に暮らす誰も、隣にできたことには気づかない。

知り得るのは聖地にいる者たちだけだ。ただ、隣にやってきた宇宙自体の情報はかなり昔から存在していたという。

データベースによると、歴史も同じくらいで、

もともとご近所さんの宇宙ではあったらしい。

あちらもちょうど女王にあたる存在が代替わりし、その力の行使により距離が近くなったという。

悪影響が出るものではなく、むしろ波長としては似ている宇宙なので、奏上効果が出るかもしれない。

いいことなら、と穏やかにかけた空気だったが、報告を続けるタイラーはやや眉をしかめてただし、と声をあげる。

「その宇宙は、力が正義、という考えなんです」

サクリアの強い者が集まり武を競い、勝者が王となる。

そのため宇宙全体も好戦的で、戦の絶えない環境が当たり前らしい。

勿論、それがその宇宙としての自然な姿であるならば、こちらがどうこう言う義理はない。

あくまで宇宙内での話であり、他への侵攻の過去もない。

けれど隣に存在するとなると、警戒するのは当然だろう。

「まあ、今までやりとりもなかったし、向こうから接触してこないかぎりには、放置でいいんじゃないか？」

「そうだね……興味はあるが、こちらにも余裕があるわけじゃない」

万一、挨拶をしてこないと指摘されたら、宇宙が

まだ不安定なのでと告げれば角は立たないだろう。光と地の守護聖の言葉に反対する者は出なかった。王立研究院には引き続き調べてはもらうが、牽制する必要ではないだろう。アンジュも異論はないというので、ひとまず話はそこまでになった——のだが。

——そして目を置かず、くだんの宇宙のほうから通信がとどいたのだ。

内容は、宇宙が移動したことの詫びと挨拶を兼ねて、直接お目にかかりたい——というもの。

文章は丁寧で、正式なものと確認がとれたから無視もできない。

断る理由もないので受けることとなったのだが、どこで会うかが問題となる。

ああだこうだとやりとりをして、結局、王立研究院の総力で新たにくだんの宇宙との道をつくり、安定している中間点での会見となった。

あまり大人数では影響が出るかもしれないので、首座と女王だけが赴き、相手方も同じ人数だった。

ヴァージルとしては己も同行したかったが、女王と恋人同士であるという情報を与えてもいいかは微妙なところだ。

くだんの宇宙の王が在位中に結婚した過去はない。

となると知らせる必要はないだろうという判断になった。

大きな理由もなく、首座ではない守護聖が同行すれば、痛くない腹を探られる。

まして戦いを至上とする者なら、ヴァージルが武に長けた者であることは見抜くだろう。

余計な疑念を生まないためにも、同行は叶わなかった。

頭では理解したが、自分の手のとどかない場所に彼女が赴くかと思うと、気が気ではない。

王立研究院で帰還をずっと待ち続けていると、タイラーには露骨に邪魔者扱いされ、サイラスには「徘徊するハクビシンのようですね」と意味不明な比喩をされた。

やきもきしながら、タイラーに白い目で見られても気にせずゲートの近くにいますわって——到着を示すアラートが鳴ると、一番近くに立った。

「ただいま帰りま……した？」

無事にもどってきたと確認すると、挨拶より先に抱きしめていた。

「ヴァージル！ 人前です、工作中です！」

どこも怪我などしていないと瞬時に確認したところに、べし、と肩をはたかれ怒られる。

だが、離す気はないし、周囲の者もあきらめていくようなので抱きしめたままに決めた。

「今の速さ、俺を抱きしめた可能性もあったんじゃないか……？」

「ありえませんか。俺がアンジュを間違えると思いませんか？」

「わー情熱的……」

あまりの素早さに恐ろしい想像をしたユエに、言下に断じる。

咄嗟の動きだったとはいえ、恋人と男を間違えるなんて絶対にしない。

ヴァージルにとっては当たり前だったのが、ユエだけではなく恋人にも平淡な声で呟かれた。

「とりあえず、みんなを集めて報告したいので、どいてください」

ガチなトーンかつ、女王の顔で言われたので、渋々従った。

聖殿に移動して、守護聖全員に会見の模様を伝えていく。

いわく、話しあい自体はなごやかに終わったのだという。

王と名乗ったその人物は、武力一辺倒ではなく、当たり前だがサクリアも申し分ない。

戦いばかりでなかなか文明が進まない星も多いので、少しずつ変えていきたいと意欲も見せた。

だから参考にさせてくださいと熱心に請われたと聞いた時はむっとしたが、こちらも金の髪の女王が

司る宇宙には世話になった。

となれば己たちが同じ立場になるのも、巡りめぐってというものだ。

直接会うのはなかなか難しいからと、映像でのやりとりで決まり、ヴァージルもあちらの風の守護聖と挨拶をした。

その後も時折、あちらから相談のような雑談があったが、前もって連絡もきたし、札を失するものはなかったのも、これも仕事だと応対した。

他者との交流が少ないという点では、どちらの宇宙も同じなので、なんだかんだで新しい出合いは悪いものではないと思つた。——思つていたのだが。

「あちらの王に、プロポーズされました」

「……は？」

アンジュの私邸に共に帰宅し、寝る支度を整えてからの発言に、地の底を這うような声が出た。

くだんの王とのやりとりは、最近や数日に一度くらい頻度になつていく。

正直多くないか？ と思つていたが、宇宙のためと思えば文句も言えない。

今日も通信の日だったと聞いていて、思い返せば迎へに行つた時から、少し様子はおかしかった。

プロポーズされていたからだとわかり、ぐらりと

脳が嫉妬で焼けた。

アンジュはぎゅうと抱きついてきて、勿論断りましたよ、と続ける。

当たり前だと思いつつも、安堵の吐息をこぼすことは止められなかった。

「どうも、争いを減らそうとしてもうまくいかないらしくて……」

宇宙の特徴として、炎などの力が強く、水や地は低いのだという。

そのため、バランスをとろうと力を送っても成功せず、目に見える効果は出ていない。

数百年、あるいはそれ以上のスパンで考えているだろうが、焦りは出てくるだろう。

アンジュは王の話をよく聞いてやり、結果、懐かれて——なつかれすぎたわけだ。

「断る際にちゃんと、守護聖と恋人ですからって言いましたし」

「……引いてくれたんですか？」

女王と王の恋愛となると、当然だが前例がないことだし、スケールも大きすぎる。

感情が急いでいたとしても、まったくの考えなしでの求婚ではないだろう。

ある程度、実現した場合も想定していなければ、告白などできるはずがない。

だから、想いはかなり深いはずだ。

「引いてくれなきゃ困ります。私には、あなたがいるんですから」

少し照れながらも断言されたので、抱きしめる腕に力が入る。

嬉しさからキスの雨を降らせながらも、懸念は残るままだ。

彼女の気持ちは疑うべくもない、だが、相手は簡単にあきらめるだろうか。

少なくとも己は——気持ちを封じることなんてできなかつた。

そもそもこんなに魅力的な彼女のことを、一度断られた程度であきらめられたら、覚悟はその程度か、と思ってしまう。

だからだといって何度も口説かれても困るので、我ながら面倒な思考回路でもある。

明日、みんなにも報告しますね、というアンジュに相槌を打ちながらも、胸には嫌な予感がつきまとったままだった。

翌朝、定例のミーティングでアンジュがプロポーズの件を告げると、ざわりと場がさざめいて、ついで、視線がヴァージルにむけられた。

気遣うような視線がいたたまれなくて、すぐに口を開く。

「俺は昨夜、先に聞きました」

「それでおとなしいのか」

シュリの納得にジト目をむけてしまうが、彼らの言いたいこともわかる。

アンジュは苦笑いを一瞬したのち、女王の顔で淡々と説明をする。

「といっても、断ったという結果くらいしか話すことはない。」

「あちらがおとなしく引いてくれるなら、今後もしいご近所さんとしてやっていきたいが、こればかりはわからない。」

全員に留意してもらおうよう頼むのが関の山だった。プロポーズを断ってからも、くだんの宇宙とのやりとりは続けられた。

守護聖の中にはいい友情を育んだ者もいたからだ。王とのその後はアンジュの話ではあるが、謝罪のあととは前と同じく、宇宙についての相談や愚痴だけになったという。

「怪しいと思う気持ちはあれど、無碍にできないのも事実。」

「間隔も空いてきたというので、少し安心していたのだが――」

「貴様は……風か。全員聖地から追いだしたはずだったんだがな」

「忌々しげに、だが悠然と呟かれて、やはりか、と舌打ちする。」

「くだんの王の告白を断ってから、聖地でもかなりの月日が経過していた。」

「合間に通信でのやりとりはしていたが、彼が口説いてくることはなく、安心していた矢先、各地で異常事態が勃発したのだ。」

「いくらかの時差はあれど、ほぼ同時に何力所でもということ、女王試験以来の危機に聖地すべてが対応に追われた。」

「調べたところ、各地の平定にはサクリアの力が必要という見立てにより、対応のため各地へ守護聖たちが赴かざるをえなかった。」

「だが、ただ一人、ヴァーゼルだけは留守居として聖地に残った。」

「本来こういった場合、戦力になる己がまっさきに行くべきだったが、守護聖が全員不在になるのはよくない、という総意のもと、とどまることになったのだ。」

「あまりにも各地で、すべてのサクリアがおかしくなっている。」

「まるで狙い澄ましたかのように地域はバラバラで、なんらかの介入を疑うのは当然だった。」

もしかして、という予想は誰しも立てていたからこそ、ヴァージルにまかせたのだ。

「こちらには空気がいいな、女王の力だろう」
うっとりとした微笑む男が、彼女をあきらめていないのがはつきりわかる。

あちらの宇宙の王は、閉じていたはずの道を強引に開き、こちらの宇宙へ渡ってきた。

女王のサクリアをたどったのだろう、迷うことなくここへ——女王の執務室へ続く廊下に出現した。流石に執務室へ直接は難しかったようで、待機していた己の目前にあらわれたのは好都合だ。

宇宙間だ、簡単に行き来できるものではないのだが、そこは流石に王と名乗るだけはある。

おそらく、各地の異常も彼の命令によって、あちらの守護聖が引き起こしたに違いない。

でなければ落ちついてきた現状で、ここまで全員が行く事態になるはずがない。

だが、短時間では証拠も見つけられなかったので、防衛という戦法しか選べなかった。

「女王はどこだ……隠したな？」
サクリアは感じれど、姿がないことから察したらしい。

周囲をぐるりと見回してから、ぎろりと殺意のこもった目で睨まれる。

強い気を当てられても、ヴァージルは動じず睨み

返した。

なるべく、侮蔑の意思が伝わるようにしたおかげで、彼は不愉快げに眉を寄せる。

正攻法でふられたのなら奪えばいい——なんとも戦闘民族らしい考えかただ。

しかし、きちんと戦略を立てているあたり、やはりバカではないらしい。

ヴァージルとしては争い自体を否定するつもりはないが、女王としても、恋人としても、彼女をこの宇宙から失うわけにはいかない。

そのためには侵略者を排除する必要がある。——ある、のだが。

腰を低くして臨戦態勢のヴァージルを見ても、男は軽く笑うだけで構えもしない。

いっそ無防備なほどに突っ立っているだけだ。それなのに、ヴァージルはどうしても切り込むことができない。

「貴様一人、どうということはない。……怪我をしたくないなら、退け」
「慮外者が……!!」

小さく叫んで銃を構えるものの、背中を冷や汗が伝い、本能は逃げろと叫んでいる。

指をかけたまま、発砲もできない有様だ。本来ならば宇宙へむけられるはずのサクリアが、

敵意をもって己だけに突き刺さってきている。

別宇宙の王であろうとも、その力の前に守護聖ひとりではあまりに無力だ。

圧倒的な力に、すぐにも膝をつくか、逃亡してしまいたくなる。

負けがわかっている戦いに挑むなど愚の骨頂だ。

昔の己なら退却して作戦を練るなり、あきらめて別の場所を攻めただろう。

だが、今回は引くという選択肢は選べない。

それでも照準を合わせたまま立っていられるのは、背をむけた扉の中にいる女王であり、最愛の恋人を守るためだ。

執念と言ってもいい想いだけが、ヴァーヂルを立てていた。

だが、王はつまらなそうに眉を寄せるばかり。

「そんなもので止められるとでも？」

嘲笑する声に、ぐらりと腹が怒りで沸きたつ。

見た目こそ、かつて使用していた銃に似せているが、中味はまるきり別物だ。

威力も精度も、恐ろしいほど向上しているゼノ特製の武器——だが、これでも女王と同じ存在である男の前には玩具なのだろう。

目の前の男は、嫌になるほど余裕たつぷりの表情を崩さない。

引き金を引いても、まず当たる気がしないし、隙が生まれるばかりで悪手だろう。

だが、跪くなんて死んでも御免だから、ヴァーヂルの行動はひとつしかない。

時間稼ぎをしても、好転する可能性は低いけれど、長引かせれば守護聖が一人くらい帰ってくる可能性がある。

単身では勝てないなら、そこに賭けるしかない。

じりじりとした空気がどれだけ続いたか忘れたころ、がしゃん、と背後で聞こえるはずのない、鍵の外れる音がした。

「——もう、すっごく開けるの大変だったんですけど！」

場違いなかわいらしいふくれ面をさらしながら文句をこぼし、扉を開けたのは、大切な守るべき存在。

いつもの女王の装束ではない、女王候補時代のよくな動きやすい、戦闘用とは思えぬ服を着ていた。

くだんの宇宙から力の介入を知らされた直後、強引に部屋の中に押しこめて、王立研究院の総力を持つて幾重にも鍵をかけておいたのだが、サクリアと物理的な力で突破したらしい。

「女王……！」

再度避難させようとするより先に、喜色をあらわにした王が近づいてくる。

頬を染める姿だけ見れば、恋をする若人に見えないくもない。——やっっていることは迷惑この上ないが。

おそらく彼女に危害は加えないだろうが、連れ去

られたらその時点でおしまいだ。

なにより、指一本ふれさせたくもない。

進ませまいと立ちふさがると、舌打ちと共にぶわりと力が集まっていくなを肌で感じた。

あれをぶつけられれば、ひとたまりもないと、本能的に察知する。

だが避ければアンジュに当たってしまう、だから一歩も動かさず衝撃に耐えようと足に力を入れた。

——が、目の前に迫った力は、突如あらわれた薄紅色の障壁の前につり、弾け飛んだ。

しかし余波だろう、見えない衝撃波のようなものはしっかりとヴァーシルを襲い、まともに立っていられず膝をついてしまう。

倒れなかったのは格好悪いところを見せたくないプライドだ。

「女王と同等の力を受けようとするからですよ」
わからずやの子供を叱るような声が上から降ってくるが、言葉返す余力もない。

余波だけでごっそりと体力と気力と、一時的だと思いたいがサクリアも削れたらしい。

いつのまにか存在することが当たり前だった力が急速に失われた喪失感、戦闘中だというのに冷静を欠きそうなのだ。

「万一のためにあちらの女王から色々教わっているんです。なのにみんな、全然聞いてくれないし」

過保護すぎませんかと不満をこぼされるが、当たり前だろう。

女王になる前は平和な世界の一般人だったのだ。いくら巨大な力を持っているといっても、それはあくまで宇宙を平定するため。

決して、ヴァーシルたちのような戦いにふるうものではないのだ。

それに己としては、諍いに加わらせたくない気持ちもあった。

口論なら大いに結構だと思っている。けれど、現実に手を血で染めてほしいわけじゃない。

汚れ仕事が必要なら、己か他の誰でもやればいい。今さら屠った数が一人二人増えても、心は動かないのだから。

彼女には、綺麗なままで、知らないままでいてほしかった。

「……まあ、そのへんのおしおきは後回しです」
とん、と肩に手を置かれて、じわりと温もりが広がる。

同時に身体が軽くなった気がした。

どうにか顔を上げると、そこには困ったような、けれど愛おしげに己を見つめる蒼い瞳。
「これは宇宙を司る者同士の問題です」
つまりは戦力外通知だ。

実力差はわかかっていても、言葉にされるときつい

ものがある。

アンジュの顔と先ほどの様子を見るに、勝算は十分にあるのだろうか。

「……守られるだけは、嫌なんですけどね」

今までの人生では、いつも守る側だった。

それがこんな有様なんて、頭で理解していても納得できない。

ダダをこねる子供のような己に、アンジュはにっこりと笑ってみせる。

「ヴァージルがいてくれるから、タイムン張れるんですよ」

軽口めいた発言の一瞬後、女王の顔にもどった彼女は、望まぬ来訪者に厳しい視線をむけた。

己の優位を確信しているのだろうか、男は二人の会話を悠然と見守っていた。

「つられたのにあきらめが悪いですね？」

刺々しい口調にも、彼はめげることはないらしい。

むしろ話しかけてもらえたとばかりに嬉しそうなので、もしかしてちよっと自分と似ているのかもしれない。

「あなたと私が番になれば、双方の宇宙にいい影響があります！」

「——まあ、たしかに試算ではそうなんですけど」
そうだったのか、と知らされていなかった事実

愕然とする。

もつとも、あくまで机上の空論だから、実際にどうなるかはわからないだろうが。

だからこそ男は自信満々にプロポーズしてきたわけだ。

「私はここにいる風の守護聖を伴侶に選んでいるので、あなたはお呼びびじやないんですよ」

伴侶とまで言われておいて、いつまでもうずくまっではいけない。

気力でどうにか立ちあがると、ごく自然に腕を絡めてくる。

愛おしげにヴァージルを見つめたあと、王へとむける視線は冷淡だ。

「こちらの宇宙に攻撃をしかけた時点で、ナイなと思っただけですけど、ヴァージルまで攻撃された今は、なにを言われても聞く耳を持つ気はありません」

口調だけは丁寧だが、声音は凜としており、女王としての力を行使する時よりも冷たい。

本気で、彼女は相手を敵、なおかつこの宇宙に対する異物だと認識しているのだろうか。

しかし絶対零度の対応にも、男は頓着した様子がない。

「では、多少強引になりますが、私の宇宙へお連れしましょう。戦ばかりでも、美しいものだってきちんとあります。きつとお気に召して頂ける」

「わあ。話が通じない」

王の科白に、アンジュが感心したように据わった目で呟く。

力に自信があるから、戦いなど知らない風情のアンジュと、実力差のある風の守護聖だけなら、苦勞せずに目的を遂行できると確信している様子だ。

たしかにアンジュは、戦いという意味では今も隙だらけだし、武人の気配はない。

しかし彼女は女王であり、ここはアンジュの宇宙で、なおかつ聖地なのだ。

地の利という点では、圧倒的に彼女のほうに分がある。

ましてこの場合の戦いというのは、間違いなく単純な銃や武器でのやりあいではない。

「なら、実力行使ですね」

言葉と共に、ばさりと大きな羽の動く音がした。突如アンジュの背中にあらわれたのは、息を呑むほど美しい白い羽。

同時に感じる女王のサクリアは、今までにないほどに強い。

その証拠に、相対する男は無意識に一步下がっていた。

「今すぐ退くなら、ここまでにします」

静かな声はものやわらかなほどなのに、抗えない圧を持つ。

射るような青い目にヴァーゼルはうつかり見惚れ

てしまった。

あんな表情で見られることはごめんだが、美しいものには変わりないのだ。

「そうは……いくか、その、力と、あなたを私もの……！」

かすれた声をあげながらも、王と呼ばれている自負ゆえか、男は前へ進もうとする。

アンジュはやれやれと言いたげにため息を吐くと、再び厳しい顔つきになり、まっすぐ腕を伸ばした。

——そこに、己の手を重ねたのは、無意識だった。けれど、すべてひとりでやらせるなんて、絶対に嫌だと強く思ったのだ。

女王として正しい姿であろうとも、守護聖としては力及ばずとも。

アンジュとヴァーゼルはそれだけの関係ではないのだから、なんの意味がなくても、想いを乗せることはできる。

不意にふれたからか、アンジュは驚いたように目を見張り、一瞬だけ視線が交差する。

いつもの顔で嬉しそうに微笑まれた次には、再び前をむいていた。

手はそのまま、ほどかれることはない。その事実にひどく安堵した。

「では……力づくで、帰ってもらおうわ」

丁寧語を捨てた断言とともに、女王のサクリアが

集まっっていく。

馴染んでいるはずのヴァージルでさえ、重みを感じほどの巨大な力だ。

アンジュは表情を変え、ことなく力を操り、こちらへ果敢に手を伸ばす王へとそのサクリアをむけた。

淡いピンク色の光に包まれた男は、数秒後、まるではじめからいなかったように消え失せる。

「——本人の宇宙へ帰しました、座標は、ズレているかもしれませんが」

静まった廊下に、いささか心許ない声が響く。
恐ろしいほど呆気なく、勝敗は決したらしい。

なんともあつさりした決着に感じられたが、決してそうでないのは、青ざめたアンジュの表情から明らかだ。

翼はすでに消失している、一度の機会に全力を注いだのだろう。

「送り返したついでに道は閉じたので、あとは王立研究院にまかせれば……たぶん……」

「わかりました、そのあたりは俺が伝えます。あなたはずぐ休まないと」

ゆらりと揺れる身体は、立っているのもやつとのもうだ。

失礼、と断って抱え上げると、苦しそうな息が漏れた。

強引に開けられた扉ではなく、執務室の隣につく

られた仮眠室へむかう。

仮眠室と名はついてはいるが、置いてある調度品は一級品だし、ベッドだってクイーンサイズだ。

あまりの快適さに、邸に帰らなくなりそう、と冗談半分で言っただけくらい、何日でもいられるようになってる。

仕事で忙しかった時はやむなく使用していたが、くだんの事態になるまでは使われずにいた。

未使用でも毎日清掃は入っている、いつでも使用には問題ない。

こんな時こそ有効利用しようと、交換してある清潔なシーツの上に横たわらせた。

一度に大きな力を行使したのだ、疲労は並大抵ではないだろう。

この無茶で女王としての寿命が縮まったら……と思うと、かつて倒れた女王の姿と重なり、背筋が冷えていく。

だからこそ、なるべく無理をさせずにいたかったのに、結局はこのザマだ。

「ヴァージル、あちこちへの連絡とか、おまかせしていいですか？」

横になったまま動かさず、眠たげな様子に、勿論ですと快諾する。

寝て回復するものでもないだろうが、それでもいくらかマシになるだろう。

アンジュは右手を伸ばして、ヴァーヂルのシャツをそつとつかんだ。

「あなたがいるから、頑張れたし、事後処理も心配いらないから、全力を出せたんです」

傍らに跪くと、誇らしげな笑顔を見せられて、胸が苦しくなる。

小さな手を両手でにぎると、しつかりとにぎり返してくれた。

仕事仲間としての信頼と、恋人としての原動力。両方なのだと伝えてくれることに愛しさが溢れそうだった。

「連絡は、それ使ってください。だから、起きるまでそばにいてくれなきゃ、嫌です」

女王用の端末を示し、認証を解いてしまう。たしかにこれがあれば、守護聖への連絡もなにも

かも動かすことができる。もとより警備の面でも、離れるなんて選択肢は選

べない。加えてかわいくおねだりされたら、うなずく以外

になかった。「言いたいことも色々ありますが、それは落ちついでからにします」

無茶をしてくか、心配させて、とか。「ふふ……：：：そうですね、お互いに。でも、ちゃんと褒めてくださいね？」

叱るだけはだめですよ、なんて、子供のように吠いたのを最後に、すうっと寝入ってしまった。

ざっと見たところ怪我はないから、念のため医者と呼ぶべきだが、今はいいだろう。

万一を考えて民間人は避難させていたので、呼びもどして平時の状態にするまで時間もかかる。

起こさないよう消音に設定してからデバイスを起動させると、各地に飛んだ守護聖から連絡が入っていた。

どうやら、王を倒したことであちらの宇宙のバランスも崩れたらしく、騒ぎを起こしただろう守護聖

は帰還し、地域の鎮圧もすんだようだ。順次帰還する旨を確認して、ほっと息をつく。守

護聖たちも大きな怪我はないという。それらに代理として返信をして、王立研究院など

に最低限の通達を出していく。あくまで一時的な権限なので、最低限にとどめて

おいた。その間も、つないだ片手は離さないでいたから、

少々やりにくかったが、ほどくなんて考えもしなかった。

少し冷たい手指が温まっていくのを感じて、泣きそうになった。

ひととおりの伝達を終えると、ヴァーヂルはアン

ジュの眠るベッドへもぐりこむ。

守護聖が帰ってくるまで少し間があるし、扉の外に心配を感じればすぐに動ける。

身体は疲労しているが、眠りたいわけではなくて、近くで恋人の鼓動を聞いていたかったのだ。

一定のリズムで刻まれる心臓と、穏やかな寝息。彼女は無事で、ちゃんと己の隣に存在する。

その事実には安堵するとともに、思えば、待つがわになったことはほとんどなかったと気がついた。

かつては守護聖になってからも、いつも己がどこかへ行つてばかりだ。

家族以外にさほど親しい人間はいなかったし、死ぬつもりもなかったから、戦場へ行く際も悲壮感などなかった。

けれどいざ、自分が逆の立場になってみると、これほど気を揉むものなのかと実感する。

助力という意味ではほとんど役に立たず、勝つてくれることを祈るしかない。

大丈夫だと理性が告げていても、気持ちのほうはついていけないものなのだ。

惑星への派遣から帰るたび、甘えてくるアンジュの意味がようやくきちんと理解できた。

それだけは今回の事件に感謝していいかもしれない。とはいえ、二度とあつてほしくない事態だし、次に似たようなことがあれば、事前に潰すまでだが。

守護聖と王立研究院、そして最強執事がいれば、

すぐ聖地はもとの姿をとりもどすだろう。

くだんの宇宙に対しても、なんらかの対処はできるはずだ。

——それでも、己の不甲斐なさを忘れるわけにはいかない。

どうにもできないとしても、それでも、あかくことはやめたくない。

小さな手をにぎりしめながら、ヴァーゼルはそつと顔を寄せて、起こさないようふれるだけのキスを落とす。

馴染んだ身体を胸に抱きこんで深呼吸すると、静かに目を閉じた。

今の自分が、一番

『オーテリブル、残念なお知らせです』

ちっとも残念そうじゃない口調で、画面のむこうのサイラスは嘆く。

大きなベッドの上、アンジュと並んで、ヴァージルは朝から執事のアップを眺める己に、ちよつぱり切なさを感じた。

当然、こちらの映像は出していない、寝起きの無防備な恋人の姿を他人に見せるなんてもつてのほかだからだ。

サイラスも部屋に二人がいることは知っているのに、頓着した様子はない。

映っていないはずなのに、妙に目が合う気がするの

のが恐ろしいけれど。

『王立研究院のシステムトラブルが発生しました。ですの当面、最低限の機能でご容赦ください』

「ええ……大変じゃないですか」
慌てた様子

のアンジュは、ヴァージルがそうですか、と淡々とうなずいたためにさらに驚いたようだった。

そういうえば、彼女が聖地に来てからははじめてのことだな、と気づく。
報告してきたサイラスは、手伝いに行くのだろう、

さっさと通信を切ってしまった。

「たまにあることなんですよ」

つまりアンジュにはお前が説明をしろということだろうと判断する。

宇宙最先端の設備、研究院はみな精鋭、資金は潤沢、宇宙中のデータが手にできて、いくらでも研究に没頭できる。

成果がいまひとつだったとしても、咎められることもないという、研究者にとつては夢のような場所が王立研究院だ。

宇宙のために、かれらは夢中になってくれるのはいいのだが——勢いにつきすぎると、機械のほう

が追いつかなくなることがある。
最新の設備とつたつて、負荷が大きすぎれば故障もするのだ。

しかし、かれらだって考えなしに無茶な研究をするわけではない。

新女王が就任してからは、とにかく宇宙の安定を優先に動いていた。

王立研究院の機能がダウンしては、女王にも負担がかかる。

だから研究はひとまず置いておいて、女王のバックアップに徹していたのだ。

それもあって宇宙は徐々に落ちついていき、やっと安定したと言えるほどになった。

女王や守護聖も定期的に休めるようになったところで、研究員たちも、おのおの研究を再開しているかと許可が出た。

その結果、何人かがはっちゃけて、システムがダウンしたのだろう。

「俺が守護聖になってからも、何度かありましたから……慣れてはいるんですけど」

対応マニュアルもできあがっているので、研究員たちは己の力不足を嘆きつつも、粛々と壊れた機械を入れかえたり、データを復旧させたりする。

重要な報告日にかぶらないようやらかすあたりも、万一を考えてのことなのだろう。

その配慮を、別の場所にむけてほしいところだが。

「やらかしが大きすぎる気もしますけど……」

困惑気味のアンジュに、苦笑を返すほかない。

実際、研究所が爆発しかけたりもしたのだが、黙っていたほうがいいだろう。

職員はあのころとほぼ入れかわっているが、手際はよかったらしく、夕方には機能としては問題なく稼働するようになったと報告を受けた。

ただ、処分する機械が多すぎるので、それらは空いている場所に置いたとのこと。

置いておくだけなら危険ではないものだし、放置といっても野ざらしではなく、ちゃんと研究院併設の倉庫に収納している。

ゼノたちが使いたがるかもしれないし、しばらくそのままにしますとの報告だった。

アンジュにはそのあたりはよくわからないので、サイラスがいいなら、と答えて、一件は片づいた。

聖地のインフラにはそこまで被害もなく、王立研究院も完全休止にはならずすんだ。

とはいえ休日返上、不眠不休でことにあたったため、タイラーがものすごく毒づいていたそうだ。

もと同僚であり同郷のアンジュとレイナのプライベートなやりとりのほうへ、愚痴が書きこまれていたと、アンジュが教えてくれた。

サイラスはもともと王立研究院出身だが、現在は女王の補佐という立ち位置にある。

あまり出しゃばっては、本来の上司との連携がうまくいかないと、様子は伺っていたらしいが、現場に出ることはしなかった。

こっそりタイラーにはアドバイスをしてくれて、彼は感謝しつつも、的確すぎるアドバイスゆえに、なおさら仕事が増えたと愚痴も増えたようだが。

画面は見せてもらえなかったが、心底同情した様子アンジュに、ヴァーゼルも妬く気は起きず、むしろタイラーに酒を奢ってやろうと思うのだった。

そんなふうで、はじまりは特におかしなことではなく、誰も気づくことはなかった。

「こんにちは、ヴァージル」

とある土の曜日の昼下がり。

一仕事を終えてカフェテリアで昼食をとろうとしたヴァージルは、聞き間違えるはずのない声にがたりと椅子を蹴倒す勢いで立ちあがった。

「アンジュ」

素早く彼女の服装を確認してから、通る声で名を呼ぶと、相手はにつこり微笑んで近づいてきた。

女王の衣装であれば陛下と呼ぶけれど、今の彼女は私服だったから、名前で呼んだのだが、間違いではなかったらしい。

アンジュ自身、聖地の人々にも、できれば私服の時は女王と呼ばないでくれと頼んでいるので、他の者も驚いた顔はしない。

また、プライベートで構い過ぎることもない。

ヴァージルの声に幾人かが視線を寄越したが、すぐに外してくれた。

時間も時間ということもあり、カフェはほぼ満席だった。

そうでなくとも、アンジュと別々の席なんて、ヴァージルが選ばせるはずがない。

こちらへどうぞと手招く前に、彼女はヴァージルの席までやってくる。

「一緒にすわっても？」

わかっているだろうに、笑みを浮かべて問いかけ

てくる恋人に、見えないけれど崩れていると自覚できる笑顔で快諾する。

午前中は他の守護聖とある星に關してのあれこれがあったはずだが、思ったよりはやく終わって自由時間になったらしい。

こちらはこちらで、王立研究院に寄ったりしていたので、まったくの別行動だった。

「折角なら、ヴァージルとお昼が食べたいなって思つて。会えてよかつたです」

「それなら連絡してくれば……」

端末は念のため常に携帯している。アンジュからの呼びだしがあった時に、いの一に駆けつけたいからだ。

確認してみても、なんのメッセージもきていない。つまりアンジュは、いるかもわからないのにカフェテリアにきたことになる。

確率は高いとはいえ、非合理的な行動だ。

「会えなかつたら連絡しましたよ。でも、偶然会えたら、楽しいじゃないですか」

けれどアンジュはなんてことないふう口にしてみせた。

最終的には会えたんだし、と悪びれもせず。いたずらっぽい表情に、ふむ、と少し考えて。

「つまり俺のあなたへの想いが引き寄せたというわけですね」

「……ヴァージルならありえる気がします」

半分冗談、半分本気のつもりだったが、この調子だと信じこまれたようだ。

運命なんて言葉はあまり好きではないが、彼女への愛情がそうさせるなら納得するなと思って。

案の定、恋人は少々引いた顔をしたが、かわいいので問題なしだ。

対面で腰を落ちつけて、一緒に昼食をとる。

こういう時間は、仕事の話はしないのが暗黙のルールだ。

別のメニューを頼んで、お互いに気になるおかずを交換したりして。

おいしいと相好を崩すさまを見ていると、こちらまで幸せになつてくる。

栄養価だけを考えた味気ないものではなく、見た目にもこだわった料理は、恋人と一緒にという最高のスパイスで何倍もおいしく感じられた。

食事中も何人かの視線を感じたが、綺麗に無視することにした。

普通にしてくれと頼んでも、やはり近い場所に女王と守護聖がいれば、気になるものだろう。

アンジュへの敵意だのがあれば対処するが、害にならないなら問題ない。

どうせほとんどの恋人同士ばかりなのだから、バカップルっぷりは似たり寄つたりだろう。

アンジュと二人の時は、当然のように優先順位は彼女だ。女王としても、恋人としても。

一市民だったと言う彼女は、ものものしい警備を置きたがらないため、一人で行動することが多い。

だから心配でもあるのだ。たとえ聖地で襲われる可能性が低くても、アクシデントはどこでも起こりうるのだから。

「このあとは自由時間になったので、公園を歩きますか？」

「いいですね、のんびり回る時間もなかなか取れていませんでしたし」

余裕ができてきたからこそできる、休日らしいすごしかただ。

女王候補時代のほうが、余程デートをしていた気がしてしまう。

女王就任後、宇宙は安定をとりもどしてきた。まだ気は抜けないが、それでも聖地での生活は落ちついてきている。

しかし、新女王となったアンジュは聖地にくるごとと体がはじめてだ。

私邸のしつらえに女王として覚えること、そして宇宙意思との対話……と、することは山積みだ。

そのため、やむをえないことだが、ヴァージルと過ごす時間は減ってしまっている。

仕事で顔を合わせることは、それこそ毎日なのだ

が、恋人同士となると……数えかけて、むなしいでやめる。

アンジュがわざとやっているわけではないことは知っているし、文句はない。

女王としての彼女を支える役目だって、誰に譲るつもりもない。

だが、守護聖ではないただの男である部分は、どうしたって寂しさを訴えてしまう。

そんなところに降って湧いた折角の機会だ、満喫するに決まっている。

「珍しい花の咲いている場所や、飛空都市と似た場所もありますから、案内しますよ」

聖地の立地は頭に入っている。今は情報だけでなく、アンジュと行きたい場所を見つけては、脳内の地図に加えている。

かつて花や樹に心が動かなかったわけではない。けれど今は一緒に見たい、という気持ちの方がより強くなっている。

ヴァーシルの誘いに、あどけなくはしゃぐ姿は公共の場でなければ抱きしめたくなる破壊力だった。

とはいえ、ここでは自重しておく。

あとで二人きりになってから、存分に堪能しよう
と決意するのだった。

「このあと一緒に夕食をどうですか？」

金の曜日、アンジュからの誘いとなれば、断る理由はない。

普段の己なら、勿論ですとうなずいただろう。

だが、ヴァーシルはすみません、と眉を下げた。

「少し気になることがあって、調べようと思っ
てるんです」

「気になること……ですか？」

怪訝そうにするのも無理はない。

今のところ、宇宙にこれといった問題は発生して
いないからだ。

風のサクリアも問題ない、むしろ絶好調だ。

「宇宙にはなくて……俺の故郷に関する
ことで、
ちよつと」

彼女相手に嘘はつきたくないの
で正直に言うと、
ああ、と納得した顔になる。

宇宙の動静には関わらなくても、
生物の存在する
星では色々なことが起きている。

たとえ宇宙意思から通達が
なくなっても、大規模な
災害や大戦争などは、悲しい
かな各地でそれこそ山
ほど発生中だ。

女王は手を出すことはないし、
そこまで見ていて
は、とても正気を保てない。

だから意図的に見ないように
しているが、故郷だ
けは別の話だ。

悲しいニュースも多いけれど、まだ減んでないだけで、ほっとできるのだ。

守護聖たちも己の思い入れがある場所の情報は、時折入手して確認しているらしい。

詳しく訪ねたことはないが、ヴァージルもそうだと、いっただか話してくれた。

「調べても、どうかなるわけではないんですが」
苦笑すると、いいえ、と首をふる。

「でも、知ることが無駄だとは思わないし……：思いたくないです」

実感のこもった科白に、そうですとねと相槌を返す。

以前の己だったら、情報は手にしても、あくまでデータとしか認識しなかつただろう。

滅びようがどうなるうが、どうでもいい——感情だつてさして動かなかつたはずだ。

けれど今は違うし、それを悪くない変化だと、受けとめてくれる相手がいる。

「納得するまで調べてくださいね」
「……ありがとうございます」

すなおに引いてくれる恋人に、少しだけ寂しくなるあたりが我儘だ。

だが、平静を装って礼を告げる。

少しでも違和感を出してはならない。彼女は妙に鋭いところがあるから、勘づかれてしまう。

「本当はあなたと過ごしたいんですが……：はあ」

つい本音とともに、深いため息をこぼしてしまふ。彼女はくすくすと笑うと、自分から抱きついてきてくれた。

微かに香る恋人の匂いと温もりに、気づいた時は抱きしめていた。

「少しは充電できましたか？」
いたずらっぽいわい回しは、彼女なりに気を遣つてくれているのだろう。

「……もう少しだけお願いします」
急速充電なんて切なさるので、欲張って延長を申し出る。

キスもねだつて、しばらく甘い時間を堪能したのち、アンジュが馬車へ乗つて去るまで見送つた。

サイラスとレイナもついているので、あちらは心配いらぬはずだ。

仕事は片づけたし、忘れものもない。
一つ息をついてから、ヴァージルは己の私邸までの道を歩いて行く。

いつもより集中してすぐ、首の後ろにヒリつくものを感じた。

——やはり、間違いない。

不自然にならない程度に視線を巡らせてみても、

なにもおかしなもの映らない。

ちようどよく——それともわざとなのか、街路樹のひとつに子供のものらしき靴が引つかかっていた。

周辺に落とし主の姿はない、遅くなったのであきらめたのか、判断はつきかねた。

幹の太さをたしかめて、大丈夫だと判断すると、わずかな部分を頼りにすると登っていく。

うまい具合に幹にかかっているそれを手にして、ついでにぐるりと周辺を見渡した。

暮れていく空は、まだそれなりに見通しが利くけれど、不審なものはない。

……当たり前だ、目につく飛行物体なんて、あるはずがないのだ。

ゼノやロレンツォが飛ばすことはあるが、それだつて事前に一報が入る。

子供のラジコン程度なら許可は不要だが、場所はきちんと限定されていて、聖殿周辺はまず駄目だ。

だから、目をこらしてもなにも見えるはずがない。——それでもヴァーჯルの勘は、しっかりと警告を告げてきている。

——「なにかに見られている」のだと。

視線ではない、もっと機械的なもので、偵察機だと予測したが、簡単に見つけさせてはくれないようだ。

ちやちなものでは即座に察知されるから当然だが、逆を言えば、それほど高い技術を持つ物がヴァーჯルを見張っているということだ。

それとなくシュリに聞いてみたが、彼は気配を感じていないという。

ロレンツォにも聞いてみたものの、タチの悪い悪戯は最近控えてらしい。……女王のおかげで。

もし他の面々も監視していても、気づけそうな者はいないし、迂闊に問いかければ大事になる。

守護聖は大切な存在だが、こんなふうに見る必要はない。

だから確実ではないが、おそらく、監視されているのは己だけだろう。

探知不可の機械をいくつも入手できるはずがないし、多数配置すれば、流石に気づかれてしまう。

女王に関してはいサイラスがいるのだ、あの男が気づかないなんて、それこそ天地がひっくり返ってもありえない。

アンジュに危険がないのなら、ひとまず様子を見てもいいと判断した。

ソレを感じたのは二日前からなので、まだ情報も足りていない。

無作為なのかと思ったが、ヴァーჯルが外出している間は確実に自分を追ってきているので、標的はランダムではない。

今のところは見られているだけで、攻撃などの気配はないから無害といえる。

それでも、なにかあつては困るので、アンジュと行動するのは避けたのだ。

とてつもなく不愉快だが、四六時中の監視自体はかつての環境と似ているので、耐えることはできる。ただ——わからないのはこれを行っている犯人だ。

よって二日前、存在に気づいてから、ラモートと今まで赴いた星の情報をチェックしている。

守護聖になる前に住んでいた故郷と、トラブルの対処にむかった先。

どちらも、目的のためとはいえ、恨まれる可能性のある行動をした。

己に対してなにかする動機のある者は、そのあたりしか考えられない。

かつてなら守護聖の誰かだとも考えたが、今は除外していいだろう。

……根拠はあまりないのに、そう断じてしまう自分が、少々くすぐったいが。

風の守護聖として動いた結果、勢力が削れたりした結果はいくつかある。

恨みの原因としては十分だが、彼らが聖地に侵入し、事件を起こせるかという点、確率はゼロに近い。

入るためには嚴重なチェックがついてまわるし、危険物は持ちこめない。

聖地へ入る際は過去のデータと照らしあわせるから、なにかで引っかかったらお引き取りを、と言われてしまう。

そもそも直近の派遣先ですら、今は時間の流れが

異なる。

聖地では数日でも、くだんの星では何倍もの時間が流れているのだ。

また、今聖地にいる者たちは、女王就任直後やってきた者が多く、かつ、あまり入れかわっていない。

出入りの商人はともかく、使用人は長い期間勤めるものだし、ある程度マニュアルができるまでは、同じ者で回していくことになっている。

就任直後の大変な時に、しよつちゅう働く者が変われば、教えるほうに時間がかかってしまうからだ。

そんな手間はかけられないと、初期に選ばれたメンバーは、各地から集められた精鋭揃い。

誰も彼も、長い時間を聖地で過ごすことを了承し、なみなみならぬ決意でやってきている。

いくつもの適正テストをクリアした者たちが、こんな真似をするだろうか。

外界とのやりとりは制限されているから、唆されて、というのも難しい。

私邸にもどつてからも情報を漁ってみたが、これぞと引っかかるものはなかった。

ラモートにいた時の敵対勢力のボスなんて、とつくに土に還っている。

当時を知る者は生きてははずなくて、ただ、情報
報の羅列が出てくるだけだ。

「……しかたがない、誰かに相談するしかないか」

どの守護聖に言っても、最後はユエに話が行くだろう。

サイラスなら女王に、タイラーだって同じことだ。心配だけではなく、聖地——女王を守るために。ヴァージルだって他人から相談されれば、余程のことがないかぎり全員に知らせるだろう。

だが、己のこととなると、大事にしたくない気持ち働いてしまう。

けれど、決断を遅くした結果、女王であり恋人になにかあつては後悔どころではない。

ふう、と息をついて、ヴァージルはタブレットから目を離れた。

そして翌日、早朝の聖地を、ヴァージルは一定の速度で走り抜ける。

運動をしないとすっきりしないので、余程のことがないかぎり、ランニングは欠かせない。

相変わらず見られているが、あまり頓着しないことにした。

実害はないし、たとえあつたとしても、一人なら問題ないからだ。

このあと報告に行くつもりだから、それまでの辛抱でもあるのだし。

今通っているこの道は、勿論整備はされているのだが、自然を残したつくりになっている。

鬱蒼とした感じがするためだろう、あまりひとに会わないので、現状ではびったりだし、普段から使っているコースでもある。

べつに、普段だって声をかけられるのが嫌なわけではない。

ただ、できれば避けてほしいランニング時でも、相手によってはお構いなしに話しかけてくるのだ。

会釈程度ですませてくれないと、足を止めなければならず、ペース配分が乱れてしまうこともある。

立てた計画通りにこなせないままだと、どうにも一日しつくりこない。

かといって、執務室に行く時間はズラせないのだから、集中したい時はひとけのない道を選ぶのだ。

こういう時だけは、円滑な人間関係のため、外面だけは愛想よくしている普段の己が面倒くさい。空気の澄んだ中を走っていると、頭の中もクリアになっていく。

完全に周囲の警戒を解いたわけではないが、聖地の中には長いこと走っている。

道も覚えきっているの、考えごとをする余裕もあるのだ。

先ほどからすれ違ったのは、菌類に夢中だという研究員や、綺麗な葉を集めるのが趣味だというどこぞの私邸の使用人。

誰も自分のことに没頭して、軽い挨拶だけですませてくれたので、ジョギングというにはハイスピードな速度を保ったまま、小道を駆けていく。

ひととき大きな樹の側を走り抜けたその時、ちりと首の後ろがひりついた。

まさか、なんて思わない。この手の己の勘は鈍っていないのだから。

一瞬で速度を上げて距離を置いた、次の瞬間。

——どん、と大きな爆発音が響いた。

「——怪我がなかったのはなによりっつーか……まあ、ヴァージルだから当たり前か」

「微妙に失礼じゃないですか？」

ユエの言葉に苦笑して呟いたが、事実だろうと返されただけだった。

他の誰も、アンジュですら指摘しないくらいなので、賛同は得られないらしい。

流石に爆発まであれば黙っているわけにもいかず、聖殿へついてまずユエに報告に行った。

怪我もなかったの、軽くすませようとしたのだが、そうはいかない、と検査を受けさせられた。

問題なしと結果が出る間に、守護聖と女王、補佐官までもが集められていた。

ヴァージルは女王と補佐官を呼ぶことに難色を示したが「知らせないとむくれるぞ絶対」と断言されてやむなくうなずいたのだ。

同時に、年若い守護聖も呼ばなくていいと思っただが、あいつらだって守護聖なんだ、と強く言われれば、反論などできなかった。

やっぱりなんだかんだでユエは首座なんだな、と感心したが、ややこしくなるので本人には絶対に言わない。

事情を聞いたアンジュは厳しい顔をしていたが、怪我がないと知らせていたから、目に見える動揺は少ないようだった。

今は仕事だからと、あくまで対応は女王と守護聖のそれに徹している。

会議室に集まった面々は、改めてヴァーゼルからことの次第を聞いた。

といてもヴァーゼルにわかるのは、ランニング中に爆発物を見つけた——これだけだ。

監視されているらしいことは、ここでは伏せておく。一度に情報を与えては、若い面々には厳しいだろう。我ながら甘やかしている自覚はあるけれど。

「でも……聖地で爆破騒ぎなんて」
怪訝そうなノアの言葉はもつともだろう。

聖地への物流は当然存在するが、検閲はなにより厳重だ。

あからさまな武器は勿論、なにに必要なきちんとした理由がなければ、火気の類は持ちこめない。

守護聖が注文した場合は武器であろうが問題ないが、出入りする人間に対しては徹底的だ。

爆発物そのものなんて、まず許可は下りない。実際、これまでなんの問題も起きてこなかった。

まれに女王への貢ぎ物を装って、あれこれ危険なもの混じっているが、すべて検知できていた。

中身を把握した状態で、調査のために聖地へ入ってきたこともあるが、その際は勿論、周囲に危険の及ばない場所での確認などが行われている。

今回の女王就任前、聖地が荒れていたころは聖地

で働く者にもほころびが生じていたが、それでも検問はきっちり責務を果たしていた。

「爆弾なんて持ちこめなはずなのに」
同意するユエに、ロレンツォはそうでもないさ、と返した。

えっ、と驚いた顔をする若者たちに、ふふ、この状況でも楽しそうに笑う。

態度の悪さにフェリクスが眉をひそめたが、言ったところでこの男が改めるわけではない。

「ひとつひとつは危険でなくても、組み合わせれば火薬になるものは存在するよ」

「——はい、ロレンツォ様の言うとおりです」
一番詳しいだろうゼノが、彼の言葉を受けてうなずいた。

知らせにショックを受けたようで青白い表情だが、この手の説明は自分が適任だと自覚しているらしい。

意を決した様子で、自分から発言していく。

「例えば小麦粉も、使いようによっては爆発します」
ゼノの説明に、ユエたち数人がぎょっとした顔になる。

慌てて「普通に使っている分には大丈夫です」と続いたのでほっとした顔にもどった。

小麦粉の場合は粉塵爆発で、今回とは少し違うわけだが、細かい説明は省いておく。

「なにかが爆発するだけなら簡単だが……今回は偶

然ではないようだな」

シュリが手で弄んでいるのは、爆発のあとヴァー
ジルが見つけたものだ。

かつて箱だったものと、いくつかの電線、そして
デジタルの目覚まし時計らしきもの。

破損していても、簡易的な時限爆弾であることは、
ヴァージルの目にも明らかだった。

「とてもちやちやなつくりと材料です、直撃しても軽
傷ですんでしようね」

「……それは、普通の人間でもか？」
ヴァージルの見立てに疑わしげなユエに、そうで
すよとわずいた。

煙は激しくなるようになっていたため警戒したが、
実際の殺傷力はかなり低い。

しかけた誰かは、敢えて煙を多くして、見つけた
誰かがすぐに逃げるようにしたのかもしれない。

それに、聖地には純粹な爆発物は持ちこめないの
だから、威力を上げられない面もあっただろう。

周囲にガラスなどもなかったから、場所の選定と
してもかわいらしいものだ。

少なくともヴァージルやシュリにとっては、玩具
程度の認識にしかならない。

ちよつと過激な火花だな、くらいだ。
「——だが、意図的なものであることは、間違いな
いんだよな？」

ユエの声は変わらず低い。いたずらであっても、
それで終了とはならないのだ。

紛争地帯ならいざ知らず、こんなものがそのあた
りに落ちていたことはありえない。

なにかのミスでできあがった、という可能性も、
ロレンツォが否定した。

少なくとも爆発させるつもりがなければ、こうい
うつくりにはならない。

時限装置自体は、まあ、子供の理科実験めいたも
のでもありえるが、爆発物を入れる必要はない。

つまり、誰かがこれを作成し、あの場所に置いた
事実は覆らないのだ。

実験のため、子供を持つ親が実験した、という可
能性に関しては、場所から違うと断定できる。

そもそも、周囲にひとの気配はなかった。
実験なら観察する誰かがいるし、火器の使用には
許可もいる。

とはいえ、これだけでは犯人の目星はつきそうに
ない。

ロレンツォとゼノが解析をすることになったが、
ざつと見たかぎりでも、犯人を特定できるようなも
のは見当たらない。

使われた材料はどれも一般的な量産品だから、足
もつきそうにないのだ。

外界から仕入れた者を調べられれば一発だが、こ

の時計は聖地にやってくる行商が扱っているありふれた商品だった。

貨幣は存在しなくても、通販ではない現物を見ての買物をしたいと願う者は多い。

まして聖地は敷地も広く、従事する人間も飛空都市とは桁違いだ。

入手した人物を割りだしたくても、訪れる行商人は毎回異なるので難しい。

この手の犯罪でセットになりがちな脅迫状だの話を聞かないし、本当に唐突な事件だ。

聖地の外でなら、女王への反対論もあるし、過激な言動をする者もいる。

しかし彼らの中に入れるような失態の報告はないし、連中ならこんなぬるい手は使わない。

「同じものがまだある可能性もあるんだよね？」
フェリクスの厳しい表情に、年長者たちがそうだな、とうなずく。

量産できる品だ、ひとつだけとは考えにくい。

いくらたいした怪我をしないと行ってても、驚いて転倒し、打ち所が悪ければ重症にもなる。

なにより、聖地の人々を危険に晒すわけにはいかない。

「……他にあるか調べることはできるんですか？」
アンジュの言葉に、勿論です、とゼノが力強く請

け負う。

王立研究院にも、ゼノの私物にも、探査に使える機械のあてはある。

——でも、とすぐに表情が暗くなった。
「範囲が広すぎるので、探知機が足りません」

有事の際にと様々な機械は揃っているが、聖地全域を調査となると、流石にすぐ解析とはいかない。

爆発しなければただのがらくただ、電波の発生源から割りだすことになるけれど、絞るのは難しい。

「まず人通りの多い場所を優先して、それ以外の場所はしばらく入らないよう通達するしかねえな」
ユエの判断は最も無難なものだろう。

ただし、なぜそうするか理由が必要になる。
現状を包み隠さず知らせると、人々のいらぬ不安

を煽ることになりかねない。
「私がしでかしたことにすればいいだろう」

けろりと笑みさえ浮かべて言い放ったのはロレンツオだ。

「情勢も落ちついたところで、ちよつとしたイタズラを仕掛けようとしたら、調整を間違えてランダムにばらまいてしまった、とでもね」

「いや、しかし……」

たしかに納得するだろうが、今回にかぎっては罪のないロレンツオなのだ。

冤罪を守護聖に被せる、というのも気が引けてしまう。特にユエの性格ならなおさらだろう。

フェリクススの渋い顔に、ミランが楽しそうに笑ってみせた。

「じゃあ、面白かった僕がくすねて放りだしたことにすればいいよ」

「だったら原型をつくったのは俺ってことで……」
迷う首座をよそに、ミランとゼノが共犯に名乗りをあげる。

「一人だけいいかつこなんて、させないよ?」

茶化すように言う緑の守護聖に、地の守護聖が苦笑を返す。

こうしている間にも、誰かが裏道に入るかもしれないのだ。長く考えている猶予はない。

ユエはそれでも数秒悩んだらしいが、結局小さく悪態をつけてから、王立研究院を通じて聖地の人々に触れを出す。

同時に、職員が大通りの探査に入りはじめた。

ヴァージルはシュリを横目で見ると、同じタイミングで目が合った。

無言でうなずきあい、お前が言えという圧を受けて口を開く。

「では、俺とシュリはそれ以外の場所を探しますね」

「見つけたら爆発させていいのか?」

すぐにも出ようとしたら、ゼノが慌てて「無力化する装置を持ってきます!」と出ていった。

解体はできないが、万一にも怪我の可能性を考慮

すれば、二人が適任だろう。

爆破させるつもりでシュリに、ユエが慌てて待ったをかける。

怪我をするわけがないと断言しているが、そういう問題ではないのだろう。

実はヴァージルもそのつもりだったが、ユエが結構本気で怒っているの、言わなくてよかったと思ってしまう。

「……シュリ、ヴァージル、くれぐれも気をつけてくださいね」

最適解だと判断したから、女王も反論はせず、けれどきつちり釘を刺す。

心配そうではあるが、女王として存在する彼女の目には、それ以外の感情はない。

恐ろしいほどの切りかえだが、それもヴァージルが好むところなので、文句はない。

「怪我ひとつなく帰還しますよ、賭けてもいいです」
守護聖としても、恋人としても、アンジュを悲しませるのは本意ではない。

にっこり微笑んで断言してから、シュリと二人で軽く礼をする。

安心したアンジュの表情を確認してから、では、と部屋を出た。

ゼノがもどるまでに、適当なところで立ち止まると、聖地の地図を表示させ、二人の分担地域を決め

にかかる。

ざっくり東西で分けて、被らないようにすることで合意した。

「お待たせしました！」

もどってきたゼノから道具を受けとると、シュリと別れて捜査をはじめる。

聖地の地図を表示し、過去の己の経験に照らしあわせ、どこなら配置して効果的かを考える。

いくつか目星をつけてから、見回るにあたって無駄の少ないルートを計算し、いつもよりペースを遅くして走って行く。

守護聖としての執務は最低限でいいと許可が出たので、ほぼ一日かけて、シュリと共に聖地中を巡って調査にあたった。

途中からはメインの道を精査し終えた王立研究院の探査機も併用したので、実際は全域ではなかったが、それでも相当な範囲を見たと思う。

ひとつも見つからないでほしいと願いつつ搜索したのだが——残念ながら、シュリと合わせて十個ほどが発見された。

ゼノの用意した道具を使い、無傷で確保したそれらは、概ね構造が似ている。

といっても簡素なものなので、個性が出る、とまではないかない。

こんなことを複数人がしているとは考えたくない

が、まだ判断は軽率だ。

危険物は隔離したのち、王立研究院の会議室で、研究者数名と共に調査結果を共有する。

大通りでは見つからず、結局、見つかったのは裏道ばかりだった。

一般人が見つけることもなかったたので、混乱が起きなかつたのは幸いだ。

シュリと共に見つけた場所を表示させると、ヴァーシルが検討をつけた地点が多かった。

「ゲリラ戦の地雷のようだな」
「あなたもそう思いますか」

「ああ、……まあ俺は、お前ほど詳しくないが」

それでもシュリだって、市街地での乱闘経験は豊富だし、守護聖になってからの荒事でも、二人で内戦地に赴いたりした。

知識的には十二分に持っているはずだ。配置場所に関しては、調べればある程度は素人でもできるが——

「……結果待ち、ですかね」

考えても答えは出そうにないので、いったん思考を停止させる。

固まった頭をほぐすように首をふった。

とりあえず、ほぼすべての爆発物は回収できた。この一度ですめばいい、と思ったが、口にするのも嫌な予感があったので、やめておく。

「ごたごたが片づいてから、打ち上げでもしましょうか」

王立研究院から出ると、シユリに声をかけた。

本当はこのまま飲みに行きたいところだが、ヴァーヂルへの監視の正体が不明のままだ。

シユリを巻きこんだところでなんの問題もないが、借りをつくりたくもない。

報告はすんだし、疲れているだろうから帰つていといと告げられている。

一日働いた代わりに、日の曜日ではないが休んでもいい、とも言われて、それには二人とも不要だと返したけれど。

「そうだな。その時までいい酒を入れておこう」
シユリもまだ気は抜けないとわかっているからだろう、先の約束だけしてくれた。

以前から酒は共に飲んでいた仲なので、あっさりとして承される。

では、と挨拶を交わし、自分の私邸の方向へ足をむけた。

探査機を使用しておかげだろう、空からの視線は感じなくなっていた。

四方八方から調べていたから、いくらステルス機能つきでも、飛ばしては気づかれてしまうので撤去したのだろう。

このままおとなしくしてくれればいいのだが、そ

うでなければ改めて報告の必要がある。

明日の対応次第か、と息をついて、さっさと寝てしまおうと決めた。

片づかなければアンジュとのんびりもできない、それは由々しき問題だ。

ベストコンディションを保つことが、今できる最適解だろう。

見慣れた己の邸が見えてきて、認証を解いて門を開けると、しばらくして邸のほうの扉が開いた。

そこから顔を出したのは使用人ではなく、なぜか私服の恋人の姿。

「え……アンジュ？」

ふふ、と悪戯が成功した顔で笑う彼女が、小走り駆けよってくる。

慌ててこちらにも急ごうとした時、背後からも走ってくる気配があった。

敵意はないが、まずはそちらの対処、とふりむくと、王立研究院の者が息せき切つてやってきた。

顔も名前も見覚えがあるその人物は、胸になにかを抱えている。

「……なにかあったんでしょうか」

距離的にはアンジュのほうが近かったのですが、立ちどまったヴァーヂルのそばで首をかしげている。

特に報告は受けてないですけど、と呟く顔は女王のものだ。

「アンジュ、あなたは どうしてここに？」

やや早口で問いかけると、はにかんだ笑みをこぼした。

「お疲れ様ですって言いたくて、きちやいました。それに……最近、会えていなかったのよ」

監視が気になるとは言わずに調べたいことがあるからと避けていたため、寂しがらせていたらしい。

自分だって寂しかったが、彼女も同じと知って、不謹慎だが嬉しくなる。

今は視線を感じないし、早朝のランニングは一人でこなせば、アンジュに危険はないだろう。

「調べものの邪魔はしないので、一緒にいてもいいですか？」

「ええ、勿論です。ただその前に……」

かわいばかりのお願いに快諾していると、走ってきた研究員が門の前に到着した。

「すみません、こんな時間に……」

恐縮しきった顔で謝りながら、何うように視線を送ってくる。

ヴァージルは安心させるようににこりと微笑みかけてやった。

「なにかあったのでしょうか？」

言外にはやくしろと含めたのがわかったのか、はい、とうなずいて胸に抱いていたものを見せてくる。

それは、一見ただの小箱だった。

少し大きいのが、ヴァージルの手なら持てるくらい
の大きさだ。

「ヴァージル様へ、と書いてあつて……今日は忙しかったですし、弾みで混ざってしまったのかと、慌てて持つてきました」

声をかけようとしたらいなかったもので、慌てて連絡もせず走つてきてしまいました、と顛末を話す。

少々間の抜けた話だが、咄嗟の時というのは判断力も低下するものだ。

一緒についていたカードには、ラモートの文字でヴァージルの名前が書いてあった。

たしかに今日は、爆発物を探していた都合、似たような大きさのものも回収していた。

混じっていたという言葉も、ありえなくはないだろう。

王立研究院の職員が持つてきたのなら検査済みだろうが、送り主の名前がないのが引つかかる。

危険ではないと判断しているからだろう、職員はどうぞと善意のかたまりのような笑顔で箱をさしだしていた。

「アンジュ、一応、離れてください」

——だが、警戒は捨てられない。

ヴァージルの低い声に、アンジュもなにかを感じたのか、反論せずはい、と後ろに下がる。

瞬間、研究員が足を踏みだした。——手に持った

箱に指先を滑らせてから。

微かに聞こえた電子音、それだけ聞けば、ヴァー
ジルに迷う理由はない。

すぐさま研究員の手から箱を奪いとると、力のか
ぎり振りかぶって、空へと投げた。

ついで、念のために持っていた銃を懐から抜き、
過たず標的を撃つ。

強烈な爆発音と共に、空にあまり美しくない火花
が散った。

「アンジュ！」
肩にかけていた上着をかぶせ、万一にも飛び散っ
てきた火薬が当たらないよう配慮する。

それから、研究員の腕をしっかりとつかんで逃が
さないようにした。

放っておいても聖地からは逃げられないし、自死
すること自体はどうでもいいが、他にもこんなもの
があつては困る。

そのあたりを聞きださなくてはならない。

「……こんなふうになくても、逃げないさ」

ぼつりと呟いた犯人からは敵意を感じない。

すなおに拘束を解くつもりはないが、不気味なほ
どに淡々としていた。

「——サイラス、とりあえず私は無事だから、連絡
するまで待っていてくれる？」

状況はわからないままだが、アンジュは素早く執

事に連絡をとっていた。

でなければ大事になつてしまうので、連絡自体は
ありがたい。

「ただ、他にも爆発物があるかもしれないから——」
「ないよ、もう」

不遜にも女王の言葉を遮った上に、出てきた言葉
が事実だと思えるわけもない。

「一般人をまきこむつもりはないから、安心してく
れたまえ」

「——信じられるとでも？」
犯罪者の科白を信じたつて、バカを見るだけだ。

低いトーンでの威圧に、しかし研究員は怯えるど
ころか嬉しそうに破顔した。

「そうそう、その顔！ やっぱりキミはその顔がい
いよ！」

懐かしいね！ と悪びれもせず笑い続ける姿に、
アンジュが驚いて一歩近づこうとして、やめる。

危険回避のために正しい判断だ、ヴァージルも
職員の手を引き、会話は聞こえても安全が確保でき
る位置に離れておく。

他の気配はないので単独犯のようだが、爆発物が
あるともかぎらない。

「心配しなくたって、もうなにもしない、飽きたか
らさ」

「飽きた？」

腕痛いなあど呑気な文句が出たが、拘束具がないのでどうしようもない。

だが、できれば触れていたくないと思わせる嫌な気分が強くなっていた。

研究員はあつげらんかんとした様子を崩さない。

ひとの話を聞かず、己のしたいことだけをする、けれどステルス能力を持つ探査機をつくれるほどの実力を持つ人物。

——ヴァージルには一人だけ心当たりがあった。

だが、そんなはずはない。

「カンデル……？」

微かに震える声で名を呼ぶと、職員はぱつと表情を輝かせた。

「よくわかったな！ さすが、わたしのヴァージルだ！」

「ど、どういうことですか……？」

アンジュが驚愕しきりの声を出す、どういうことかはこちらも知りたい。

だって、カンデルは——

「俺が……ラモートにいたところに会った、ただの人間です、今も生きているはずがない」

自分に噛んで含めるような調子に、アンジュもはつとなる。

カンデルはただの研究員だ、サイラスのような特別扱いもされていない。

ヴァージルが守護聖になってから相当な年数が経過している。とつくに寿命がきているはずだ。

当時と外見もまったく違うが、それはいくらでも変えられる。

誰かがなりすましていると考えるのが妥当だが、なんの意味もない。

だがカンデルと名乗る人物は、愉快げに笑いながら「じゃあタネあかしだ！」と道化のように片手だけを広げてみせる。

「女王にもわかるよう説明しよう。わたしは、俗に言う天才というやつでね」

ラモートが産んだ奇跡の大天才と名高い研究者、それがカンデルだった。

証明した定理の数々は、オウルでも通るくらいだとロレンツォが舌を巻くほどに。

しかし悲しいかな、内戦続きのラモートでは、実力を発揮するのは難しかった。——ある一分野を除いて。

軍事関係の開発を次々に成功させたカンデルは、ヴァージルの所属する軍では最高権力者に並ぶ力を持つていた。

当然、超重要人物なので、二十四時間護衛がつく。ある時からボディガードに選ばれたのが、ヴァージルだった。

「実力もあつたし、なにより目が気に入ったんだ」

「……目」

アンジュの呟きに、そうさ！ と答える姿だけ見れば、まるで雑談のようだ。

「つめたくて、なににも興味を持ってない。任務を淡々とこなす、きれいなお人形でね！」

しかしカンデルによって語られる過去に、アンジュは無表情をなつていく。

「どうせ隣に置くなら、強いのはもちろん、きれいなほうがいい。だからヴァージルを選んだんだ」

我儘を通せる立場にいたカンデルの願いはあっさり叶った。

軍としても、実力があがり反抗するおそれのないヴァージルは適役だったのだ。

以来、かなりの期間、必要な任務以外の時はカンデルに従うことが多かった。

大規模なプロジェクトがはじまり、別大陸の研究機関にカンデルが行くことになるまでは。

そしてその後、ヴァージルは守護聖になった。

「プロジェクトはおもしろかったんだが、技術が足りなくてね」

頭の中で理論ができていても、実行に移すことは不可能だった。

苛立ったカンデルは、一計を案じることにした。「可能になるまで待てばいい——ってね」

しかし、寿命のある人間の身では、待ててもせい

ぜい百年と少し。

見込みでは、数百年かかる見通しだった。

だから、今までの功績で手にした莫大な資金でつくりあげたのだ。——冷凍睡眠装置を。

「国もわたしの頭脳を惜しんでいたから、協力してくれたのさ」

おかげで安全も確保できたから、カンデルはその時点で浮かんでいた理論や数式をすべて託し、本人は眠りについた。

カンデルがあらかじめ指定した水準に達したところで睡眠を解除し、集められた資料などから新たな理論を展開させる。

気のすむまで実験をし、飽きたり物足りなくなつたらまた眠る——そんな生活を繰り返したおかげで、今もまだ生きているというわけだ。

そんなある時、ヴァージルが守護聖になっていたことを知つたのだという。

眠って起きてという生活も、知的好奇心を刺激されて面白かったが、少々退屈してきていた。

聖地の設備は最新鋭と聞いていた、一度見てみたいと興味を持った。

そこで姿を変え、偽の身分を手にして、王立研究院の適応試験を受けた。

「で、聖地へやってきた、というわけだ」

「……あなたの能力なら可能でしょう、ですが、適

性検査は……」

コミュニケーション能力がないわけではないが、研究以外は放っておきがちな性格だ。

女王への忠誠心なんてあるわけないし、まともな倫理観も持っていない。

己が開発したものが、何万人の命を奪っても、心が痛むことはないのだ。

王立研究院の職員には、宇宙のためなら犠牲はやむなしという考えが必要だ。

しかし、カンドルのように、研究のためにちよつと死んでもらう、なんて思考は許可されない。

本来なら、適正試験にパスするはずがないのだ。「傾向と対策だよ、望まれるものを計算し、それに沿うよう、ちよつと自分をいじつただけさ」

答えを予測し、そのとおりに対応できるように。言葉にすれば簡単だが、脳波などまで調べるはず

なのに、それすら欺いてみせた。恐ろしくかなり危険な方法をとったのだろうが、無事成功して、堂々と聖地へ入ってきたわけだ。

「最初はキミを見て満足したんだよ。ああ、昔とかわらないなって」

つめたくて、お人形みたいで——という表現に、アンジュと出会う前の己を思い返す。

あのころはそう言われても不思議ではない自分だった。

「だけど女王試験が終わり、もどってきたキミは、ただの恋する人間だった！　なんてつまらない！」
言葉の途中ではじめて、カンドルが忌々しげに眉を寄せて叫ぶ。

アンジュと恋仲になり聖地へもどると、前からいた人々は一様に驚いていた。

女王と恋人という事実だけでなく、守護聖たちがみな変化していたからだ。

といってもよい変化だったし、宇宙の修復が最優先だったので、誰も彼もことさらに騒ぐことはしなかった。

結果的に宇宙は安定し、女王と守護聖の連携もとれていたの、聖地の人々はよかったと祝福しさえした。

尊きかれらが認めているのなら、否定するわけがないとも。

けれどカンドルには冗談じゃなかった。気に入っていたおもちやが、まったく別の姿になってしまった、そんな心地だったのだろう。

「あのころのヴァーシルが見たくって。でも、直接あれこれは持つてこれられないから、まずシステムをダウンロードさせたんだ」

「あれは、あなたが……？」

「そうさ女王陛下。パーツ取りをしたかったから、なるべくたくさん巻きこんでね！」

王立研究院の最新機材を、部品と呼んで憚らない。多くの機械を沈黙させ、倉庫に保管させたのは、くすねてもバレにくいようにするためだ。

悪用する者が聖地にいるわけがない——厳しい審査を越えた者だけなのだから、という根底が覆っていたのだ、他の者を責めるのは酷だろう。

つくりあげた機械でヴァージルを監視し、きちんと気づいたことから能力が鈍っているわけではないと確信した。

だから次は昔のような姿が見たい、と爆発物をしかけたわけだ。

「配置はキミがよくやってたのを参考にしたんだ、似てたかい？」

「……ええ、完璧でしたよ」

どうりで己の予測した地点に多かつたはずだ。

自慢げなカンデルに、背筋を冷たい汗が走る。

これらを苦もなくやってのけて、なにひとつ罪の意識がない。この手の人間が一番恐ろしいものだ。

「最新機器はたのしいけど、好きに研究できないから、そろそろいいかなって。だから最後に昔のヴァージルを見たくなつたんだ！」

「——それだけのために、こんなことを？」
アンジュの低い声に、そうだよ？ と無邪気にならずく。

「だって見たかったんだ。見れて満足だよ」

にっこり笑う顔は毒気を抜かれるほど天真爛漫で、だからこそ恐怖を感じる。

カンデルは先のことをなにも気にしていない。やりたいことをして、見たいものを見た、もうなにもしないというのも本音だろう。

とはいえ、放置するわけにはいかない。

まずはサイラスを呼ぶようアンジュに頼んで——と思っていたら、恋人はカンデルの前に立っていた。

青い目には激しい怒りがたたえられている。

「私はそのころのヴァージルをほとんど知らないけれど」

なにせ自覚はなかったが一目惚れだったので、アンジュの前でははじめから感情がむきだしだった。

「家族のことや、故郷のことを大事にしている、その上で宇宙も守ろうと決めて、私と愛し合う勇氣を持つてくれた」

博愛主義者にならなくてもいい、と受けいれてくれたことを思いだす。

一緒に生きていきましようかと微笑んでくれたアンジュは、女王であり唯一の恋人だ。

彼女を失つたら、己はまたなにも感じなくなるかもしれないけれど、今は違う。

そして、そんな自身を、ヴァージルは決して嫌いじゃない。

「最高の守護聖で恋人なんです。自分の好みを押し

つけるだけのあなたなんかには、どうこう言われたくない！」

耐えきれず上げた手は、けれど叩くことなく下げられる。

けれどアンジュの言葉も、カandelには理解不能らしい。

きよとんと首をかしげた姿は、今なら子供のよう

に見えて、とても哀れでもあった。

冷めた目のままアンジュはサイラスに連絡をとり、

ほどなくやってきた数人の兵によって、リアは連行されていった。

聖地でここまでの犯罪が起きたことはないの、

対処をどうするかも決めなくてはならないだろう。

それより先に、聖地へ招聘する者の選定方法の見直し

が急務だが。

どのみち、ユエが絶叫することは予想できて、耳栓でも持つていくかと現実逃避じみたことを考えてしまう。

「見られている気はしたんですが、確信がなくて：報告せずに申しわけなかったです」

とりあえず邸に入りましょうと促して、ソファに腰を落ちつけてからまず謝罪する。

結局黙っていたことになってしまった上に、修羅場にもつきあわせてしまった。

果論だ。

状況を他の守護聖たちが知れば、懇々と説教されることは間違いない。

うつむいてみると、ふわりと気配が動いて抱きしめられていた。

「怒ってないですよ、あんなの、わかるわけないですし」

予測がつくほうが嫌です、と続いて、たしかに、と思ふ。

ぼんぼんと背中を叩かれて、胸にたまっていた重い息が吐きだせた気がした。

「まあ、ああいうのが何度もあると困りますけど」「流石にないですよ」

冷凍睡眠を重ねて聖地にこられるほどの人物など、他にはいない。……いないはずだ。

あんなとんでもないのばかり周囲にいたと思われ

るのも心外だし。

「……にしても、失礼なひとでしたね」

口を尖らせていたので軽いキスを送り、しかたないですよ、と苦笑いをこぼす。

「当時の俺は、カandelに人形扱いされても、護衛ができればいいとしか思っていませんでしたから」

綺麗な存在を置きたがる者は多く、そういう意味でもヴァージルは人気だった。

だから、そんなものか、という程度の認識でしか

なく、任務に便利ならいい、くらいで。

誰も彼も、本人の意思はお構いなしで、むしろ不要だという空気さえあった。

ヴァージルの説明に、アンジュは我がことのようにふりふりと怒っていた。

「そういうひとたちにも、言えるものなら、ヴァージルのいいところを言ってみてやりますよ」

そりゃあ顔は綺麗だし、声もいいですけど、それだけじゃないんです、と力説する。

普段は照れてあまり言ってくれないが、今夜はカンドルのせいでタガが外れているらしい。

「鍛えてるけどムキムキじゃない筋肉も、昔はなんとも思ってたけど、抱えてもらう時に安心するからいいなって思いますし、笑った顔はかわいいし、苦手なものが出た時、実はちょっと嫌そうにするのも微笑ましいし……」

「——ちよ、ちよつと待ってください」

ひたすら好きなところを述べ続けるアンジュに待たをかける。

いつも己も似たようなことを喋り倒しているが、同じことをされるとこんなに恥ずかしいとは思わなかった。

耳まで赤くなっている自覚があるので、無駄と知りつつ口もとを隠してしまう。

アンジュはそんな姿を見て、ふふつと愛おしげに

笑うばかりだ。

「まだ言えますよ？」

えへん、と胸を張る姿は愛嬌があるが、一度に摂取しては過剰すぎてオーバーヒートしそうだ。

今夜はここまででとギブアップして、代わりにこちらから抱きしめる。

うまく表せない気持ちの代わりに幾度かキスをすれば、先ほどは厳しかった青い目が甘く溶けていく。

「……寝物語には物騒ですが、軍時代の話をしてもいいですか？」

カンドルたちの話をするつもりはないけれど、楽しい話もありない。

今までは避けていたが、そろそろ、話してもいいのではと思ったのだ。

躊躇いがちに問いかけたが、アンジュはすぐにならずいて、勿論ですよ、と明るい声を出す。

「ヴァージルの過去ですから、聞かせてください」

慈愛に満ちた表情は、女王と似ているけれど違う、恋人のすべてが知りたいという顔だ。

明日には守護聖に報告をしなくてはだし、絶対に叱られもするだろう。

怪我はなかったとはいえ、起きないほうがよかつたアクシデントだ。

それでも、こうしてアンジュと過去を話して眠りにつけるのなら、悪いばかりではない。

感謝する気はないが、きっかけになったのはたしかに事実だ。

こうして積み重ねていける事実^に感謝をしながら、まずはおもしろおかしい話からと話題を選びはじめるのだった。

後書き

なんとか形になりました。
そして一頁余ってしまったので、
ちょっと長めにトークを挟みます。

自身が紙で読み返したい派なので、再録を出すことにしました。
ちなみに、文字が大きいのは当方の都合です。
小さい文字は読みづらくて……

あと、総集編は「一緒」をつけるという、
自分の中での決まりがあるので、今回の題名になっています。

蓋を開ければ、結局、半分ほどがシリアスになりました。
好き嫌いが出そうなものは後ろにまとめたので、
ほのぼのだけが読みたいたは、
前半だけ読んでいただければと思います。

個人的には書きたいものをほぼ全部入れられたので、
満足しました、大変でしたが、楽しかったです。

読んでくださったかたも、少しでも楽しんでいただければ幸いです。
あと、感想などいただけると嬉しいです。

奥付

隣で一緒に

発行日：2023.05.04

印刷：プリントオン様

発行：十六夜あき / Colors of

Pixiv：3724939

メール：akiisayohi@gmail.com(あまり見ないのでお急ぎのかたは別手段でお願いします)

ツイッター：@akiisayohi

マシュマロ <https://marshmallow-qa.com/akiisayohi?utm>

↓ QR コードでも送れるはずです↓



同人誌はあくまでグレーゾーンです
公式の目にふれないよう配慮をお願いします

転載、複製、ネットオークション、フリマ出展一切禁止